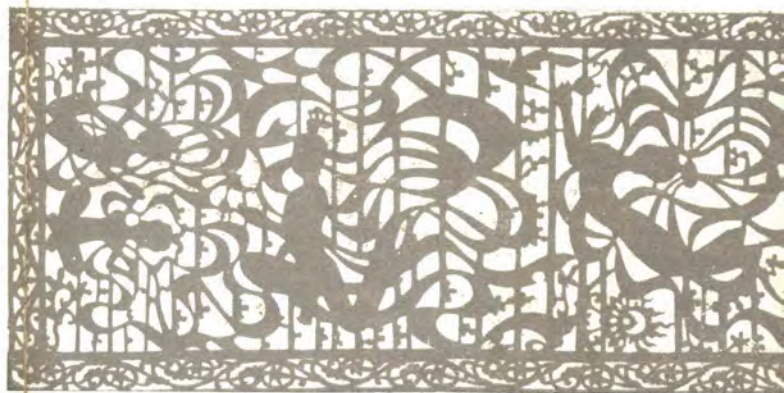


# 民族の明日を求めて

表紙 法隆寺「金銅灌頂幡」の一部



灌頂幡とは出家する道場を莊嚴にするために、堂内や庭に懸けた幡のことである。この幡は天女と奏樂を透し彫りした、全長十七尺金銅製の大作である。今日のデコラティブ・アートにもつアーツ・アンド・クラフツには、造型感覚に於て頭をかしげさせるものが多いが、この天平時代のきつちりとしたまった気品の中には、我々の祖先のもつ信仰と謙虚さに於て、異質の審美眼を感じさせる。これこそ造型力というもののデーモンではなかろうか。

国民文化研究会

第三回全九州研修会報告













合宿参加者全員 一佐賀県社会教育会館前一

### 会食後

未来は予言すべからず

しかれども友らよ

日本の前途は平らかなる波路ゆく

船のごときか

否、世界をうしはく、いのちの悲劇

日本の運命——

大波こえてはやちにまむかい

行きつゝあるいま

日本の急進行程——

見よ、前途の暗雲墨のごとく

過去には悲嘆の伝説と宗教と

しかして今

われらのつとめをわれらに命ずる

祖国日本の教令をきけ、友らよ。

『なすことのなくてをばらば世にながき

よはひをたもつかひやなからむ』



全体討論（第二日の夜）



合宿場さして  
（春日道場をのぞむ）



講義（質問第一声）



朝のひととき（体操終了後）



コンパ（藤本父子登場の場）



班別討論（第二班）



## 絶 唱 二 曲

作 詞 江 頭 俊 一

作 曲 成 富 正 好

う つ - ゑ み - の い の ち た - ゆ と も  
ま す - ら を - の か - な し わ が ひ —  
よ ろ づ よ ま で に

作 詞 寺 尾 博 之

作 曲 名 越 二 荒 之 助

た - お - れ - た - る - と も - を な が か ず  
い つ - の ひ か わ も た ど り ゆ く み ち  
と し お - も へ . は

(本文 204 頁 参 照)



## は し が き

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまういたり、「あたりまえのこと」が、かえってものめずらしげに見られたりしている。国を愛することも、民族の道統を求めるときもなにか、かたくなな人達だけのものにされてしまって、現代——終戦後——の日本に生きる人にとっては、それらははれものにさわるような、こわいしろものにされたままになってしまった。しかし一方では、こんな状態に、どうにもあきたらない人達が、日本のあちこちに見られだしてきた。その人々は、決して右翼でもなければ、偏狭な国家主義者たちでもない。いわば、世界各国の人々と同じように、自分の祖国を愛したい、とおもっている人たちであるし、自分の祖国のよさを正確に知りたいとねがっている人たちでもある。また、日本のよさを世界の人たちに知らせることが、国際社会に貢献するための日本人のつとめであると考えてきている人たちである。こうした人たちのなかから、大学教授、学生、小中高の教師、それに医師も会社員も工場に働く人も、一しょになって一つの合宿がいとなまれた。あらゆる階層、年令層の人が、三泊四日の

貴重な時間を、おしげもなくさいて集ったということだけでも、なにか時代の一面を物語っているかもしれない。ことに各人の千差万別の立場をはなれ、利害打算を忘れて語りあったことは、得がたい記録を作ってくれたことにもなった。それを編集してこのような小冊子ができた。

もしこの冊子が若い青年たち——歓楽の追求、奔放な性の追求では、自由の精神がつかめないように感じだしている多くの人たちにも、もし縁があつてこの書が手にとられることがあるならば、それはどんなにか意義のあることであろう。編集者たちにとつても、この合宿の参加者たちにとつても、また同じ思いにつながる多くの人達にとつても——。

# 目次

はしがき

合宿実現のために

準備経過報告……………一

合宿人員の構成……………八

合宿第一日 友らの邂逅……………二

|| 研究方法論を中心に ||

開会挨拶「共通の広場を形成するもの」……………瀬上安正…二

運営上の注意……………末次祐司…三

全員自己紹介……………三

「人間性ノ解放ノの道—国民共同体の現実基盤—」…小田村寅二郎…四

人間研究のねらい—言葉とイデオロギー—宗教神話にきざまれた人間性—言葉と民族

と国家―国家主義と人間の宿命―選挙制度と人間関係―株式会社組織と人間―制度機  
構主義主張の限界―聖徳太子の共に是れ凡夫と日教組のいう団結―人間性解放の道

スポーツ

対立という錯覚

U

子…三七

班別討論「人間性と同胞感をめぐって」

三〇

合宿第二日 民族の意志回復のために

三三

―天皇制と外交問題を中心に―

「天皇制の本質」

福岡大学教授

森

三十郎

三

戦後における天皇制観の検討―占領憲法無効論の論拠―外国の君主制との本質的相違  
点―欧米の君主制に基いた占領憲法―国体政体にかかわる国家形態の問題―国体にか  
がえる天皇制のエトワス―鞏固なる純粹君主制―実力の権威に立脚しない天皇制―  
同胞の血と土に根ざす君主制―絶対的分離と絶対的の和合にたつ君主制―家族主義国家  
観にたつ君主制―民族固有の神観に基く君主制

「日中関係の過去、現在及び将来」

岡山大学教授

木

下

彪

吾

大陸に活躍した九州人士の系譜―明治初年から日清戦争三国干渉まで―露清密約、日英同盟から日露戦争まで―日露戦争後の中国及び列強との関係―国民政府の排日抗日と日支事変―現在の日中関係―両国の将来

会員研究発表

「道徳の周 囲」……………若松高校教諭 山 田 輝 彦…二〇

増大する全体主義的傾向と個人の自由の問題―機械と組織による人間疎外―敗戦による国家神道と儒教道徳に基く価値観の崩壊―儒教教育の果たした役割―戦後教育の特長―道徳のアプリオリの規範性と自律性の崩壊―道徳は人為的後天的という道徳観―デューイの道徳観―ハッチンズやマリタンによるプラグマチズム批判―ニヒリズム克服をめざすマルキシズムとカトリシズム―戦後教育の抽象性と国家観の欠落

「バイブルを統綜する日本文化の遺法」…笠岡商工高校教諭 名越二荒之助…二三

旧約の創世記と古事記上巻―モーセと神武天皇―イエスキリストと聖徳太子―キリスト教精神に対比せられる日本文化の系流―世界に遍満せしめるべき日本文化の遺法

スポーツ

チャーターチルとモーセ……………妹尾大之祐…二三五

「生理学・医学の流れ」……………都城中央病院長・医学博士 小川幸男…二四〇

自然科学の応用方法に誤謬はないか―生理学医学から精神身体医学への流れ―生命医学の立場に立つ東洋医学の方法

スポーツ

綜合科学者……………末安悟郎…二四一

「階級史観と民族の問題」……………鹿児島大学助教授 川井修治…二四九

階級史観とは―階級概念―階級の範囲の不当な拡大―階級史観は近代の中間階層の動きを説明することができない―階級対立は必ずしも階級斗争―革命を意味しない―

対立―斗争にあらずして大和調和の世界を求めよ―共産主義は民族（国家）を原則的に無視する―共産主義は戦術的に民族（国民）を利用する―結語・国民共同体的基盤の確立へ

班別討論「民族の運命につながる諸問題」……………二六二

合宿第三日 思想の流れをみつめて……………二六三



Ⅱ 社会主義と教育問題を中心にⅡ

「日本における社会主義の運命Ⅱ革新陣営の発生と現状及びその将来Ⅱ」

..... 日本労働者教育協会理事 菊池 紳 隆...一六三

社会主義とは何かー日本における社会主義ー日本における社会主義の運命

スポーツ 資本主義という迷信 ..... N 生...一六四

講師との一問一答「社会主義への疑問」 ..... 一七六

スポーツ 民主社会主義者開眼せよ ..... Y 生...一七六

スポーツ イデオロギーが商業を否定した一例 ..... 杉本 幸 二...一八三

「戦後意識の論理Ⅱ現代教育刷新の基本課題」

..... お茶水女子大学助教授 勝 部 真 長...一八七

教育勅語と教育基本法ー独立国家形成に努めた明治四十五年ー民権論から国権論への

発展ー大正、昭和を通じてみられるデモクラシーからナショナリズムへー敗戦後の人

権尊重主義ー民主主義のルールを形成するものー民主制下における政治と教育ー教育

勅語制定の裏面にあるもの―道德教育のねらい

講師との一問一答「教育刷新をめぐって」……………一九九

連作「ひぐらし」……………百武礼之……………三〇三

コンパ「新しい精神の交響楽」……………三〇三

〔スポット〕 コンパによって知る大正昭和の貧困……………富岡栄八郎……………三〇五

合宿第四日 よろこびと前進のために……………三〇七

|| 高らかな詩的精神とともに ||

「合宿最終日をむかえて || 詩的精神興隆に期待するもの」……………小田村寅二郎……………三〇七

本合宿の要点―日本の歴史を伝えなかつた大人達の罪―科学振興の根柢を培うもの―

新しい論理主義の迷信―言葉のもつ生命力―魂の分裂を促しつつある現行学校教育―

明治天皇の博大なる詩的精神―明治天皇のことば観―明治天皇の人生観自然観―自然

を統綜する人生観―人間性をまもる学問の方向

全体討論「今後我々は何をなすべきか」……………三三三

合宿感想集

連 作「合宿しぬびの歌」……………高瀬伸一…三九

私欲とイデオロギーを超えたもの……………奈良女子大学 笹川幸子…三〇

合宿意気に感ず……………長崎大学経済学部 田川和昌…三〇

人 生 の 開 眼……………昭和女子大学 山口純子…三一

ここに本当の先生があつた……………鹿島工業所 小島晃…三三

祖国の根柢を培うもの……………鹿児島市立伊敷中学教諭 今村豊重…三四

混乱の中に見出した薄明……………吹田市立豊津中学校教諭 岡崎博…三四

あふれくる救世の自信……………八代工業高校教諭 藤本辰男…三五

すべてを覆いつくすもの……………修猷館高校勤務 行武靖枝…三六

故郷には多くの里人がいた……………会 員 加藤善之…三七

感想集を拝読して……………会 員 宝辺正久…三〇

編 集 後 記……………名越一荒之助…三〇

国民文化研究会の歴史をきづいた人々（一部紹介）……………三四

佐賀合宿を運営した講師並びに会員紹介……………三七

国民文化研究会が残した三つの足跡……………三五〇

# 合宿実現のために

—準備経過報告—

九州、中国の大学、高校その他各事業場に職をもつ我々が、国民文化研究会を作つて既に三星霜を迎える。その間我々の業務の最大なものは学生青年を対象にして行う思想訓練合宿であつた。第一回は昭和三十一年八月、霧島に於て全九州学生青年約百名を得て挙行した。そこでは「現代日本の直面せる諸問題」というテーマのもとに、社会主義革命理論の誤謬の究明と、現代日本人の精神的支柱の問題に焦点をしぼり、四日にわたつて真剣な討議が重ねられた。(この間の消息は「混迷の時代に指標を求めて」と題する合宿報告書に詳述した。)第二回は昭和三十二年八月福岡と岡山の二ヶ所に於て、参加者夫々約百三十名、約六十名を得て大々的に挙行した。そこでは「動乱の世界における日本の進路」というテーマのもとに、国民生活向上刷新の根柢を何処に求むべきかを、日本思想史の源流にたつて究明した。(この内容は福岡の場合は「民族自

立のために」、岡山の場合は「民族復興の根柢を培うもの」と題する合宿報告書に詳述した。）

このような過去二回の経験は、我々に合宿運営の技術的能力と、現代が我々に要求している国民的課題に対する確信とをうえつけた。その成果は参加者のみならず、我々会員の切蹉に大きく寄与したことは覆うべくもない事実であった。折から勤評をめぐる日教組がその革命主義的本質を露呈しはじめた。それに呼応して九州各地に新しい教職員連盟の誕生を見るに至った。それは申すもおこがましいことながら、我々会員の研究成果がその潜在的一因であったのである。教職員連盟組織化とともに会員は日教組問題で席あたたまるいとまなく、第三回合宿挙行は一時危懼せられる時期もあった。しかしながら国文研の目的と、周囲の期待を裏切るべからずとの結論から、今回の第三回合宿実現の運びとなった。場所は佐賀市郊外川上にある春日道場（佐賀県社会教育会館）満目の緑につつまれた春日山の中腹、前景にひらけた湖水をたたえ、涼々とそそぐせせらぎの音色が木魂する絶好の合宿場である。

我々は繁忙の中に万端の準備を急ぎ、次のような案内状を六月下旬、主として小中高校の教師と大学生を対象に配布したのである。

## 第三回全九州学生青年合宿研修会案内

主催 国民文化研究会

現代の世界がきびしい緊張のさ中に置かれていることは、日々のニュースからも感得される事柄です。どんなに小さい国でも、自国の誇りと生存をかちとる為に、民族の理想を掲げ、全力を挙げてこの危局に立ち向っています。しかるに我々の日本はどうでしょう？

「戦後は終った」と言われながら、敗戦虚脱の後作用——語にして言えば国民的道義的存在の喪失——は、いまだに尾を引いてはいないでしょうか？ 自我と欲望、利害と打算、享楽と頹廢がひしめき合い、そうした低次な欲求が自由とか人権とか美しい言葉のオブラードに包まれて、横行しているのが実情ではないでしょうか？ このような安逸と劣弱の国民が、きびしい国際社会の現状に堪え得ぬことは言わずとも明かです。

革新の声は巷に満ちています。しかしそれら革新派の言説は何と矛盾だらけなことでしょう。

平和を唱える人が斗争と革命の心酔者であったり、独立を叫ぶ人がソ連や中共に屈従を誓う人であったりします。憲法擁護を鼓吹する人が、実は現行憲法を社会主義憲法に改変することを志す人ですらあるのです。これでは特定のイデオロギー的目標を達成する為に、大衆の素朴な心情を自陣営に引き寄せようとする詐略と言う外はありません。しかもこのような詐略が、今や巨大な組織を背

景として狂熱的に繰り上げられようとしています。私共はもとより単なる復古や、現状維持に甘んずるものではありません。その故にこそ所謂「革新」の眞實正否を見きわめ、正しい革正の方途を見出して行かねばならぬと思います。

私共は青年・学生層に本有的な真理への熱情と鋭敏な批判精神に期待しています。今のような世相や言論に対して満されぬ疑惑を抱き、真剣に自己の立脚地を求めて苦しんでいる人が無数にあると信じます。問題は、その様に潜み憂うる人達の心情を繋ぎ、学問的研鑽によってこれを裏打ちし、広い国民的共感の上に立つ中正不偏の道を打ち開いて行くことにあると考えます。その為には何よりも先ず有志の人々が一堂に会し、一切のイデオロギー的対立や職業上の差異や世代間の誤解を取り去って、隔意なく意見を交換する機会が作られねばなりません。この合宿研修会はもとよりその為の交流の場に他なりません。

以上のような念慮から、私共は今夏佐賀に於て表記の合宿研修会を開催します。今回は特に研究テーマの重点を政治と教育の問題におき、夫々の分野で第一線に立って活躍しておられる方を講師にお招きすると共に、私共会員の研究発表もそのような線にまとめました。願くは同憂の方々が多数参加されて、活発に研究討議に加わっていただくことを、待望して止みません。

一、期 日 八月二十一日（午前十時集合）より八月二十四日（午後四時解散）まで

一、場 所 佐賀市春日道場（佐賀駅よりバス二十五分）



一、参加者 九州・中国各地の大学高校生、教職員、一般青年約百名の予定（年令、性別、職業等に制限なし）

一、研究テーマ A、国民共同体の政治的基底  
―党派・イデオロギー・圧力団体に捉われざる国民的統一の根柢を何処に求むべきか？―

B、現代教育の基本的課題  
―戦前・戦後教育の根本的反省と将来の指標―

一、実施要項

(1) 講義

保守主義の精神とその使命

政治評論家 小田村寅二郎氏

日本における社会主義の運命  
―革新陣営の発生と現状及びその将来―

日本労働者教育協会理事 菊池紳隆氏

戦後意識の論理  
―現代教育刷新の基本課題―

御茶ノ水大学助教授 勝部真長氏

天皇制の本質

福岡大学教授 森三十郎氏

(2) 研究発表

階級史観と民族の問題

鹿児島大学助教授 川井修治氏

民主主義の真精神

熊本大学講師 森祐三氏

日本ナショナリズム確立のために

笠岡商高教諭 名越二荒之助氏

国民倫理の基底

戦後教育の問題点

道徳教育の周辺

現代ヒューマニズムと教育

資本主義経済と社会主義経済

その他研究会員、参加者による研究発表

修猷館高校教諭 小柳陽太郎氏

八代市教育委員 加藤敏治氏

若松高校教諭 山田輝彦氏

宮崎大学助教授 下畑達雄氏

鹿児島商大講師 都通一夫氏

(3) 右の講義及び研究発表に対する質疑応答及び班別・全体による自由討論

(4) 各種のレクリエーション、懇親会

一、携帯品 合宿参加証、筆記具類、洗面具

主食―米一升五合(十食分)―持参しない場合は現地にて現金に換算する―

一、費用

(1) 参加者の負担分

a、副食費五百円(会費として申込の際に納入する)

b、テキスト・プリント代百円前後

c、旅費の片道分

(2) 研究会の負担分

a、宿泊費、講師招聘費その他 全額

b、参加者各自の片道旅費（乗車国鉄駅より佐賀駅までの三等乗車賃）

※ 但し急行料金その他は含まず、学生の場合は学生割引によって計算する。

こうして集った人達に教職員が多かったのは、名状すべからざる教育界の混乱の反映といえようか。それに大学生、高校生、一般とつづき、集った階層は国民の思想生活に直接関連をもつ人達ばかりであった。この参加者を三班にわけ、一・二班を教職員と一般参加者、三班を大学高校生で組織し、会員が世話人となって、全宿の全期間を通じて討論や生活指導等、直接の事務にあたることにした。こうして緊張と期待のうちに、八月二十一日を迎えたのである。

ここまで漕ぎつけるために最も危惧された点は資金の面であったが、幸いにして我々の意を汲まれた有識者の方々の温い御援助や、全国に散在する会員の知己諸友の物心両面にわたる御援助によって、所期の目的をほぼ達成し得たことについては、感謝の言葉を知らない。ここに厚く御礼申上げる次第である。

次に合宿人員の構成を示せば

招待講師 五名

来賓 五名

会員 十八名

参加者 教師 十九名

地域別内訳 鹿児島五、佐賀五、大阪三、熊本三、山口二、宮崎一

学生 十八名

地域別内訳 鹿大七、長崎大二、早大、九大、中大、鹿商大、奈良女子大

昭和大各一、高校四

一般 七名

総計 七十二名

# 合宿記録

この記録に載せた講義は、合宿終了後各講師が直接執筆せられたものであるが、菊池紳隆氏と小田村寅二郎氏の講義は編集者の方でとりまとめたもので、最終的に講師の閲をうけていないことを附記しておく。

## 生の認識

田所広泰遺作

仰ぎみよ、み空は澄みて果なければど

大地の延長は有限を示し

大地のうへに

天地より分析せし人間の世界は

描くよ内に

榮衰無限の流転の相を

善悪業果の鉄則動かすべからず

七重の鉄城と七重の鉄網

劫火はてしなき炎の手中

無量の苦とこしへに受くとふ

本能と感情の無間地獄

これぞ生の樂欲、伴りはあらず

意欲は理性を伴ひつ

おこりては消え

おほひては現はるゝ

永劫生死の輪廻

生命はこゝに自己を区劃し

回顧は予測を夢想しつゝ

いよゝのがれず生死の流転

あゝ分析の煩瑣にたへず

永久の生をこひねがふに

混沌の動乱か？

静止の破局か？

観念の魔力虚空をかければ

低音に呻く嗶声をきかずや

かそかゆらぐは詩人の胸奥

きはまる一点は滅の瞬間

くりかえし、くりかえし

よみがへるもの

あゝ、生の泉か？

み空さながらか？

ふたゝびの語らひの外に

われらは知らず

われら行くべき道のさだめを

(昭和十二年)

## 合宿第一日 友らの邂逅

— 研究方法論を中心に —

佐賀駅からバスで二十五分、川上で下車して緩坂を五分ばかりのぼれば、行手に春日道場がみえる。満山したたる緑の中に、くっきりと日本的調和美をかもしだしている合宿場である。

予定の十一時には殆んどの人がそろって開会式をむかえることができた。緊張と期待の交錯する中に、劈頭先ず瀬上安正氏が立って大要次のごとき開会挨拶をのべた。

外交問題にしても労働運動にしても、はたまた勤評、道徳教育に至るまで、氷炭相容れない政治的対立が続く。良識ある国民の一人としてこのような果知れない泥沼斗争を心よくむかえる人がおるであろうか。現状の不信心と前途への不安のうちに、窒息する思いで過しているのがいつわらざる国民の心情ではあるまいか。このような盲点についてフランスのロベールギランが「日本には共通の広場がない」という意味のことを云っている。このことは通説化するようになった。しかし対立と混乱は相も変わらず根強く続いている。それでは何故

共通の場が生れないのか。広場を形成する原理は何なのか。そのことについては考えようとしな。誰か又外國の文化人にそのことを指摘して貰わなければわからぬのかも知れぬ。しかしたとい外國の作家が指摘してそれが一般化したとしても、それでは解決にはならないであろう。日本人自身の痛感として、我々自身の声として、真剣に叫ばれるようにならねば、この課題は打開すべくもないのである。

思えば現代の日本人は大きな空虚の中に過しているのではないか。流行する言論、組織化される運動、それらには他國製イデオロギーの焼きなおしといつてもいいものが余りにも多い。いい換えれば日本という国土と生活に根ざした正統なる思考法が失われているのである。國では文化國家を標榜しながら、そして我々の身辺には東西の偉大なる文化遺産があふれながら、その言動は最も非文化的内容でみだされている。後世史家は最近の昭和史を歴史なき時代とよぶであろう。

このような時代にささやかな力を集めて合宿を舉行することは、かりそめならぬ歴史のいとなみである。ここに集つて來られた方達は、九州一円は云うに及ばず、遠くは岡山、大阪、和歌山からおみえになつてゐる。更に若きは十代の青年諸君から、古きは五十代の校長先生に至るまで、さながら国民生活の縮図である。私達はこれから四日間、世代を超え、立場を超えて、あるべき日本国民生活の典型を現出したいと思う。現代の対立抗争を打開する鍵は、私達のこれからの合宿生活の中に用意されることを確信して開会の言葉とした



い。  
続いて全宿をここまで準備し、合宿中は全般の事務を担当することになっている末次祐司氏が立った。氏は我々の合宿はデスカッションを練磨する場ではなく、又世間でよく行われる講習会でもない。現代おかれた祖国の運命を開拓すべく互に真理を追求するための真剣な場である。これからもたれる合宿という共同生活も、その一点に結ばねばならないと強調して、運営上の諸注意をのべた。

昼食後自己紹介にうつった。はるばるここまでやって来られた人達だけに、参加の動機は皆深刻なものがあつた。祖国の危急を訴える人もあつた。教育論を述べる人もあつた。東京から急拠飛行機で馳せ参ぜられた小田村寅二郎氏は、昨夏岡山で行つた合宿記録の中の一少女U子さんの言葉「未熟な私には講義の内容も討論された理論も、知識としてとり入れることは殆んどできませんでした。唯心の底からコンコンとわきでて来る感動の泉だけが今も残っているのです」という一節を朗読して、お嬢さんもおじさんも「あるもの」に結ばれる不可思議の機縁を印象深くの

べられた。

合宿冒頭の講義は小田村講師によって総合的な立場から、合宿全体への問題提起の形で行われた。講師は瀬上氏の開会挨拶の内容にもふれながら、凡そ二時間半にわたって特異の説得法を駆使せられた。氏は一高時代から学生運動の体験をもち、現在は教育父母会議常任理事として遊説活動に挺身しておられるだけに、その指摘は参加者の情意に鋭く訴えるものがあつた。演題は「人間性『解放』の道——国民共同体の現実基盤」である。

### 人間研究のねらい

現在の社会体制とか習慣とか国民感情とかは、どのようにして築かれて来たか、これをとりあげてここで考えたいかという点、全ゆる今日の政治、経済、文化をめぐる動向は、つきつめると結局人間が起している問題であるからである。例えば政治をめぐる権力の問題を考えるにしても、これを求めようとする人間性は罪悪であるのか。或は致し方ない人間の本性であるのか、人間はそれだけなのか。或はそうしたものは当り前だといいきってしまつていいものかどうか、それが人間の弱点だとすればどうすればいいの

か、という点から考えてみなくては、政治の問題を正しく掴むことは不可能ではないか。結局権力を問題とする人間を我々がもう一度考え直してみる事が、すべてに先立つ最も重要なことではないかと思ふからである。

それでは人間とは何か。生物学的に見れば猿の子孫ということもいえよう。しかしそれだけですまされるであらうか。人間には人間としての特殊性があるのではないか。そこに着目して或人は「人間は考える葦」といつた。しかしながら人間の思考は言葉で行われる。「言葉は精神の呼吸」ともいわれるように、言葉は精神を記録してゆく。そしてその精神の記録が新しい創造を生む。人間精神の絶妙な偉大さは、言葉を通じ表現の世界の中に縦横に躍動させることができる。学問芸術宗教という人間の最も偉大なる所産は、言葉によって可能であった。我々がこうして相対して言葉をかわし、感情を示しあう、或は一つの景色を見て美しいと感じた時、その美しさを文章にし絵画にして第三者に伝えてゆく——これが今日生きている我々人間生活の一つの実態である。こういうふうと考えて来ると、人間の起源は猿、もつとさかのぼってアミーバであったかも知れないが、人間のもととは何かと考える時にはやはり、新約ヨハネ伝やゲーテのファウストにあるように、言葉を話す動物というのが、その起源といえるのではないか。

### 言葉とイデオロギ―

そこで言葉と人間の生命の關係について更に考えを進めてみよう。一個の人間が母の胎内にやどって生れて来る。年上の人達のやることを見よう見まねでおぼえてゆ

く。或は教えられてゆきながら一人の人間に成長してゆく。そして言葉を話すようになる。かくして言葉を通じて人間の精神が誕生してくる。この世の中には色々イデオロギー（主義主張）があつて、これに支配されるようになる。しかし考えねばならぬことは、イデオロギーというものと、新しい人間の生命は一体どういう関係にあるかということである。人間はイデオロギーに関係なく、持って生れた素質を素直に伸ばさなければならぬ。もし人間が伸びてゆく力を素直に認めることができなければ、生きていく一つの生命に対して申訳ない立場をとっていることになるのではないか。このような例が現代余りにも多いことに注目されたい。例えば言葉の上では人権尊重とか生命尊重とかいいながら、その実践に於ては斗争とか打倒とか敵とかの相言葉で動いている。そのような人達は自分の勝手な人権を守る為に、相手の人権を「粉碎」と叫ぶ。そのような言っていることとやっていることがさかさまの態度では、やはり主義主張の看板におどつているといえないであらうか。

皆さんも既に面くらつていられると思うが、共産主義者達の掲げるスローガンと、自由主義者達の掲げるスローガンが、全く同じ言葉の上でやりとりされている。片や平和擁護といい、片や人権擁護という。民族独立や平和という言葉はどちらとも使っている。言葉の意味をつかまえないで、概念上の斗争のみに追われている。こういうことに飽き飽きしているのは私みたいな理窟ばい男だけでなく、市井に黙々と働く人達の方が

余程敏感である。私がここで声を大にして申し上げたいことは、人間は特定のイデオロギーに支配せられてはならないということである。人間を尊重する魂からあふれでる言葉に支配されねばならないということである。それが言葉を愛し生命を尊重する唯一の道であると思うからである。

### 宗教神話にきざまれた人間性

「人間は猿から進化したもの」という生物学的解明では、砂をかむような人間の歴史といわねばなるまい。それと同じように考古学的解釈だけで我々の祖先の歴史のすべてを説明したら、それはロバの歴史に等しいといえよう。言葉を話す動物という人間の尊厳に立脚する定義にたつ時、我々の祖先のうたった民族誕生をテーマとする神話は、精神史の足跡として高く買わずにはおられない。ここで人間の問題を各種宗教神話の中にかがってみたい。

キリスト教神話は唯一神エホバを考へだしている。この神は全智全能——何事もできないことはない、欠点も何もない神である。仏教の方では仏様を考へだしている。この仏は人間の欲望を超越して、普通人の到達し得ない境涯に到達している。或る意味で全智である。そこに宗教というものの存在する意義があらうし、現世の苦しみに救われぬ弱い人間の姿もうかがえるのである。

ところで我々の日本に伝っている神話をみてみると、そうした全能の神も全智の仏も生れて来ていない。日本民族から生みだされているものは、もっと人間そのままのものである。古事記に画かれた天照大神も須佐之

男命も、皆んな私達と同じ人間性を示している。例えばきれいな女の人がいるとその女がすきになってしまふ。くたびれると眠くなってしまう。そしてどの神様も人間的な欲望を沢山持つておる。古事記の神々の中にはあらゆる人間性そのままの性格が説明されている。日本人が歩んで来た一つの古いものの見方の中には、人間はやっぱり欲深くてだらしがなくて、自分の事を先に考えたりする、こういう姿が人間そのものだということにして、そのままに書かれてある。人間は人間なんだというのが古来の日本人のものの見方であった。即ち我々の祖先は道徳的に立派だとか、そうでないとかの定義をすることをせず、お互に欲深い人間同志だから、仲よく過そうではないか、助けあいながら暮そうではないか、というのがその間につくりあげられて来た人間集団のものの考え方であった。だから古事記にあっては非常に人間らしい神々がそこに出没して、自然に集団生活が行われた。それがやがて部落民族として移動して来たり、或は大和民族と出雲民族が融合したりして、一つの集団生活が営まれているのである。この中には全智全能の性格をもったものがでてこないままに、人間らしいありのままの姿で統一集団を作った。だからお互に許しあうことのできる人達が集っている。それが日本民族そのものの構成である。勿論日本民族発生の説明には南方から流れて来たとか、何千年何万年前に大陸から来たとか、その他色々の学説がある。そのようなことは幾らしらべられても有難いことであるが、日本民族はやはりこの国土において、日本語という独特の表現形式を創始し、古事記のような人間性を認めあう

自らなる集团的な秩序を創りあげた、その中に起源があるのではないか。

### 言葉と民族と国家

日本語の創始は個人でできるものではない。お互に意志の疏通をはかる手段として自然発生的に生じて来たものである。言葉の創造、それは集団生活の所産というよりほかない。社会生活も六人なり七人なりが、集団を作ろうと申しあわせて作ったものではない。自然に集団生活としてそこに現前したのである。だから独立した個人というものは空想以外にありはしない。日本なら日本、イギリスならイギリス、メソポタミヤならメソポタミヤというように、各地に人間集団を営んで各々の文化を作っている。この文化と各地各民族の知能、あるいは風土、氣候、あるいは頭腦のよさ悪さ等の差によって、各人各地各様の文化をもっている。この各様の文化をもった諸国家が集って世界を構成している。或場合には一民族が不幸な目にあう。或は領土が攻めとられる。しかしかに離合集散はあろうとも、その土地に民族が同化して一つのものを作りあげている以上は、やはり各民族各様の文化と特長を誇って、様々の国家をそこに作りあげてゆく。だからアメリカでもイギリスでも、ソ連でも中共でも、子供の基礎教育として国家を教えている。それは国家を離れてアメリカ人の生命もソ連人の生命も保障できないからである。各国とも国家を實在として感じ、各国民はその現実に立脚して生きようとしているからである。

## 国家主義と人間の宿命

戦争は皆んなコリコリだという気持はすべての民族がもっておる。しかし同時にこの各民族なり集団なりがもっている生命——伝統とか理想というようなものを消されてまで、果して平和を望むであろうか。世界の各国をながめてみれば、何千年或は何百年続いた各集団種の生命を持続し、その集団の中の個人の生命を守る為にこそ、世界平和と各国間の戦争をなからしめんとしているのではないか。自己集団の生命を守る為には、むしろ本能的な動きさえ示しているというのが、世界政治の現実の姿ではないか。共産陣営の国でも自由陣営の国でも「人間は国民であるより前に人類の一員だ」というような甘い空想論を述べている国があるか。世界各国は多かれ少なかれ皆個人の生命を守る為に、集団の生命を守る事に徹した「国家主義」によって運営せられているのが実際であるといえるのではないか。世界各国は個人と集団の生命を尊重する国家主義の立場に立っているに拘らず、これを封建的とか軍国主義的とかいって一概に否定してしまう思考法は、何か別の意図をもった単なる論争にしかすぎないのではないか。

## 選挙制度と人間関係

次に選挙による民主主義制度には、人間が果して生かされているかどうかについて考えてみよう。選挙をすれば民主主義が立派に果せるという。ところが一体選挙はどのように調法なものであろうか。現実に見られるように選挙運動で金と地盤と看板があれば何とか当選するのが実情である。それでは選挙は全然おかしいかというと、デモクラシーの一つの方便として現在皆んなが認め





ていることであるし否定することはできない。要は選挙の限界を認めて、それとは別に人間性をもりたててゆく力が国民の中に残っていないければ、干かたびた政治になってしまうであろう。古代ギリシャやローマにおいては、紀元前五百年から六百年頃すでにデモクラシーが確立されていた。その当時民主政治の黄金時代を作ったペリクレス Pericles (B. C. 495—429) は次のように言っている。

一、アテネ市民は他国に追従せず自らその範となるようつとめねばならぬ。

二、アテネの政治は多数決原理が守られるから民主政治である。

三、各人は階級によらず、功績の如何によって名誉を与えられる。

四、公職につくのに貴賤の別があつてはならない。

五、市民は公私の別なく行動し、人に対しては猜疑嫌悪の感情なく接し、いやしくも他人に迷惑をかけてはならない。

六、公の生活においては、法律並びに権力によく服従する。

七、市民は法律の圧迫によらず、勇氣をもって発言し、それが公の問題を決定するようにする。

八、一身を犠牲にして国家の公益につくす。

これは二千五百年前のデモクラシーの規則であるが、今日にもそのままあてはまる多くの示唆をもってい  
る。ところがそのヘリクレスを批判して当時のトゥキユデイス Thucydides (B. C. 460—400) という人は  
「ヘリクレスはこういうものが民主主義だと教えて、一部の人で大衆を制禦してしまふ。このような民主主義  
は名ばかりで、体のよい専政支配に他ならない」といつている。アリストテレスなども民主政治は愚民政治で  
あるといついだす。こういう考え方がやがて支配的となつて、デモクラシーはくずれてアレキサンダー大帝の時  
代を迎えてくる。

最近におけるトゥキユデイスの出現はマルクスであろう。彼は当時のイギリス議會を「民衆をふみ台にして  
権力を逆にうちたてるもの」といつて批判している。マルクスからいへばたしかにそうであろうが、自由主義  
陣營の側からいへば又同じことがいわれる。レーニンがプロレタリア独裁は党独裁とシノニムであるという意  
味のことをいつているように、共産国は共産党支配の体制である。わずか二・三パーセントの共産黨員が全  
る階層に滲透して、相互監視を行いながら民衆に恐怖心をかりたてる。

現代の日本にもトゥキユデイス的存在がないといえるであろうか。社会を労働者階級と資本家階級にわけて

多数支配の原則をふりまわす。その時ヘリクレスのいったようなこまかい規則が守られるような世の中ならば、そのような代表者の横暴を倒すこともできよう。しかし何かのはずみに少数の職業革命家が政治の中心にでて来てしまう時、プロレタリア独裁の名で革命家の独裁体制ができないと保証できるであろうか。

今は革命の例をあげていったが、人間が頭で考える方法とか手段というものは、どこからどこまでは大体いいがという程度であつて、絶対的なものはでてこない。だから民主主義がいいとか、或は共産主義がいいとか一片の定義できめようとしてもきまるものではない。人間性を充分に認め、国民全体がそのままよいというよきな主義というものはありはしない。もしこの制度が絶対であるというよきな主義があるとしたら、人間にとつてこの上ない強敵であろう。

### 株式会社組織と人間

更に私は人間研究の素材として、資本主義社会における株式会社の例をあげてみた。アメリカの某電々会社の資本金は約七百万ドル、株主が約百万人の大会社の例である。この会社を運営している者は百万人の株主の中の五パーセントに満たない大株主百人である。勿論取締役会もあり、社長専務もいるが、一体それらの人は誰がえらぶのか。株式会社の場合は白紙委任状をくばってみんながそれに封をして送れば、百万人中の百人が集つてきめてしまう。そして社長以下少数の専従者は、ごく少数の経験者の間で大過なくきめてしまつてゐる。全くデモクラシーの恰好だけで、中身を抜きにした内実

も何もないものである。「こうしたごく少数の支配が行われるのは資本主義社会だからである。産業を国営化したら人民の支配になる」という意見がでる。しかし産業を国営にしたら官僚主義になって、全産業をそれこそ少数のゴスプランが握ってしまうから、企業の自動的な機能を阻止してしまう。これはイギリスでも経験済みである。

要するに制度はどちらに持っていかけても完全なものはない、問題はそれが生身の人間にふさわしいかというところである。まして経済という生きている実態を一つのイデオロギーによって解決しようとしても、それは混乱をますだけである。生きている経済は沈黙をもって人間の愚挙を笑うだけであろう。

#### 制度機構主義主張の限界

しかるに現代の日本には共産主義社会主義の方々ばかりでなく、保守陣営に属する人達にも余りにも制度とか機構とか法律とかいうものに依存しすぎている人が多いのではないか。我々の求めるべきものは、現代盛んに争われている制度、機構、主義、主張というような問題ではないのではないか。制度とか主義とかいうものは夫々一定の限度、意義、社会に貢献する任務はもっているが、これが最終的なものではないのか。厳密に検討すれば制度や主義や法律などというものは全く穴だらけのものである。この穴だらけなものの横行する中に、日本の社会が曲りなりにも平穩を保っているのは何故か。機構とか制度とか主義主張以外の要素が今日の日本を支えているのではないか。

それではその要素とは何か。日本人同志のお互の信頼感、暗黙の同胞感、永い人生生活の体験、というようなものの方が、今日の日本の現実の姿につながっている大きなファクターではないか。制度、機構、主義主張か、信頼感、同胞感、生活体験からにじみでた良識か、どちらが本当か。私は結論をだす力はないし、又どちらかにきめても気なくさみにもなるまい。

にもかかわらず日本では資本主義か社会主義かというイデオロギーにかかわる論争は絶えない。ところでこの論争の行きつく所、勢のいい方に傾いて社会主義社会の実現を一举にはかるようになったとしたらどうなるか。その時今までに培われてきた同胞感というか、体験から育まれて来た生活上の良識というか、これらを全て否定するとするならば、一体これはどういうことになるか。久しい歴史的経験の中から育まれた良識と、日本人同志という国民的感情をふみにじることが正しいのか。そしてそれが国家の安全を保つ所以なのか。先程申上げた古事記にうたわれているように、全智全能の神様をもちださなくても、或は仏様のような人格の力を借りなくても、ありのままの人間同志の信じあい、助けあいによってやってゆく道を、我々の祖先は求めてきたのではなかったか。

聖徳太子の共是凡夫と日教組の団結

私はここで古事記的コスモスをそのまま継承して、仏教摂取に偉大な業績を残された聖徳太子の言葉を読ませて戴きたい。はじめに紹介

するのが維摩經義疏（義疏とは註釈の意）の一節である。

「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所広からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず。所以に勤めて応に著を離るべしと明かすなり」

この太子の註釈のもつ微妙なる重量感は、原文しか伝えることはできないが、一応の直訳を試みれば

「自分はなるべく立派な行動をしたいと思ひ、又自分の志を伝えたいと思つて心をはげましても、もし自分と他のいうことを分離して修業すれば、社会から離れてしまつて人々と苦樂を共にしてゆくことはできない。だから自他の執着をはなれて、一つの社会集団に関連してゆく所に、お互が生きてゆく道があるのではなかるうか。」

そこで今の言葉に関連して十七条憲法の十条を読んでみようと思う。

「忿を絶ち瞋を棄て、人の違うを怒らざれ、人皆心有り、心各執あり。彼是とすれば則ち我は非とし、我是とすれば則ち彼は非とす。我必しも聖に非ず、彼必しも愚に非ず、共に是凡夫のみ。是非の理なんぞ能く定むべき。相共に賢愚なること鏢の端なきがごとし。是を以て彼人は瞋ると雖も、還つて我失を恐る。我独り得たりと雖も、衆に従いて同じく行え。」

これの直訳を試みれば「心のいかりとおもてのいかりを棄てて、人と意見が違うのを怒つてはいけない。人

には夫々心もあり、執着している問題もある。だから彼がよいといえれば自分には悪いこともある。自分は必ずしも全能の人ではない。又彼も愚かというわけにはいかぬ。共に凡夫であるからどうしてことの是非をきめてしまふことができようか。ともに愚かであることは耳輪にはしがたいようなものだ。だから彼がいかに怒るといっても、かえって自分の足りない所を怖れなければならぬ。自分一人がこれをよいと思っても、大勢の人と一緒にいかって行すべきである」

この太子の言葉に関連して思いたすのは、日教組倫理綱領の最後にうたっている「団結こそは最高の倫理である」という言葉である。太子は自他の二境を作らず、共に凡夫として協調の道を発見してゆこうといわれるのに對して、日教組は団結して事にあたろうというのである。日教組の方は自他を区別する一種のセクシヨナリズ

### スポット

#### 対立という錯覚

私の学校にはシャワールの設備がありませんでした。前々から生徒会で新設することを相談していましたが、五万円の経費を捻出する方法が見つからず難航してしまいました。評議員会で誰かが「廃品を皆んな家から持って来て五万円をつくろう」と提案しました。このことが満場一致可決されて皆んな協力しました。しかし仲々五万円までには至らなかつたのです。一時は中止しようという声さえも出しました。そのうち校長先生をはじめ諸先生方が、こっそり家のポロギレを自転車に積み、或は手にさげて持って来て、生徒の集めた廃品の中に投げ込んで下さっていることがわかつたのです。

ムではないか。日教組が団結して敵にあたろうとするのであるから、結局善玉悪玉の斗争主義に発展するようになるのではないか。そう考える時団結は果して倫理といえるであろうか。団結するのはヤクザや愚連隊でも、そしてシベリヤ狼や働蟻でも本能的に行っていることである。団結とは倫理や道徳という人間の行為に対する規範とは何の関係もないものではないか。それは一つの自然的動物的本能的欲求の一面をいったものにすぎないのではないか。教師たるものは人間であるから、やはり人間として最高の倫理を掲げるべきではないか。人間の最高の倫理は団結にあるのではなくて、太子の憲法にうたわれたような人間性を照射された言葉の中にあるのかも知れない。あるいは社会の人を助け、人と共に苦しんでゆくのが最高の倫理かも知れない。

我々生徒には全く意外でした。今まで「生徒による生徒の為の生徒会」等といって、生徒会を学校とは別個のもの、或は学校と対立するものとして考えていた我々にとつては、思いもかけぬ先生方の御協力であつたのです。この奥床しい先生方の美挙は暗黙のうちには生徒間に伝つてゆきました。廃品はたちまち予定を超えて山と積まれました。

私はこのことから今迄余りにも「先生対生徒」「経営者対労働者」「資本主義対社会主義」というように、対立的にものを考えることを教えられすぎていたのではないかと知らされました。このような枠は元来ないものがあるように錯覚して争いを無理に作っているのが私達の日常ではないかと思うのです。それではこの枠をとりはらう方法は何か。私が



## 人間性解放の道

以上縷々とのべて来たが、それではどうしたらこの時代をのりきつて

ゆくことができ、世界平和に貢献することができるか、という問題が次に質問としてでてくる。私がいいたいのは、そのような具体的な方法はあり得るわけではないという事である。人間はお互猜疑しあうものであり、斗いあうものであるが、それをどのようにして更に内容的に

信じあう面に向け、人間の精神的努力をどのように重ねていったらいいのであろうか。そういう問題こそが、この合宿に提起せられるべき一つの重要な課題なのである。この話のはじめに私は、人間は言葉を話す動物である旨をのべたが、この最初の伏線は今申しあげた結論的なものとどうつながるのか。そのような問題はこの合宿期間に論ぜられることであり、又私が合宿最終日にもふれることを約束して、話を一応終りたい。

講義が終つて質問は最後に出された同胞感同胞愛の背景に集注された。現代のジャーナリズムによつて既に「愛国心」「忠誠心」という言葉が毒されている時、新しい感覚をもった言葉と思

岡山合宿に参加した時、どなたからか聖徳太子の「共に是凡夫」という言葉をききました。が、この意味にめざめることではないかと思ふのです。平凡なことがわからずに近視眼になっているのが、現代の混乱の原因ではないかと私には思われてならないのです。

(高校三年 U子)

考法の登場には目を刮らせるものがあつたのであろう。講師はそれらに対し、イデオロギーの臭みを脱却して、人間性そのもののあり方から懇切な解答例を示した。参加者の胸には新しいナイーブな感覚が甦りはじめたことはたしかである。夜は小田村講師の内容を更に咀嚼すべく、各班毎の班別討論をもった。

班別討論では各班とも参加者の思想経歴が更にくわしくのべられたが、志ある者が集り得たよろこびに導かれながら、小田村講師の提起された問題検討が慎重に進められた。言葉の問題、国家主義と人間の宿命の問題、社会制度に働く人間性共通の原則等、早くも根本問題をめぐって討議の花はひらきはじめた。

満山にすだく虫の声と共に、全員が寝についたのは十一時をまわっていたであろうか。

## 合宿第二日 民族の意志回復のために

Ⅱ 天制皇と外交問題を中心に Ⅱ

合宿は一つの軌道にのりはじめたようである。昨夜の全体講義につづく班別討論は参加者の心を接近させて、一つの雰囲気をかもしだしつつある。小田村講師の新しい思考法の提示は本日の講義に心はずませたのである。本日の冒頭講義は福岡大学教授森三十郎氏「天皇制の本質」である。

氏はこれから語る問題は重大な内容をもっているので、後日比較憲法的立場から更に精密な、更に豊富なものになりたいと前置して次のように発表された。

### 一、戦後における天皇制の革命的変革

#### 戦後における天皇制観の検討

戦後、我が国の君主制は革命的変革を蒙った。名はひとしく天皇制と称しても、中実はすっかり変っているのであって、天皇と云う同じ革囊に盛られ

ている酒は、従来とは全く別箇のものである。先ず此の点をはっきり認識しなければならぬ。マッカーサー憲法は天皇制を廃止はしなかったが、残された天皇制は単に従来 of 天皇制の権力面を廃して象徴面を残したとか（清宮教授）、従来 of 天皇制を合理化したとか（田中耕太郎最高裁長官）、或は天皇は依然として君臨しており単に統治しなくなっただけだ（里見岸雄博士）とか、そう云った説明で済ませる様なものではない。従来 of 天皇制とても必ずしも権力的天皇制であつたとは限らず、寧ろ後述する通り、西洋の君主制に較べて非権力的性格が強かつたのである。英文憲法では天皇のことを、エムペラー (the Emperor) と称しているが、エムペラーと云うのは権力的支配者の意であり従来 of 日本人の天皇観はさような観念で律し得られる様な性格のものではない。明治憲法に関する限りは、いくらかプマイセン憲法流の権力的君主制の観がないではないが、長い天皇制の歴史を通じて見ると、寧ろ非権力的君主制としての性格が強かつたことを認めねばならない。又、天皇制が合理化されたと云つて新天皇制を是認する考え方にしても、何が合理的で何が非合理的であるかは問題であり、デモクラシーを以て唯一の評価基準として之を律する其の考え方自体が学問的合理主義に脊反する。それは自然法的デモクラシー、又はリンカーンのデモクラシーの焼直しに過ぎない。そう云う代物を鵜呑みにして合理主義を云々する其の考え方こそ寧ろ非合理的である。或は又、天皇は現行憲法の上でも依然として君臨しており統治してないだけだと云う考え方にしても、一体どうして国旗と同様の国家的象徴、及び

国政から締め出された国事機関としての天皇が君臨していると云えるか問題であろう。国王は君臨して統治せず (The King reigns, but does not governs.) と云う場合の「君臨」とは、国王が統治権者としての主体性、權威性又は正当性を有することを意味しておるのであり、「統治せず」とは、統治権を行使せざることを云うものと解されるのであって、単なる象徴、単なる名目的儀礼的国事行為の担当者などは、君臨もしていないし統治する地位にも無いのである。但し、君臨と云うことが単に君主、皇帝又は王と云う称号を有する者が介在していることだとすれば、其の意味では天皇君臨と云えるだろう。然しそれは、恰も王冠が存在するが故に、国王君臨すると云うのと変りは無かろう。王冠は君主ではない、国旗も君主ではない、同様に象徴としての天皇と君主ではない。君主の持つ国家的象徴 (Staatssymbol) 又は政治的象徴 (politische symbol) としての機能は之を認めるが、それは君主にとつての随伴現象であつて本質的な要素ではない。従つて、既に君主としての本質的な要素を抜きとり、最早君主としての本体を失い恰も王冠や国旗の如き象徴と化したものにして、それが君臨していると云えるかどうか喋々する迄もないであらう。こういう考え方では、百の新憲法批判も画新炎哨を欠ぐことになる。

### 占領憲法無効論の論拠

我々は変つたものは変つたものとして正しく認識してかからねばならぬ。日本国憲法の上では、天皇制は全く従来と同名異物のものになつてゐるのである。銃剣の

力に借伏した売弁的学者達の尤もらしい説明や、後からのこじつけ、胡麻化しの妥協論等に迷わされてはならない。天皇まします、国体は依然として不変などと思つていたら、とんだ間違ひである。天皇制が本質的には變つていないとか、国体は不変であると云い得られるのは、此の日本国憲法は無効であると云う立場に於て始めて主張し得られることで、かような立場と離れては、最早さような主張は為し得ない。又、此の憲法無効論の立場からしても、日本国憲法の定むる天皇制が従来の上の天皇制に比し革命的变化を遂げていることは之を認めざるを得ないのであつて、紙きれの憲法、浮虜收容所規則の上での大それた国体変更、天皇制の本質的変更を敢てしているわけである。我々は、さような過渡期の臨時法が効力を有するとしても、本来違法にして無効の法が単に事実上通用しているに過ぎぬとみる。だから帝国憲法が本来正統な憲法として効力を有しへこんだゴム毬の様になっているに過ぎぬ、其の意味で国体不変、天皇制も本質的に變つていないと考えるのならば、其の考え方は正しい。

## 二、天皇制の本質の所在

### 外国の君主制との本質的相違点

ところで、天皇制の本質如何と云う場合、それは固より従来の上の天皇制に就て考察すべきが当然である。天皇制の本質と云う以上、それは、天皇制

にとつて不可欠な本質的特徴をなす或るものを問題にしているからである。すべて、事物の本質と云うものは、正にそのものをして現にしかあらしめている様なエトワスで無ければならない。不可変的な恒常的な要素がそこに無ければならない。太陽には太陽としての、月には月としての、他の事物から自己を本質的に特徴付けている不可変的恒常的本質的要素があつて始めて太陽であり月であるわけである。

#### 欧米の君主制に基いた占領憲法

天皇制の本質に就ても同様に考えられるのであつて、外国の君主制にザラに見受けられる様なものは、何等天皇制にとつて本質的なことがらではない。此の点、マッカーサー憲法の定むる天皇制は、其の根底を欧米の精神的文化的伝統に置いているのであつて、欧米の神観や君主観、其の民主共和の伝統に立脚していると云える。即ち人民主権に基く君主制の範型に入れられてしまつていたのであつて、それを些か改修して国家的象徴たらしめた程度のことである。新天皇制の基礎には異邦の神が鎮座し、異邦の君主観が横たわつていたのであつて、此の珍憲法の起草者達は、彼等の銃剣の権威を唯一の拠りどころとし、彼等の思想で天皇制の作文としたわけである。だからして、かような新天皇制などに天皇制の本質を求めて見たところで、欧米の君主制の本質にぶち当たるだけのことである。そうしてさような「本質」なるものは、欧米では何も珍らしいことではなくて、特に天皇制の本質と称して云々する程のことではない。寧ろ、それは、西洋の君主制の本質と題して論ずべき問題であらう。かような意味に

於て、茲では、従来の天皇制の本質に就て西洋の君主制と対比し乍ら考察するのが適當だと思ふ。

### 三、天皇制の本質

#### 国体政体にかかわる国家形態の問題

然らば、従来の天皇制の本質は、どういふ点に見出され得るであらうか？ 天皇制も、固より君主制 (monarchie) の範疇に属する。然

し、君主制と云つても歴史的に変遷しているし、其の態様は必ずしも一定していない。又、何を以て君主制と云うか其の概念に就ても、色々問題がある。例えば人民主権に基く君主制が果して君主制と云えるかどうか、従来議論の存したところである。思うに、君主制と云うものをどう考えるにせよ、それが国家形体 (statist-orm) に関する問題であり、国の統治権力の構成態様より見た国家形体の區別の問題であることは云う迄もない。天皇制に就ても然りであつて、日本の国家形体に就てのことである。

ところで、国家形体に就ては、従来我が国では、之を国体と政体とに區別して見る二元論の考え方と、之を政体の別として考える一元論の考え方があつた。学説の詳細は茲では論ずる暇が無いが、国家に於て何人が統治権者であるべきかと云う統治権の主体性、及び之と関連する權威性や正当性の問題と、如何に統治権を行使すべきか其の用の問題とは次元が違うから、前者の問題を国体の問題と考へ後者を政体の問題として考へて差



支えない。国法学上国体の語を排斥して政体一元で説明して行く論者に在っては、学者が政体の最高分類とされ後者が細分類とせられているだけのことで、理論構成が違うだけのことである。外国では、言葉としては、国体・政体に相当するものがあるが概ね混用されているのであって、そこに彼等の国家の特徴も亦反映している。例えば、Forms of state, staatsform と Forms of the government, governmental forms : Regierungsform, というように言葉としてはあるが、明らかに区別せられず、屢々混同視されている。又、自然的人民主権論や、国家法人説の立場に立つ限り、統治権の主体、憲法制定権力の主体如何による国体の別などは理論的に否定され、ただ政体の別のみが問題となる。然し此の様な考え方自体に問題があるわけである。天皇制の問題は、此の国体と政体双方に跨る問題である。

### 国体にかがえる天皇制のエトワス

然らば、天皇制の本質、天皇制をして外国の君主制と根本的に異なるものとしている何か本質的なエトワスは何処へ求め得られるか？

若しさやうなものが無いとすれば兎も角、若し在るとすれば、一体何処にあるのか。国体の面にかそれよりは次元の低い政体の面にか？ 確かに、従来の天皇制にはさやうな本質的なものが存在していたのである。それは政体の面ではなくて国体の面に存していたのである。

天皇が統治権を如何に行使するか、即ち統治権の用の方面に於ては、或は君主親政の場合もあつたし或は然

らざる場合もあった。又、法上は君主親政と定められながら現実には実権の伴わぬ場合もあった。君主親政の場合も、專政制の場合もあったし制限制の場合もあった。こういう点は何れも政体的な問題であり、歴史的に変遷して来ているのであって、何も天皇制にとって不可変的恒常的本質的な事柄ではない。従って、天皇制の本質は、政体的な方面には存在しない。残るのは国体的な面である。国体的な面と云うのは、天皇の統治権者としての主体性 (subjektivität) の問題、及び之と関連する主体性の根拠、即ち正当性や權威性或は又正統性 (Legitimität) の問題、かような問題面を指している。そう云う面に、天皇制の本質が見出されはしないか、若し見出されないとすれば、最早天皇制にとって欧米の君主制とは異なる本質的なものは何もないと云うことになる。然しそういうことにはならぬ。それを一言にして云えば、純粹君主制であったと云うことが出来よう。

鞏固なる純粹君主制

天皇制は君主制の雜種ではなくて、純粹な典型的な姿がそこに見出される。西洋の君主制は、君主制と云っても不完全な君主制であり、本質的に民主的共和的性格を持



つていたのであって、我が国のそれとは大いに趣きを異にするものがある。

天皇が統治権者であるとする其の主体性の根拠、そこに我々が眼を向けるとき、我々は、天皇制が一般の君主制の中で最も純粋な性格を持ち且つ又最も鞏固な基礎に立っていたことを知る。

### 実力的権威に立脚しない天皇制

先ず第一に天皇制は単なる実力的権威に立脚してはいない。西洋の君主制の最後の支柱は、結局優勝的支配階級の実力的権威に立脚していた。古代に於ては、君主制が最も正常な又最も一般的な国制と考えられていたが、彼等の王達は、優勝の実力者の棟梁であり又その後裔達であつて、外敵との戦闘、集団内部の団結を図る必要上、君主制が比較的一般的国制となつたのである。然し、ギリシャでもローマでもヘブライでも、本来民主的共和的な性格を有し、君主制は寧ろ東方君主制の模倣と云う傾向を持っていたことは否まれない。ローマの版図に殺到したゲルマン諸部族が各地で王国を樹立したが、その王制も結局は、実力的権威に立脚しそれが最後の堡壘であつた。国家は征服国家として初まり、実力的覇者達の権力機構であつたのである。然し、日本の国家、日本の君主制は、単なる実力的権威を支柱としていたのではない。なる程、日本国家も征服に依つて一部なつてゐるが征服一元ではないし、天皇制も実力的優者に依つて確立されたが、単なる実力性を其の支柱としていたのではない。実力性と云うよりも、寧ろ権威性 (Authorität) に立脚してしたのである。其の権威性は、単なる人格的権威

や実力の権威ではなくして、民族としての同質性融和性に根差す精神的権威、血統的権威、伝統的権威であつた。従つて、日本の君主制は、外国の君主制に比較して、非権力的君主制としての性格が強い。実力的権威に立脚した権力的君主制は、其の実力の喪失と共に崩壊し滅亡せざるを得ない。日本の天皇制は、さような実力性の上に鎮座する権力的君主制でなかつたところに、史上稀に見る永続的寿命を保ち得たわけである。霸道に立脚する君主制と、皇道に立脚する天皇制との違いがそこに見出されるのである。中国の易世革命の思想や、西洋の主権論などが国情と相容れないことは云う迄もない。やれ主権は君主に在る、いや主権は人民にある、かういふ考え方は、外向的西洋文明、斗争的民族性、権力本位の国家機構から来ているのであつて、国の最高権力を恰も獲物の様に考え牙を鳴らして奪い合う獵人共の修羅思想に外ならぬ。そういう西洋人の性格や魂を洞察し得ずして、君主主権は古い、人民主権が合理的で進歩したものだと云つて、マッカーサー憲法の人民主義を恰も禁忌であるかの様に考へている日本人達は、ディアスポラ (Diaspora) ユダヤ人の同類以上のものではない。

### 同胞の血と土に根ざす君主制

第二に、日本の君主制は、其の根底を深く民族同胞の血と其の土に据へていた。国人と国域は国家の自然的基礎であるが、天皇制は此の自然の大地の上にしつかりと根を下していたのである。色々な人種が日本列島に流れ込んで来たが年を経るに従い、自ら一

民族を形成し一つの島帝國を築きあげたのであって、ユーラシヤ大陸に於ける様な激しい人種の斗争、民族的相刻を経験することなく、統者と被治者とが互いに人種を異にし民族系統を異にすると云うこともない。酷薄な自然と戦い、之を征服することに依つて其の文明を築きあげて来た民族、異民族を征服し其の犠牲に依つて國家を建設した西洋の肉食獣達とは違つて、温和な美しい自然に恵まれ、そこに國を建てた大和民族は、自ら國有の精神的文化的伝統を形成して来たのであつて、天皇制はそういう國の自然的基礎の上に幾千年の試練を越えて命脈を保つて来たわけである。共同の血と共同の土、其の地盤の上に、民族の首長として万世一系の天皇が君臨して来たのである。美しい祖国の自然にかこまれ、民族向旺の弥栄の理念の体现者として万民の上に立ち万民の胸の中に生きる中心生命として父祖の國を脊負つて来たのである。西洋の君主制とは、其の自然的基礎が違つてゐるのである。君主制の基礎付けを、強いてゴッドの權威やピーブルの權威に求める必要はなく、さかしらな神学的法学的理論に依つて正当化しなければならぬ程脆弱な君主制ではない。本来権力的君主制、階級的君主制としての性格が強く屢々人種的民族の異質性に禍いされているから、そういう理窟が必要になるわけである。此の点、日本の君主制は、比較的民族的君主制、自然的君主制としての性格が強いと見てよく、國家の秩序と安定の中心、民族的の統一性と団結の核心として優れた機能を果し得る利点があることを忘却してはなるまい。

### 絶対的分離と絶対的の和合にたつ君主制

第三に、日本の君主制は、自存的、主権的君主制であつた。民族的同質性と云う点では治者たる天皇と被治者たる国民との同一性と云う根本的前提が成立するが、國家統治の面に於ては一君万民であり、天皇と国民は絶対的に分離せられていた。治者と被治者との同一性と云う民主制の原理は、そこでは通用しない。治者と被治者との絶対的分離を建前とする所謂専制 (Autocracy) 的原理に立脚したのである。天に二日なく民に両主なし、日本は一系の天皇と共に終始すべき國家であつた。西洋の場合はそうではない。君主制と称しても、共和的民主的原理に立脚してしたのであつて、君主と云い大統領と云つても本質的な相違はない。君主は屢々、所謂「人民の國王」の域を出ず、本来民より出でて王となつたものに過ぎない。民王の域を超えないのであり、人民の第一席の程度を出ない。例えば、ギリシヤでは「人民が治者であると共に被治者である」と考えられていたし、ローマの帝制もかような民主制の原理に立脚していた。アウグスツスは自らをプリンケプス (Princeps) と称したが、それは人民と同等なる者の第一者の意であつて、超越的の最高者の意ではなかつた。ヘブライにしても國王は、神國の元首たる一神ヤーウエーの下では、民イスラエルの一人であり、家族に於ける長子の地位に置かれていたに過ぎない。西洋の君主制は、かように本質的に民主制の原理に立脚せる他存的君主制、或は神の主權又は人民の主權に基く委任的君主制であつたのである。日本の君主制は、之とは異なり、専制の原理に立

脚した自存的君主制、又は主権的君主制であつた。天皇は超越的の最高者であり、西洋人が彼等の君主を見る様な眼で天皇を見ないのである。人格を越えた神格を有するものとして臣民群類の上に在り、絶対的の唯一者として君臨するのである。現人神と称せられ、至尊と称せられ「みこと」の「みこと」なるが故に「すめらみこと」と称せられる。ヘラクレイトス (Herakleitos) が堅琴と弓との例を引いて説明している様に、其の何処か東洋的香りのする「対立の統一」、「反撥的調和」の思想が、日本の国体位よく表明されている例はない。絶対的分離が絶対的の和合になる、こういう哲理に立脚した日本の国体、其の天皇制と、こういう哲理をも唯物的社会革命の論理として発展せしめたマルキシズムと果して何れが優れていたのであらう。こういう哲理が日本の国体に最もよく具現されているにも拘らず、それとも知らないで、西洋の民主制原理を鵜呑みにして、天皇制も西洋の君主制並みにならねば近代化されたとは云えないと主張している鵜飼信成教授や、ユダヤの精神的郷土に根差すマルキシズムを売って天皇制に弓を引き口汚く罵っている井上清氏や神川茂夫氏などは、真珠と瓦礫とを交換しようとしている愚かな商人の類いである。又専制的君主制と云うと、之を専政君主制又は絶対君主制と混同視したりする者があるが、両者は全然別個のものである。

#### 家族主義国家観にたつ君主制

第四に、日本の君主制は家族的君主制であつて、著るしくゲマインシャフトリッヘな性格を持っている。所謂家族主義国家観に基く天皇制であつたの

であり、君民間の親近性は父子の親近性に擬せられた。義は君臣情は父子である。主情的な民族性、融和的な民族性がそこに反映しているのである。然し、西洋の場合はそうではない。さかしらな主意的民族性斗争的な民族性がそこに反映しているのであって、国家と家族ははっきり区別され、家族と云う自然的な結合体の精神を国家に押し及ぼして国家的団結を図り国民相互の和協に資すると云う思想は頗る乏しい。国家は利益社会的結合体であり、国家権力は獵師達の獲物である。近世以降は、「万人の万人に対する斗争」(Bellum omnium contra omnes)と云うホップスの言葉がそのまま妥当する近代「市民社会」の視角から国家を觀念したりしている。それは西洋諸国の建国の性格を見れば、当然のことなのであって、国家自体が本来利益社会的結合体であることが分る。だから腕ずくで支配すると云うことになり之を正当付ける理窟が必要になるのである。日本の場合之と異なる。寧ろ逆に、家族の精神を国家に当はめて同祖信仰を鼓吹し、主情的民族国家を形成して来たのである。何れが政治的創意、政治政策として優れていたであろうか、愛情は灰色の理論よりも永続的であり強力である。日本の国体は此の自然の道理に立っていたのであり、西洋諸民族の科学、理論に比して、優れた民族的創作と云い得よう。マッカーサー憲法は、此の民族的創作をぶちこわし、固有の家族主義国家観家族主義的融合の理念又は政策を破壊した。そうして之を弁護している日本の白蟻達は、此の自然の道理、民族的創作を排斥して、西洋諸民族の政治的駄作と取替えようとしている愚かな人々である。糟粕を嘗めた思想



的非日本人達のミゼラブルな科学的合理主義！

民族固有の神観に基く君主制

第五に、日本の君主制は、民族の固有の神観に基いていた。神社神道は民族的公教であり、天皇制の支柱をなしていた。人間には常に、此岸の世界

に居り乍ら彼岸の世界への憧れの心があり、絶対的なるもの普遍的なるもの、理想的なるものへの思慕の心がある。其の発現形体は時と所に依り一様ではないが、こういう宗教的根源を無視しては人間性は語れない。

又、一般に宗教は、決して法や政治と無関係ではないのである。日本の国家神道は、民族の胎内から発芽し成長して来た広義の宗教であつて、神社にこもっているムードは、教会や寺院などには見られないものである。

その民族教が国家と結合し、所謂祭政一致が国制とされていたのである。天皇は此の民族教の最高祭主の地位にあり、神々の祭祀と国の統治とが結合していたわけである。然し、西洋の場合はそうではない。成る程国教制や政教同一制もあつたが、次第に国教分離が一般化するに至つており、初めから神観が違つておる。ユダヤ教は民族教としての性格を持ち、曾ては国家と結合していたが、国家の滅亡と共に分離されるに至つた。そうして彼等の宗教は、本来被圧迫民族の宗教としての性格を持つてゐる。又、キリスト教はユダヤ教を改革して個人教、国際教としたものであつて、色々の分派に岐れており同教はキリスト教のアラビアの変種であり、いくらかユダヤ教に近い性格を持つてゐる。そうして、君主制の根底に宗教があつたとしても、それは日本の場

合とは著るしく趣きを異にしていたのである。祖先崇拜や家族主義國家観と結び付いたりしていないし、神格と人格との分離が原則となつてゐる。だからして國家と宗教とが一如であつた古代猶太の君主制にしても、それはかような神人分離制、其の単神論に基く君主制であつた。然し、日本の場合は、神人融合に基く君主制であり、西洋の如き神政制的君主制 (Theokratische Monarchie) とは違ふ、一種の神政制であり、神政的君主制と見てよいが、ヨセフスがモーゼの國制に就て初めて用いた神政制の觀念はその儘では當はまらない。神政制と云つても、ユダヤの様な被圧迫民族の神人分離制に基く形態もあれば、神人融合に基く形態もあり、日本の場合は後者なのである。日本民族は、其の首長たる天皇は人格を超えた神格を見、現人神たる絶対的唯二者を立てて、そこに民族の志向する理想の映像を望見したのであり一種の論理的理想國の実現を夢見て來たのである。

かような天皇制に対しては、之を神權的天皇制、絶対的封建的天皇制、或は神憑りの天皇制と云つて非難する者がある。然し、論者の云うところを見るに、或は欧米流の民主共和制を基礎にし、或はキリスト教的世界觀を抛りどころにし、或は、本来ユダヤ的なマルキシズムの「神なき宗教」の立場等よりして論難排斥してゐるにすぎない。宗教を阿片 (マルクス) 又は一種の精神シン (レーニン) と考えた人間達によつて低次元な物質関連性の面を強調する無神論的唯物論者達は、自由を専制主義に売り渡すの愚を演じただけで、非人間的で

冷酷で味も汁気もない殺風景な国家を築きあげただけのことではないか、「人はパンのみにては生きるものに非ず」とは永遠の真理であり、人間が神の子であることを忘れて単なる自然の子と考えるのは非人道的禽獸思想に過ぎない。こういうものを信奉している人間共は、近代の野蛮人共であり、人類文化の墓堀り人夫共に過ぎない。彼等が行き付くところは、結局は又キリスト教文明であろう。神憑りと云うことなら、人民主権にしても然りである。至高の政治価値とされている人民程魔訶不思議な神憑りの存在は無からう。神の主権を焼直した自由市民的人民主権、それから労農的人民主権、それらはどれも合理的でもなければ、科学的でもなく、天皇の神的主権以上に単なる虚構、荒唐無稽な拵えことに過ぎないではないか？ 西洋思想に幻惑され其の楯となった囚人達は、神憑りの天皇制と論難する前に、天皇制に生きて来た日本の固有の神観、神的理念を再検討することから思索を初めるべきであろう。祖国の殉国者達の神々への祈り、至尊を拝戴して万民への愛情に生き抜いた先人達の宗教的情熱、それは思想的囚人共の魂はこだまして来ないであろう。（本論詳細については国民文化研究会叢書第二輯「天皇制の本質」参照のこと、発行所は福岡市荒江小柳陽太郎方国民文化研究会出版部、定価四十円）

森講師の明確なる論旨は戦後聞くことになかった驚天動地ともいふべき内容をたたえていた。講師の立場にたつ時、戦後流行した憲法改正是非論がいかに空しくひびくことか。時代に便乗せず毅然として唯一の真理をまもる教授の立論こそ、憂国の碩学の名にふさわしい内容をたたえている。しかも講義の内容が剛健質実な氏の性格に裏づけされて、一層の輝きをましているとうけとられる。勿論質問はでた。しかしその質問内容は教授の節操高き態度に畏敬してのそればかりであった。そして質問のつづまる所は、講師の立場が現代のような時代にどれだけの実現性もち得るかという点に集約された。それに対して氏は多くを語られなかった。そこに氏の真面目が躍動しているといえよう。

滔々たる世論の中に真実は真実として守らねばならない。要領のよい学者として、学問の内容を世論の前に曲げていった時、学問はどうなるというのか。真理の前に毒杯を仰ぐ学者が寥々たる事実こそ現代日本の悲劇でなくて何であろう。森講師の毅然たる姿の中に「されど地球はまわる」といって、自説を貫かざるを得なかったガリレオの心境を感じとったのは筆者ばかりであったであろうか。

森講師のあとをうけて登壇されたのは、岡大教授木下彪講師である。氏は若き頃支那にあって漢字新聞記者として才筆をふるわれ、戦後は外務省研修所講師として若き外交官に講義された。現在も中国要人や識者の間に交遊が広いと聞く。したがって台湾、香港方面から氏の所へ来る新聞雑誌著書文通は絶えることなく、氏の文もしばしば彼地の雑誌に載ることがあるという。そのような豊富な体験と智識を基礎に、日中関係を生字引のごとくに分析披露されつつ、外交なき現在の日本の国情を完膚なきまでに批判せられた。教授の講義は午前中二時間の予定であったが、参加者からの熱望から午後更に一時間半の講義を続行して戴き、堂々三時間半の長講演であった。講師の熱誠と疲れを知らぬ爆発的叫びは参加者全員を昂奮の中にまきこんでしまった。次に日中関係の過去現在及び将来と題された全講義内容を掲げる。

## 日中関係の過去現在及び将来

岡山大学教授 木下 彪

### 大陸に活躍した九州人士の系譜

我が国民文化研究会は九州から起った。九州は朝鮮中国に近く、過去に於ける我が国民の大陸発展は半ば九州人の力であった。今ざつとその中の主要人物だけでも挙げて見るならば、幕末日本人で早く東亜の情勢に活眼を開いた人は薩摩藩主島津斉彬であった。西郷隆盛はこれに啓発され、明治政府に在ってもっとも早く大陸問題を考え、部下を朝鮮と満洲に派遣して備さに視察せしめた。司法卿江藤新平（佐賀）は明治四年早くも「対外策」を建白して大陸問題を説き、外務卿副島種臣（佐賀）、内務卿大久保利通（鹿児島）は前後して清国に使いし、尊俎折衝の間に清廷をしてその人物器量に歎服せしめた。大久保の懐刀として随行し、外交文書に絶倫の才能を発揮し、爾来使命を帯びて渡清すること四度に及び、後に文部大臣となった井上毅（熊本）。二十九才で清国公使として活躍し、後文部大臣となった森有礼（鹿児島）。森に随って渡清し変装して中国内地を大旅行し、「棧雲峽雨日記」の名作を著して彼国識者を驚かした竹添井々（熊本）。その当時井上も竹添も三十を出たばかりの若さであった。西郷麾下の近

衛將校で明治十二年我国初代の駐露公使館附武官となつた山本清賢少佐（鹿兒島）は、十四年ウラルを越え、シベリヤを横断して蒙古に出で、之を縦断して北京に入った。当時の露清関係や鉄道も無い中央亜細亞を实地に視察した第一人者で、有名な福島中佐のシベリヤ単騎遠征よりも十年早く、竹添の中国視察に比すべき偉業であつた。明治十七年日清の時局を憂え自ら請うて伊藤全権の随員となり、側面から天津會議に尽した西郷従道侯（鹿兒島）。興亜會を造つて近衛篤磨公と共に東亜の問題についてしばしば清国要路と接触し彼の朝野から絶大の尊敬を博した子爵長岡護美（熊本）。帝國黨の領袖で有名な濟々疊を興した佐々友房（熊本）。彼は明治十六年我国に初めて中等学校に支那語科を置き大陸に活躍する子弟の養成に努めた。その事が上聞に達し明治天皇から濟々疊に御下賜金があつた。果せる哉、日清戰爭に従軍した支那語通訳官は大半熊本人でその数五十二名を算した。中にも宗方小太郎は戦地から変装の支那服のまま広島大本營に至り、明治天皇に破格の謁見を賜わつた。当時佐々氏の編した「清国に於ける熊本県人の略歴」なる一書があつたくらいである。日清戰爭の參謀総長川上操六（鹿兒島）。同じく海軍司令長官元帥伊東祐享（鹿兒島）。北清事變の時北京の列国外交団の指導的中心人物となつた公使にして前外務大臣たる西徳次郎（鹿兒島）。日露戰爭の元帥大山巖（鹿兒島）。大將東郷平八郎（鹿兒島）。有名な滿洲義軍を統率し全滿に花大人の名を謳われた花田伸之助（鹿兒島）。松花江畔に聳える志士の碑の沖楨介（長崎）。旅順口の軍神広瀬中佐（大分）。清露二國を相手とし外務大臣として

世界的大外交家たる小村寿太郎侯（宮崎）。駐清公使として日露戦争の蔭の立役者、後の外務大臣、満鉄総裁となつた内田康哉伯（熊本）。この人は小村侯に次いで傑出した外交家である。東亜同文会総裁として声望中国朝野に重く、夫人亦東洋婦人会長として令名あつた鍋島直大侯（佐賀）。清末の革命には九州の人士が多数参画し、その筆頭と云うべき頭山満（福岡）。その門下に我外交界の鬼才と言われた駐支公使山座円次郎（福岡）。そのほか有名無名の九州人士の明治以来大陸に於ける活躍はさながら日本興隆期の大陸発展史であつた。新聞記者でも東朝大朝の主筆西村天囚（鹿児島）の明治三十一、二年頃支那に於ける文筆のはたらきは大きい。殊に福岡の玄洋社からは無数の青年志士が輩出した。清末の頃中国の革命志士は我明治維新史を深く研究し、その原動力となつた薩長を自国の同治中興に於ける湖南、安徽に比していた。即ち湖南を薩摩に比したのだが、昔から今でも中国を支配する人物は殆んど湖南から出ている。満洲の野に清軍や露軍を撃ち破り、海には北洋水師やバルチック艦隊を撃滅した名将や勇将が如何に多く薩摩から出ているか、薩摩を始め九州人が我日本人中の精強であることを彼等は知っていた。昔中国人が倭寇をひどく恐れたことは歴史の語る所であるが、その倭寇が多く九州人であることも彼等は知っていた。「倭寇すなわち九州の人、九州の中薩摩の人を最強とす、数年前西郷隆盛乱をなす、すなわち薩摩の人にしてこゝによる」とは明治中中国人の記録である。彼等は明治の世を開いた二大人傑として西郷、福沢の兩人を尊敬し、清国時代は彼の小学生でも二人の名を知らぬはなかつた。鹿児島人の西郷崇拜は大変なものだと云う。近頃雑誌に何とかいう学者が西郷なんか偉くないと





いうことを書いているそうだが、それは「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」というもので、英雄の心事は到底小人に分るものではない。英国の諺にも「従僕にとっては英雄なし」如何なる英雄もその召使の眼には英雄と映じないのである。薩摩の人が西郷さんを馬鹿にする様になったらお終いだ。私は思う、若し西南の役に優秀な多くの私学校の子弟たちが戦死せず生き永らえて居たならば、明治の歴史は更に一段も二段も其の光りを増したであろうと。副島種臣伯は外務卿として対露折衝中、たまたま露国外務省の秘密文書を手に入れたことがあった。その中に日本攻略の作戦が記されてあり「日本の実力は多く九州に在り、日本を攻略するには先ず馬関を占領して九州との連絡を遮断するが第一策」とあったと云う。伯は爾來日本の大患は露国に在るとし、己れの長男を露国主教ニコライの門下に入れて露語を学び露国事情を研究させた。明治三十八年一月旅順陥落の報を病床で聞きつつ伯は莞爾として大往生を遂げた。其の副島伯や江藤新平の生地佐賀に今日我々は相会したのである。九州の幾多の先輩の遺烈遺風を諸君に改めて想起して頂き度いと思う。そうして諸君九州男児が起たなければいけない。或人から聞いたことであるが、満洲事変の起る直前の

こと、当時の日本は今と同じ様に赤化の風潮が一世を蔽うていた。時にモスコの日本大使館で日本人が集つて時局を談じた結果、日本の共產化は時日の問題だろうということになった。その時終始黙々として聴いていた広田弘毅大使（福岡、後の首相）は静かに坐を正し、敵かな口調で言った「若し日本が共產化したなら、私は九州に帰って全九州に反共の旗挙げをします」と。一座が肅然としたことは言うまでもない。今も日本の大患は赤化であり、ソ連中共である、それを日本人が十分自覚しない。九州男児が起たなければならぬ秋だと思ふ。以上の事を前置して本題に入りたい。

#### 明治初年から日清戦争三国干渉まで

西洋の東亞侵略の勢力に対抗して日本と中国が協同することの必要は幕末から明治にかけて識者の間に認識されていた。明治の初め我が国政府には西洋人の御雇顧問なるものが多数居り、中には随分親切に日本の為を考えてくれた人もあった。英國の駐日公使パークスは北海道と朝鮮がやがて露西亞に奪られはしないかと憂えたし、法律顧問の仏国人ボアソナード氏は「日本の大敵はロシアである。日本と支那は天然の同盟国であり、協同してロシア並びに西洋に対抗せねばならぬ。両国合すれば西洋に対抗し得べく、両国離ればアジヤは破れるであろう。日本に大政治家出でて日支韓の三国同盟を結べばロシアも恐るるに足らぬ」と。ボ氏は大久保利通に随つて北京に往つていゝ。支那は既に阿片戦争以来度々西洋の侵略を蒙り、日本も北からする露國の侵略、南からする英仏の侵略に

直面していた。西郷南洲の征韓論もその真意は対清対露策で、彼は「韓国に至り問題を解決したる上、直ちに露国に赴き日露協商の約を結び、東亜和平の基礎を立てん」と言っていた。だから彼は当時新疆の乱を平定して一時露人を辟易せしめていた支那随一の名将左宗棠に一書を寄せて、両国協力して露国に備えんことを申入れたことがあった。勝海舟も早く西力の東漸を見て海軍拡張、日清韓三国同盟の首唱者となった。然るに中国人の書いた近世史を読むと、いずれも日本人は幕末明治の頃から早く中国侵略の野心を起したと言ひ、佐藤信淵や吉田松陰の文中の句を引用したりしているが、実際はその頃の日本人にそんな野心など無く中国を大國として畏敬する念が強かった。中国人は日本を小國と侮り、明治十三年東京に東亜問題を憂うる有志に依り興亜会が組織された時も、在京の中国人有力者に、小國が興亜など潜越の沙汰だと言つて之を笑つた者があった。琉球台湾等手近な所に色々問題が起つたが、これは何も日本の侵略というものではない。どちらにも言い分が有つて結局外交的に日本の方が勝利を収めたのである。そうする中に朝鮮問題が原因となつて日清の關係が悪くなり、抛ほつて置けないので明治十八年伊藤博文は天津に赴き李鴻章と談判して天津条約を結んだ。当時支那は南方でフランスと戦争を起していたので、談判中に李鴻章は日本側に聞えるように側者に向つて「今フランスとやり合っているが、ついでに日本ともやろうか」と言ひ、丸で日本を呑んでかかった態度であつた。それから約十年、遂に日清戦争は起つた。これを要約していえば、日本は支那と共に朝鮮を一独立國と認め協力

して其の内政を改革し西洋殊に露国の侵略から守らんとしたのだが、李鴻章が「韓政闇弱といえども豈日本の更改し得るところならんや」と日本を小馬鹿にし「日本は朝鮮の友邦か知れぬが清国は朝鮮の上国だ」と空嘯いてついに戦争を避くべからざるものにしたのである。列国は鼠と象の戦争と云って日本の必敗を予想したが、日本の大捷によって講和条約が結ばれ、平和克復の詔書が降って全国民が歓喜したのも束の間、露独仏の所謂三国干渉が起つて日本は条約に依り獲得した遼東半島を放棄せねばならなくなった。

此の戦争は、日本は初から清国と一対一で戦い、外国の干渉を受けぬよう警戒していたのであったが、支那の方は伝統の「以夷制夷」に則り、裏面で英仏独露の諸国に対し盛んに対日干渉を懇請し歎願した。清国講和全権李鴻章は露国公使カシニーを唯一の相談相手とし、干渉の事を確約してから下関に來り、談判中にも再三北京に干渉誘致のことを電請している。梁啓超は其著書に於て「戦時の前中国は調停を英俄に求め、その干渉を導く。其の時日人屢々言ふ、東方の事、願はくは我東方兩國自ら之を了せん、他国をして其の間に參せしむるなかれと、我政府受くる能はず、歐人を嗾して日本を脅かす」と確論している。遼東ばかりか台湾も日本に取られたくないため英国に買つて呉れと申し込み、断られて更に仏国に申し込み、又断られて遂に洩々日本に渡したのであった。元老張之洞の如きも朝廷に上書して英露に西藏新疆の地を与えその援助を得て日本を攻脅せよと云い「倭は極めて西洋を恐るるから露や英と開戦はしない若し露英の一国でも助けて呉れば刃に血ぬ

らずして下関条約は廃せられる。若し倭が戦えば我はその陸兵を拒ぎ、英露はその海路を絶つてその首府を攻めれば倭は必ず滅びる。」などと言った。三国干渉の元兇は露国で、干渉と同時に芝罘に集結した三国軍艦二十数隻の中十七隻は露国の軍艦であった。若し日本が肯かなければ直ちに戦端を開く準備をしていたのである。日本国民は泣いて臥薪嘗胆を誓い合った。当時の清国は小国と侮った日本に敗れた怨恨から、李の策を容れて宮廷も政府も一般識者もみな「連俄拒日」として露国と連盟して日本を拒ぐという説に一致していた。ちようど今日の中共の政策と同じである。

西洋殊に露西亜の侵迫に対して、日、清、韓三国が共同の憂患を感じて協力しなければならぬ、殊に日清両国が相戦うことの非は誰の眼にも明かだった筈である。当時日本に居た有名なヘルン即ち小泉八雲は戦争中神戸ジャパンクロニクル紙の社説に「極東に於ける三国同盟」と題して「支那はどのようにして日本と攻守同盟を結ばないか、日本と支那と朝鮮はロシア或は西洋の侵略に対して東亜を保全する三国同盟を結ぶべきである。支那が外国に支配されては日本に取って非常に危険な隣人になるかも知れない。今日本が清帝国の破滅に力を加えることは重大な失策であろう」と言っている。曾てのボアソナードの説と同じである。日本でも明治初年から識者の間に東亜保全の説は極めて強くあったが、反対に日清戦争が起つたので近衛霞山公の如きは明治三十一年「日清同盟論」を提唱し東亜同文会を起して「東洋は東洋人の東洋なり東洋問題を処理するは固より東洋人

の責務に属すかの清国国勢衰えたりと雖も弊は政治に在りて民族に在らず、直ちによく之を啓発利導せば借に手を携えて東洋保全のことに従うこと難しとなさず」と言っている。三十一年創立された東亞同文会の綱領にも、一支那を保全す、二支那及び朝鮮の改善を助成す、三支那及び朝鮮の時事を討究し実行を期す、とあり。主意書には、日清韓三国の交際久しく唇齒の形あるものが前年兄弟牆にせめいだが、このあやまちを忘れ嫌を棄てて外侮を禦ぐことが急務だとしている。要するに明治の初から日清韓の提携は日本人の根本理念を成していたので、それが戦争になり、併合になりしたのも、歴史的自然の結果ともいうべく、日本が最初から計画してやったことではないのである。清国の側に在っても明治十年代に公使として長く日本に居た黎庶昌のように、幾回となく清廷に上書して日本を小国と侮り戦争することの非を言い、遂に之を苦にして死んだ人もあった。然るに当時の清国が如何なる態度であったか、それはエチ、エー、ギボンスの著した「亞細亞の新地図」が最もよく其の真を伝えている。「欧米諸国が朝鮮の混乱に乗じて各その公使館により陰謀をめぐらし利権を争い、朝鮮は餓鬼の腐肉を拾うが如き状に陥った時、日本は之を見て驚き朝鮮の完全な独立を主張し……日支両国が欧米の侵略勢力に対し提携して共同の外交政策を取るべきか、將た敵となつて相争うべきかを決すべき重大な時期に達した時、日本は久しく支那の無力無能にして自らその主権の侵犯さるるを防ぐ能はず、その庸懦にして腐敗せる政治家がややもすれば欧米人の爪牙となり、国を売つて辭せざるを見て常に不安を感じ、且つ

怒り且つ抗議したのであるが、それでも支那は極東を其の支配下に置こうとしつつあった欧米諸国の脅迫に屈して、朝に一の権利を割き、夕に一の利益を与え、譲与を重ねつつあった。實際支那の政治家は、自己の庸懦と腐敗により支那の利益とともに、日本の利益否極東全体の利益を欧米諸国に供与しつつあったのである。又ロシアに与うるに北朝鮮及び日本海の沿岸に於ける強固なる根拠地を以てする過誤を敢てした。日本は支那に勸むるに協力して朝鮮の内政を改革することを以てした。この提議は不合理なものでなく、又実行し得べきものであり、支那は抗議すべき理由が無かつたにも拘わらず、宗主権を主張して抗議し、遂に戦争を避くべからざるものとした」と。こんな有様で「連俄拒日」が清国の上下に盛んに唱えられ、劉坤一、張之洞、李鴻章等元老の建白書や有名な敵復の「中俄交誼論」陳虬の「論俄国助中国論」などを読んで見ても、みな「俄と結んで日を拒ぐべし、日と結んで俄を拒ぐべからず」とか、「俄を撫するは言議すべきも日本を畏るるは言議すべからず」とか、「俄は中国のため日本に遼東の侵地を還さしめた、朝廷は宜しく大臣を特派して申謝せしめ、密約を締結して無事には利益を同じうし有事には相扶助せば、日本人を震撼せしむるであろう」とか「俄は中国を助けて日本を拒ぎ、之をして朝鮮の事に干預せしめぬであろう、俄は東方に志あり、一朝鮮は未だその欲望を満すに足らず、朝鮮を経て日本を取るであろう、日本ひとり之を悟らないでいる」等と言っている。梁啓超が「当時中国人、欧力を借りて日を拒がんと欲する者、独り李鴻章のみならず、他人これよりも甚しきあ

り」と言った通りである。其の基調は事大思想に在り、日本に対する感情は殆んど冷酷に近い。だから稀に黎公使とか近衛公のような人が有つてもどうにもならなかつたのである。

**露清密約、北清事変、日英同盟から日露戦争まで**

対日干渉で清国に恩を売つた露国は直ちにその報酬を求めだした。明治二十九年ニコラス二世の戴冠式に当り、清国は前年露国に使したことのある王之春を祝賀使節に派遣せんとしたが、露公使カシニーは清国政府に向つて「日本は三国干渉の結果露国を恨み、他日の捲土重来を策している。中国は東北を保全せんとすれば、露国と共同防衛を謀る外はない、それには李鴻章の如き老成持重者を使節として派遣せられたい」と要求し、李の露都に入るや鄭重なる国賓待遇を以て迎え、外相ロバノフ、蔵相ウイッテをして李と交渉せしめ、李に多額の賄賂をつかませ、日本を仮想敵国とする露清秘密攻守同盟条約を結んだ。その第一条に「日本が露国の亜細亜の領土或は清国韓国の地を侵せば兩國は陸海軍兵器糧食を以て互に相援助する」とあつた。ウイッテは李に「日清戦争で我国は貴国を救援する為ウラジオから兵を出したが鉄道がないため吉林まで行かぬ中に戦争が終つてしまつた」と言い、シベリヤ鉄道に直結して滿洲を横断する鉄道の敷設権を獲得し、事実上中国の東北を其の勢力範囲の下に置いた。かくて露帝は独乙皇帝と了解の下に其の東方経営を進め、二年の後には更に清政府に迫つて先に日本に吐き出させた旅大を租借し軍事基地とした。独乙は膠州を占拠し、英国は威海衛を租借し、仏国は広州を租借し、各々勢力範囲を定めて



鉄道、港湾、鉱山等の利権を併せて獲得した。十九世紀後半の列強の中国侵略の激化は露清密約に端を發したと言つてよい。下関談判の際、李鴻章は伊藤全権に向つて「同文同種の日清は列強の忌む所である、講和後は親密なる友邦として和交を結べば白色人種恐るるに足らず」と言つた。その彼が踵を廻して露都に赴き日本憎しの一念で露国と結んだのである。出発するとき彼は「露を引いて日を制するのがこの行の要策だ」と洩らし、帰り来るや「これで二十年は無事だ」と言つたが、二十年はおろか一年有余にして露国は満洲全土を武力占領した。李は露帝に謁見の際「大清皇帝に代り露国皇帝が日本から遼東を奪還した好意に謝意を表した」と其の日記に書いているが、遼東を取り返して貰つて、その何層倍か知れぬ全満洲（遼東も含む）を奪われた、こんな馬鹿な話があるか。中国人の書いた近代史は殆んど此の間の露国外交の詐術權變と、李鴻章の誤国の咎を痛論していないものはない。露清密約の草案が北京に届いた時、清国皇帝は一見して驚き怒ること甚しく、批准を肯んじなかつたが、カシニーは賄賂を以て實際の主權者西太后に取り入り、あらゆる手段を尽してその承認を得たため、清帝は涙を呑んで之に批准したと云う。条約は蔽秘に付せられて外国に知れず、略ぼ嗅ぎつけた伊藤博文は明治三十一年北京に往き李に會つて「君は北方に強力な藩屏を造つたそうだ」と皮肉つた。伊藤は清帝にも謁した時大いに意見を述べたかつたらしいが思うようにならなかつた。当時我朝野には若くて進歩的な清帝に対する同情と理解があり、明治天皇が九州に行幸の際、兩帝の會見を囃らんと企てが一部に

あつたが遂に果されなかつた。清帝は日清戦争に当り主戦論であつたが、戦後皇帝を中心として清廷の一部に連日（日本と連合）の議が起り、明治三十一年夏、黄遵憲を駐日公使に命ずるに当り、その携行する国書に「大日本国皇帝」とある所へ帝自ら筆を執つて「同洲同種同文最親愛」の九字を加え、書中の詞意まで少しく改め、侍臣をして之を日本の公使矢野文雄に就て商量せしめ、この事を連日に反対の李鴻章に秘密にした上、李を総理衙門から罷免した。又皇帝の側近者が一日矢野公使を訪れて、帝の変法の計画が失敗した時は帝を日本公使館に於て庇護されたいと申し込んで来たことがある。然るに不幸にして有名な戊戌政変が起り、皇帝は太后のため幽閉の身となつた。

光緒皇帝を中心として連日を謀つた一派は同時に变法を企てた一群である。すなわち康有為、梁啓超、唐才常、譚嗣同等はその主なる者で、彼等は西太后、李鴻章等の連露拒日派と対立した。譚嗣同の文に「このころ湖北に在り、日本政府遣はす所の官員三人と語るに、言ふ『中日唇齒相依る、中国存する能はされば日本亦亡びん、故に従前の交戦を悔ゆ、願はくは中国と連絡せん、中国を救ふは亦自ら救ふなり、聞く湖南に学会を設立すと、自強の基これより起らん』と。日本全盛の勢により猶ほ危亡を恐れ、憂へ我国に及ぶ、我何ぞ自ら危ふんで自ら振はざるべけんや」とある。すなわち当時我政府の意を受けて彼国に赴き兩國の連合を運動した者があつたのである。これは譚嗣同等が湖南に南学会を組織した明治三十年のことである。言う所の日本の官

員三人は誰か分らないが、当時湖北武昌の湖広総督張之洞のところへは日本朝野の人物が東亜の問題を提げて盛に来往したものであった。近頃は日本人でも曾ての日本政府とか軍部とか言えば年中支那侵略ばかり企てていたもののように思う者が多いが、大変な間違いである。日清戦争の後川上参謀総長は最も東亜の安危を慮り部下の福島、宇都宮等優秀な参謀を支那に派遣し有力なる督撫を歴訪して日支の軍事提携を謀らしめ、彼国の求めにより多数の将校を送つて其の軍事指導に当らしめた。それ等の将校の中には仮弁子を着け、支那服を纏い、支那語を操り、誠心誠意支那を助け支那と提携して西洋の侵略に当り、東亜の復興を謀らんと念願した者が少くなかつた。それが為彼国朝野から多大の信頼を受け感謝された立派な軍人も多い。それは日露戦争の前後を最高潮とし辛亥革命の後までも続いた。その空気の中には支那侵略などという野心的なものは微塵もなかつた。又同じ時期に彼国の教育方面に傭聘せられた、いわゆる日本人教習は中国全土に亘り幾百人にも及んだ。又民間の志士が多数身を挺して彼国の革命運動に参画したことは欧米の国には見られぬことであつた。實際日清戦争は中国の識者を覚醒せしめ、日本と結んで変法自强を企てんとする気運が興つた。支那の革命の士は殆んど日本に留学し、辛亥革命の原動力は殆んど東京に於て培養せられた。

日清戦後の日本は与国を持たぬため一对四（清露独仏）で屈服した苦い経験に鑑み、それ以来英米と同盟して露に対抗せんとする日英同盟論と、露国と妥協の途を発見せんとする日露協商論と、この二つの流れが有つ

た。然るに露国の野心は既に満洲から朝鮮に伸び、韓帝を籠絡して親露内閣を作らしめ、更に軍隊を入れ、やがて朝鮮を併呑せんとする勢で、日本が朝鮮の北部を緩衝地帯としようとして譲歩したのにさえ応ぜず。その間に北清事変が起つて八国の連合軍が北京天津に進駐したが、露国はこのどさくさに紛れて十八万の大軍を以て満洲全土を占領し、清国を強要して満洲蒙古を事実上自国の保護領とする条約の締結を迫った。一方この事変中日本軍の發揮した勇武と事変後我政府の示した正義は慧眼なる英国人の認むる所となり、間もなく彼より日英同盟を提議し来り、これに米国の東亜政策が加味されて明治三十五年日英同盟が成立した。ここに注意しなければならぬことは英国は露の南侵に対抗して日本と提携せんとしたが、露国も日本と衝突することなく満洲朝鮮を手に収めんとし、盛に日英の接近を阻止し日本抱き込みを策したことである。その為日露協商論者の伊藤博文は明治三十四年露都で大歓迎を受け、露と交渉する所あつたが要領を得ず、結局英明なる明治天皇の聖断で日英同盟は成立したのである。今日米ソの双方から吸引されている日本の状態は当時に類似したものである。歴史は繰返すという、鑑みねばならぬことである。

中国人は、日清戦争後の日本は亜細亜の一員たることを忘れ、西洋列強の尻馬に乗って、帝国主義を以て中国に臨むようになったと言ひ、北清事変をその顕著な例だとする。然し当時中国が日本と同じく自強を図り、日本と提携していたら、北清事変も起らず、露国の侵略もなく、日英同盟の必要もなく、両国で西力に対抗出

来たてであろう。それが出来ないのは中国が弱体で日本の新興勢力ぐらいではどうにもならなかったのである。それのみならず中国は「小邦日本」と協力することを肯んぜず、李鴻章等は露国の勢力を引込んで日本に敵対しようとしたのであるから、寧ろ東亜の裏切者は彼であつて、日本は彼から責められるべき理由はない。彼国の古い諺に「慢<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>誨<sub>レ</sub>盜」というのがある。くらの戸じまりをおこたつて盗人に入られても仕方がない。中国は自強を怠つて帝国主義の侵入を招いた、殊に悪質の強盜を引入れた。当時の世界は強国はみな帝国主義であり、弱国は被侵略国であつた。日本は支那のような被侵略国となりたくないため、西洋文明を以て自強し全力を挙げて西洋式帝国主義を追跡した。この点を理解せずして日本の帝国主義がどうの言うは間違つてゐる。中国人の書いた近世史を見るに、いずれも皆西洋と日本の帝国主義を同一視して一概に悪罵するのみで、自国の「慢<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>誨<sub>レ</sub>盜」ことの方は思い及んでいないようだ。北清事変に当り、近衛霞山公は日本は清国を援けて七国連合軍に対抗せよと山県首相に進言している。同じ東亜の日本としてそうありたいのは山々だが現実には不可能なことで、山県は反対している。その時の清国は連合国に向つて宣戦したほど無暴で到底日本が之と共力出来たものではない。事変中は中国官民とも日本軍に大いに感服したと見え、当時の記録に、八国連軍中日本が一番正しく米國之に次ぎ、最も暴悪なのは独、露二國の兵だと書いたものが種々伝わっている。事変処理に当り中国側全權となつた李鴻章は非常に苦心したらしく、殊に従来の悪縁で露国から満洲に関する条約の

締結を臨終の一時間前まで執拗に迫られ、遂に精神に異常を来し血を嘔いて死んだ。彼が此の時如何に困ったかは、敵対的な我国の伊藤博文に助力を求め来り、伊藤が応諾を告げた書類が今残っていることでも知れる。

日英同盟が日露戦争に際し如何に貢献したか、日本の戦債が英米の借款に負うばかりでなく英国は独仏二国に対し露国に加担せざるよう通告し且つ監視した。米大統領ルーズベルトも独仏両政府に対し「若し兩國が日本に対し往年の三国干渉を繰り返すならば米国は日本に加担して日本の為に尽すであろう」と通告した。

その為独仏は中立し、露清密約の清国は密約の張本人李鴻章が死に、清国自身露国に満洲を強奪されているので、これ亦頗かぶりで中立を宣言してしまった。かくて日本は露国と一対一の戦争をした。今度は三国干渉の如きが起らぬのみか、米大統領の調停に依り講和が成立した。露国全権ウイッテは小村全権に「戴冠式の時李鴻章が来て頻りに日本の脅威を説くから、再び日清戦争になったら援助するということを口実にして北満の鉄道敷設権を得た。実は日本に対する共同作戦から同盟を本気に考えたことはない、その証拠に今度の戦争で支那に条約の履行を迫ったことはなかった」と言った。かくて露清同盟は秘密のまま闇から闇へ消えてしまった。我が全権小村外相がポーツマスから更に北京に赴き清国側と「満洲善後協約」を折衝した時、清国側は極力日本を抑制せんとし、全権をして意外の困難に逢着せしめ、折衝はポーツマスの時よりも長引いた程であった。これより先、清国政府はポーツマス講和会議に自国代表を参加せしめて発言権を獲得せんとしたが、米大

統領は一兵一銭も費さざる清国にその権利なし」と言つてハネ付けた。又清国は戦争のため満洲に於て自国の蒙った損害に対し両国の賠償を要求すると言ひ出し、これ亦一蹴された。戦局の終り頃には清国は戦後満洲の処分問題を列国会議を開いて討議せんと色々策動したが、列国の顧みる所とならず失敗に終つた。当時中国に行われた論調の大概一致して言う所は——南満は日本の権利に帰し北満は露の勢力下に在り、日露戦争といふものは実は満洲分割の別名に過ぎず、中国は名は中立で実は戦敗に等しい立場に置かれたと云うにあつた。綺芳といふ人の文にも「露人は中国の旅大を日本に与えて戦敗の賠償品とし、日本は満洲を私有財産の如く考へ、今や日本唯一の植民地とした。だから日露戦争で敗けたのはロシアではなく実は我が中国である」と。これは確かに半面の道理であろう、が当時清国は満洲を事実上露国に取られたままどうすることも出来ず、しかも露国と攻守同盟を結んでおり、中立とは云いながら満洲の土地鉄道港灣を挙げて露の利用に委ねたのである。それを日本が戦い取つた上、支那に還付したのであるから、それに条件が附いたのは当然である。日本としては敵国と同盟した清国を準敵国として取扱ひ、戦勝国らしい要求もできた筈と言わねばならぬ。そればかりではない、日露戦争の切迫した時のこと、我外務省は時の駐日清国公使李盛鐸を招いて開戦の決意を告げ、日清両国の同盟して露に当らんことを提議したのであつた。然るに李公使は表面で賛意を表しつつ本国政府に向つて「日露將に戦はんとす、我国は宜しく中立たるべし」と打電した。蓋し当時の中国人で日本が勝つと思つた

者は一人も無かつたであろう。自国の領域を戦場にされ主権を行使し得ずして中立とは弱国の通辭に過ぎない、だから開戦に当っては日本は正式に清国に中立嚴守を勧告する外なかつた。露清密約の概要が判明したはずつと後華府會議の時で、当時米国の外交史学者は「若し日露戦争の時日本がこの密約を知っていたなら、南満洲は勿論全満洲まで日本の領土となり、列国も其の正当なるを認めただであらう」と論じている位である。後に満洲問題で国際連盟に出た松岡全權もこれと同じことを言っている。若し清国が満洲から露を撃退して呉れば日本は敢えて国運を賭して露と戦争する必要はなく、清露か、或は日清対露の戦争で済んだであらう。元來清と提携し韓を助けて露に当るのが日本の素志であつたのだ。そうなれば満洲が後日中の難問題となることもなかつた筈である。それに若し日露戦争に露国が勝つたならば、露は全満洲を併合し、魔手は更に華北全域に及んだであらう。従つて列強の支那分割は更に劇甚を極めたに違いない。少くとも日本の勝利は中国の不幸ではなかつたと断言して可なりである。

### 日露戦争後の一期間

日露戦争に勝つた日本は世界一等国の資格を与えられた。由來戦争の勝敗で国の分野を定めるのが欧米の慣習である、だから日本も大東亞戦争に敗れると忽ち四等国と言われた。而も日本人自身も言われる通り四等国民の気持になつてゐるから不思議だ。或る中国の著名な学者は日露戦争に参加した多くの露国將校に色々戦争の話聞いたところ、彼等は異口同音に「今度の戦争に於て



日本人の現わした勇氣は話しただけでは信用が出来ない程のものであった。あのような勇氣は世界始つて以来たった一度現われたことがある。それはスバルタ人がベルシャ軍の侵入を防いでテルモピレーで一人残らず戦死した時に現わしたものである」と言つたと記録している。孫文は日露戦争の終り頃英国から帰国の途中スエズやコロンボで奴隷の如く使役されているアラビヤ人や印度人が、彼を日本人と間違えて「日本は勝つた」とズヤの如く喜び叫ぶのを聞いたという。大正十三年孫文は神戸に来て演説した時、此の事実を回顧して語つてゐる「日露戦争の始つた年私は歐洲に居ましたが、東郷大將が日本海に於て露国艦隊を全滅したと云う報道を聞きました。この報道が歐洲に伝わるや全歐洲の民は恰も父母を失つた如く悲しみ憂えたのであります。英国は日本の同盟国でありながら大多数の英国人は日本がかくの如き大勝を博したことは白人種の幸ではないと思つたのであります。これはまさに「血は水よりも濃し」と云う觀念であります。日本が勝つてからアジア民族の獨立運動が起りました。エジプト、ペルシャ、トルコ、アフガニスタン、アラビヤ、インドが相次いで運動を起し大なる希望を抱くようになりました。アジアの最大民族は日本と中国であります、この頃兩國は互に相関せず焉の態度を取つて居るのであります」云々と大亜細亞主義の説を高唱したのである。其の孫父は生前度々日本に亡命し日本の志士と結託し、常に「日本の助力に依り滅満興漢の革命が成功すれば建国は長城以南に限り滿蒙は日本に割讓する」と言つてゐた。之が滿洲を發祥の地とする清廷に聞えて問題となり、慶親王

は親翰を伊藤博文に寄せて孫文の放逐を依頼し來ったことがある。その後にも孫文は同じことを我が桂首相にも明言している。由來漢民族の伝統觀念からすれば滿洲は中国の内ではない所謂る辺境の化外の地であった。李鴻章などはこれをロシアに対する引出物にしたくらいで、辛亥革命の前と後では中国人の滿洲に対する觀念は画然と分れている。

日露戦争直後、東京に集った中国の革命主義者たちによって機関誌「民報」が発刊されたが、それに掲げられた六大主義の五に「主張中国日本兩國之国民的連合」とうたつてあつた。その頃東京には中国留学生が激増して其の数は万を超え、彼等は口々に「日本の立憲が露国の専制に勝つたのだ、日本の立憲制度を学ぶ」と言つていた。その前北清事變の時露軍が滿洲に侵入し、ブラゴエシチエンスクで中国人民六千余人を大虐殺した報の伝わつた時、日本留学出身者たちは挙つて義勇軍を組織し露に当らんとしたことがある。中国人が真に愛國心、民族主義に目覺めたのは、日本留学生によつて始まると言つてよい。明治の初から現在に至るまでの間、中国人が心から日本を理解し敬慕したのは日露戦後から辛亥革命頃までの僅かの期間のことであつた。この時こそ日華提携のみならず、印度をも加えて亜細亜復興を図るべき絶好の機会であつた。然るに日本にも中国にも一少数の先覺者を除く外深謀遠慮の大政治家がなく、この機会を空しくしてしまつた。殊に日本人が日清日露の戦勝で気が驕り、極端に中国、中国人を輕侮したことは、折角の中国人の日本を敬慕する氣持を冷

却させると共に彼の事大意識を刺戟して却って反感を抱かせるような結果になった。又当時の我文部省が彼国に勃興した革命思想を理解する能わず、清国政府の依頼により留学生取締規則を制定したことは失策であつた。これに憤激して自殺した留学生陳天華の絶命書なるものがあり、一時に喧伝されたが書中「近人親日を主張する者あり、排日を主張する者あり、鄙人おもへらく二者皆非なり。日本此次の戦ひ東亜に功なしと言ふべからず、もし日本一戦せざれば中国已に瓜分せらるゝも知るべからず。日本の一戦あるに因り中国は残喘を保つ。堂々たる中国を以て日本に保護せらる、もし之を恥づれば自強に如くはなし。」云々と言っているが、これは当時中国識者に共通した考えであつたろう。一戦は無論日露戦争のことである。親日か排日か、彼等は迷つたのである、期待と実際とが一致しないからである。日本を慕い希望を抱いて留学しながら、国に帰って排日を事とする者が多くなつた。我国識者にこの機微を察して対策を立てる者も無かつたのではない、洪沢栄一子の留学生同情会其の他有力な会も幾つか有つたが及ばなかつたようだ。その頃印度の志士たちで対日接近を謀る者もあつたが、日英同盟が障害となつたことは已むを得ぬ。当時中国一流の論客で学者であつた章炳麟が東京に居て、頻りに民報誌上に書いた論説は頗る箇中の消息を伝え興味深いものがあるが、ここにはその中の一つだけを抄訳する。

明治四十年四月二十日、東京に在る印度人某が主催して西婆耆王の記念会を虎の門の女学館で開いた。西

婆耆王は蒙古帝国に抗して印度の独立を全うした人である。中国人数人、日本人百余人、英国人も列席した。来賓大隈重信は馬車で乗りつけ、英人士女の列坐する者を見るや、鞠躬握手すること恭謹を極め、演説して言ふ「英国皇帝の印度を撫すること至仁博愛である、印度人は社会改良をつとめ暴動を謀るべきではない」と。炳麟は怪しんで考えた「大隈は東方の英傑にして、かく英人に媚を呈するは日英同盟の故とはいへ、今は野に在て国政に預からざるに猶ほこの言をなすこと不可解である」と。某印度人は炳麟に言った「今から一千年のむかし、印度と日本の僧が支那の僧を訪ねたことがある、その時支那の僧は二人に対し、わが三国は扇の如し、印度は紙、支那は竹、日本はかなめであると言った。然るに今や紙と竹は破れ、独りかなめは完善である、かなめは小さいが大きな柄を斡旋する、宜しく三国提携すべきである」と。その後又大隈は演説して言った「亞洲文明の国は今日日本が第一、次は支那である。パピロン印度は昔は文化があったが今は共に比較するに足らない」と。之を聞いて支那人は喜び印度人は怒った。一日印度人某は章氏を訪ねて言った。「日露戦争以来日本人の態度は傲慢である。支那を蔑視し印度を悪口する、日英同盟あるため印度人の独立運動を恐れている。独り大隈のみではない、その国俗がそうである。日本の文化は支那の儒書文芸を取り印度の仏教を入れ、印度、支那なければ日本は野蛮のみ。今印度の亡びたるを視、支那には戦ひ勝ち、朝鮮を属国とし、驕って自ら貴しとする、白人を引いて同類を侮辱するものである」と。

以上によつて当時日本、中国、印度三国人の感情を略ぼ窺うことが出来よう。大隈という人は偉い人に違いないが大言を好んでやや誠実に欠くる所があつたのではないか、政治的に伊藤博文とせり合つたが及ばず、明治天皇の信任が得られなかつた。伊藤が韓国統監となつた時「おれは支那統監となる」と言い、一時の戯言ではあるが支那に聞えて彼国人に日本の禍心を疑わせたことがある、まずいことである。ここで平心に考えて見よう、当時の世界の形勢から日本として積弱の中国、亡国の印度と連盟して、日英同盟を断つて白人諸国と対抗する、中国から印度から欧米勢力の駆逐を図る、そういうことが出来るであろうか、出来ないのみならず三国共死にするだけである。何も日本が亜細亜を裏切つた訳ではない。印度の独立運動は日露役に於ける日本の勝利に刺戟されて活発化し、戦後印度人は競うて我明治天皇の御写真を求め一時は戸毎に之を掲げたような有様であつたと云う。今度の大戰の後に印度、緬甸が独立し得たのも日本の大東亞戦の影響がある筈である。印度は措いても、日中国民感情の推移は両国国交史上極めて重要な点であるから他日改めて細論したいと思う、ただ一言記して置きたいことがある。終戦の時私はひそかに考へた、日露戦後亜細亜の先覚者たちが描いて終に成らなかつた夢、日本、中国、印度三大民族の結合といふことがこれから実現出来るのではないか、又出来ねばならぬと。然るに幾ばくもなく中国は共産国家に變つてソ連と連合し、日本を敵国視するに至り、印度は反共というが今後どうなるか測られず、亜細亜の禍は依然として続くということである。

日露戦後は日本を中心とせずして極東問題を処理することは出来なくなった。日仏協約、日露協定が成立し次で日米覚書が交換され日英同盟は更に改訂強化された。第一次歐洲大戦が起つた時、英国は参戦の四日目に早く日本の援助を申し込んで来た。日本は遠い歐洲にまで同盟の義務を負うものではなかったが、同盟の情誼を重んじて参戦し我が海軍は地中海にまで遠征した。日英同盟が両国に裨益したことは莫大なるもので而も両国は終始同盟の信義に背いたことはなかった。初め同盟が提議せられた時、我が国としては外国との同盟は前例のないことなので外務省は特に英国の外交史を研究し、その結果英国は容易に外国と同盟しないが、一旦同盟すればこれに忠実なる国で、十八世紀以後彼が同盟条約に違反した例はないということを確かめ安心した。同時に極めて簡単に國際条約を結ぶが、又極めて簡単にこれを破る条約侵犯の常習犯はロシアであることを知つたと云う。日英同盟を結んだことは日本の大成功であった。若し反対に日露協定が出来ていたら、露国はいずれこれを踏み破つて滿洲朝鮮を併吞し結局日露戦争は避けられず、盟邦なき日本は露又は露独仏を相手として孤軍奮闘しなければならなかつたであらう。第一次大戦の時英仏露三国は単独不講和を約したロンドン宣言を發し、やがて日本もこの宣言に加わつたが当時日本でもイギリスでも露国の裏切りを憂慮し、石井駐仏大使は十八世紀末の七年戦争（一七五六—一七六三）でロシアがオーストリア、フランスとの同盟に背きロシアと単独講和した例を引き英外相グレーに警告する所あつたが、果して三年の後ロシアは独逸二国と単独講和して

ロンドン宣言を反故にした。露国の不信不義は昔から国際間周知の事実で、彼は自分の都合次第では国際条約を一片の紙屑としか見ないのである。今日米ソの対立も米の根強い対ソ不信がその根元をなしている。米国は日本の如く迂濶ではないのである。昭和十一年日独防共協定が成立したのはソ連を目標としたことは云うまでもない。然るに幾何もなくヒットラーは吾国に黙ってソ連と不可侵条約を結び平沼内閣をして複雑怪奇の語を残して退陣するに至らしめた。ところが十五年には忽ち日独伊の三国同盟にまで発展したが間もなく日ソ不可侵条約が結ばれて独ソ両国が死闘を繰り返している最中に、日本は盟邦独逸を救援することもしなかつた。更には独逸軍が怒濤の如くモスクワに迫った時、先にノモンハンや張鼓峯の苦杯を嘗めた日本がソ連の背後を衝いたならば今日のソ連なるものはとくに消滅していたろうに、この不思議な三国同盟はお互に何等の協同作戦もなく日本の鋒先は逆に米英に向けられてしまった。揚句の果て孤城落日に陥った日本に対しソ連は俄然その本性をあらわし、有効期間中の不可侵条約を破棄して挑戦し來つたのである。中華民国も日支事變の起つた後間もなく中ソ不可侵条約を結び、これには軍事的な秘密協定まで附属しており、その主旨は日本牽制にあつたのであるから、それから四年後に日ソ不可侵条約が出来たことは明かにこの条約に違反するものであつた。然るにソ連は中ソ間に変化なしと詭弁を弄し、中国側は頗る不満だったが、戦争末期の一九四五年には、お互い連合国の一員として共同敵国の日本を主目標とする中ソ友好同盟条約を締結した。これも亦複雑怪奇な話で

あるが、その後ソ連が度々条約に違反するので中国は之を連合国に訴え、その公認を得て一九五二年条約の無効と廃止を宣言した。それに先んじて中共は又日本を仮想敵国とする中ソ友好同盟条約を結んだ。簡単に条約を結び勝手に条約を犯すのがロシアである。思えば中国と露国が日本を敵として同盟すること僅に六十余年このかた三度に及んでいるということ。それからヘルソンの言った如く支那が外国に支配されると日本に取って危険な隣人となるということ。これは過去から現在の日中関係を考えるに當って国民の深く三思しなければならぬ所である。今やソ連に支配される中共が日本に取って如何に危険な隣人であるか。

米国は十九世紀の半ば頃から太平洋に関心をもった。日本を開き布哇を併せ比律賓を取り（一八九八年）支那の門戸解放を宣言し（一八九九年）日本に対しては常に同情と援助を惜まなかった。その米国が日露戦後急にその対日態度を変えた。同盟国の英人が日本の大勝を喜ばなかったと同じく、米人はその東亜政策として日本が極東に於て強くなり過ぎることを忌むた。日本は露国を逐つてその後釜に据つたと見た。その後一張一弛があつたとは言え之が一貫した米国の対日態度となつて、日本を目標とする大艦隊もこれがために建造された。排日と云う事件は中国に於けるよりも先ず米国に於て起つた。やがて日米戦争と云う語が日本でも米国でも日常聞かれる言葉になった。かくして日支の外交は直ちに日米の外交となり、ついに今次の戦争即ち日支事変から日米戦争にまで発展せずには止まなかつたのである。



日露戦後の日露は一九〇七年、一九一〇年、一九一二年、一九一七年と累次に秘密協定を結んで満洲に於ける彼我の勢力の分界を定め、雄厚なる資本を以て支那に経済進出を策せんとする米国に対し、協同対処せんとする形を取った。遂に大正の初から日露同盟の構想を描く者があった。曾ての日英同盟の首唱者山県元帥や桂首相が是であつた。昨日の敵ロシアは今日の友に変わったと同時に、昨日の友米英は今日の敵に早変わりしつつあつた。第四次日露秘密協定に「支那が日本又はロシアに対し敵意を有する第三国の政治的支配に帰せざらんことを肝要とす」とあり、その目標は明かに米国であつた。然るに一九一八年露国革命が成就して労働政権が出現するや情勢は又一変した。同政権は支那に於ける帝制ロシアの權益を廃棄し支那の反帝国主義運動を支持すると声明し、大いに相手の好感を博した。一九二四年中俄協定なるものが成立したが、実際には中央アジア沿海州外蒙北滿等、帝制ロシアが奪つた中国の旧版図は一として中国に返つたものはない。そればかりか僅か三年の後には中ソ国交断絶し、一九二九年にはソ連は軍事行動を起し、中国軍を破つて北滿の各要地を占領した。要するにロシア人はロシア人である。帝制時代も共産治下もその本能的な帝国主義に変わりはないのである。英国の史家が云つた「露西亞の建国精神は掠奪主義である」と、蓋し確論である。

李鴻章の時代が去ると共に袁世凱の時代が来た。袁は李の連露に代るに連米を以てし、部下の官僚も唐紹儀以下米國留学出身の親米主義者たちで固めた。それに当時の米國公使ロクヒルや上海總領事ストリートなどが

盛んに彼等の親米排日を煽り、一時清美（清国と米国）同盟の説が流れた位である。唐紹儀は日露戦後の満洲に奉天巡撫として居た時、米国の勢力を引入れて日本の満洲に於ける地位を脅かさんと図ったことがある。袁は唐を遣米欽差大臣として米国に送った。唐の一行は途次東京で桂首相の招宴に臨み、席上「満洲は中国の領土である、日本官憲の行動は我主権を無視する、中国は列強の裁断を仰ぐ積りである」と露骨無遠慮な発言をした。満洲問題、支那問題で日本が米国と戦うようになった淵源はこの辺に在ると言えよう。当時章炳麟は「清美同盟の利病」を著わし、「清美同盟を主する者袁世凱と為す……日本の驕矜なるは吾良友に非ざるも、其の亞洲に在りて、東は美（米国）氣を蔽遮し、西は歐洲群衆をして東方に於てやや制斂せざるを得ざらしむること、楹はしらの屋を支うるがごとし……亞洲諸国の日本を視るは猶ほ肺腑のごとし、遠く白人の比に非ず」と言つて清美同盟を非とし、日本が白人の亜細亞侵略を阻止し、亜細亞という傾きかけた家屋の柱となっていることを認めた。然るに結局中国は米国に頼つて日本を排斥する方向に進んだ。少くとも民国以前の彼国に日露戦争を日本の侵略だの帝国主義だのいうようなことを言うものは居なかつたのである。当時孫文は「中国官僚好んで美（米）国の勢力を引き日本を拒ぐ、是れ大誤なり」と云い、米国の対日圧迫を危険として「美国の日本を倒すはたまたま強敵の接触を招くのみ、両敗共に傷くに終らん、日本の利に非ず亦美国の利に非ず、尤も中国の利に非ざるは明かなり」と云つた。この孫文の杞憂が今日事実となつて現われたことは何たる不幸である

う。孫文は何も四十年後の今日まで予見したわけではあるまいが「米国は日本を倒せば強国と接触する」とは、今日日本を倒してソ連に直面したことに当る。これは「日本の不利、米国の不利、最も中国の不利」と言つたのは大陸が共產主義の鉄幕下に陥つた現在のことに当るではないか。民国十四年孫文が死んだ時はまだ六十歳である。天が今十数年の寿を仮したなら今日とはよほど局面が変わつていたのであろう、惜むべきである。

### 大正、民国時代

大正の初め我加藤外相は旅大の租借期限が十数年後には切れるので之を延長しておく為、さきに駐英大使を辞して帰る時英外相エドワードグレーに「日本人は南滿洲に樹木を植えて生長を楽しんでいる」と言い、グレーは「否樹木のみではない、日本人は血と汗を植えた」と言つたので安心した加藤は、旅大のみならず山東其他支那問題全般の解決を計る為二十一箇条を支那に提出した。当時はまだ世界の帝国主義時代で、露や英や仏やその他列強の勢力範囲が中国領土内に画分されており、その均衡上日本としては旅大を放すことは出来なかつた。この時歐洲戦争は東洋にまで波及し、日本は山東の独逸勢力を一掃し、戦後講和会議の際一定条件の下にこれを中国に還付すると声明した。後に中国も連合国に与して対独宣戦したため、山東は日本の手を經ず、直接独逸から中国に復歸すべきものとの、其後の中国の言ひ分は少し虫が好すぎる。中国の参戦は紙上のことである。山東を奪回したのは日本の犠牲に於てである。殊に血と汗で築いた滿洲の工業、その鉄と石炭を失えば日本は三等国以下だ。期限通りに旅大を手放す、無条件で山東も

返すということはそれは結構なことであろうが、ここまで来た自国の国力も地位も捨てて自ら弱小国の線に引退るといふこと、それは人類が神のような心にでもならない限り何処の国だつて出来ることではない。而も最初の二十一箇条は段々緩和して十三箇条に減じていた。有名なエドワードグレーの書いた「回想二十五年」にはこの二十一箇条の問題に言及して「然らば西欧の如何なる国が仮に日本と同じ立場に在つたとして日本以上にいや日本と同じ程度にさえ自重することが出来たであらうか」と言っている。それが分らん筈はないのに「旅大を還せ」「山東から無条件撤退せよ」と言う支那の言い分にも無理がある。日清、日露、日独戦争とは全然本質が違ふ非理無道な西洋帝国主義により易々と奪われた香港や広州や沿海州や外蒙古や西藏を何故問題にしないのか。やはり西洋人より日本人を与し易しと見てのことではないか。日本人としてもその華人の態度に嫌らないのである。然し又二十一箇条を突きつけられた彼等の気持にもなつて見なければならぬ。彼等が「二十一箇条の要求は帝国主義国家が弱小国家を滅すの行為、或は戦勝国が戦敗国に臨むの態度」と云つて憤慨するのも一理がある。それに日本としては日英同盟の誼に鑑み、かかる重大な要求は予め同盟国たる英国の了解を得べきであつたが、グレーの一言に安心したとはいへ、之をしなかつたため、英米は大戦中は之を不問に付しておき、戦後直ちに此の条約に大反対を唱え出した。日本は国際的に非常に大きな損をした。十九世紀から二十世紀にかけての頃、世界の帝国主義時代に、列強の一に躍進した日本の政策に帝国主義的分子が存在

したといふことは已むを得ぬことである。日本を啓導してここに至らしめたのは欧米先進国であり、又中国にもその責はある。この間に於ける日本の歴史は世界歴史の一環であり、決して日本だけの歴史ではない。日支兩國が相剋の立場に立ったのは不幸な歴史的運命であつた。

歐洲戦争が終ると共に急に世界の情勢がvari東亜の情勢も変つた。阿片戦争から日清戦争までの間は中国に於て英国の勢力が最も強く次が仏国であつたが、日清役後は露や独の勢力が急に割り込み米国は後れて入つて来た。日露戦後は日本の勢力が大いに重くなり、歐洲戦後に及んでは独の勢力は全滅し、露も仏も半ばを失つてしまい、残るところは日本と英米になつた。その日本は大戦で欧米が東亜から手を引いている時を狙つて独り勢力を拡大したと云うので、中国ならびに欧米から非道く憎まれた。そうして日本ひとり「憎まれ子」にして、欧米諸国は競うて自分だけが「好い子」にならうとして事毎に中国の意を迎えるようになった。これは北変清事に当り八国が連合して中国に臨んだ時、お互い利害を異にしながらも協調を崩さなかつたのとは大變な相違である。それに辛亥革命後から中国も近代国家化の傾向に進み、そこへ国際平和民族自決等の戦後の思想が影響して、中国人も民族主義に目覚め、帝国主義反対平等条約廢棄など声を大にして叫ぶようになり、その目標が一に日本に向けられた。英や露は中国に対し日本より遙かに帝国主義であつたが巧みに中国人の反感を反らし、日本ばかりそれを引受けさせられたのである。同時に支那に於ては何でも米国が指導的發言權を

用うる地位に立ち、爾來中国人は総て米国の同情に訴え、援助を求めて徹底的に日本を追窮しようとした。日清戦後は露国に依存したが、歐洲戦後は米国に依存した。依夷制夷はどこまでもその伝統的手段であった。パリ講和会議で一旦は認められた日本の滿洲山東に於ける權益も、大正十一年米国の主催するワシントン會議の席上でその大部分を放棄せしめられ、剩へ日英同盟は米国の意志に従つて廢棄せしめられた。かくて米英連合の東亞政策は日本の勢力が支那に加わることを拒否し、既に加わつた勢力は段々排除して英米の權益を扶植し支那の民心を収攬しようとするに在つた。日本は日清戦役前の状態に戻つて東亞に孤立した。ワシントン會議以後の屢次の國際會議は名は平和とか軍縮とか言いながら、実は日本を被告として査問に附する為の法廷に外ならなかつた。その都度米國を笠に着た中國側は威丈高になつて日本側に迫るのであつた。日本は事毎にその出鼻を挫かれ米英の前に叩頭するばかりであつた。歐洲戦争に當り日本が日英同盟の情誼に殉じ連合國に尽した功勞は殆んど顧みられずして、同盟國だつた英國は頓に日本に冷淡になつた。而も戦後の風潮をなした國際協調や平和主義は、帝國主義を否定し軍國主義を呪咀するものであり、独逸と日本は謂れなく世界の悪者の如く見做された。この時勢の変化には抗することが出来ず、明治以來上下一致營々として国力を養ひ、やつと世界の列強に追いつき、東洋の盟主になつたと自負した日本は、早くもその地位を脅かされ苦しい立場に立たされた。つまり國際環境が日本に不利に發展しただけ中國には有利であつた。

支那問題の最高權威だった内藤湖南は大正の末「新支那論」を著して言う「米國という國はパリの講和會議でも既にその態度を示した如く、國際關係を歴史の上に打ち立てないで従來の關係をすべて帳消しにする遣り方をとる國である。それで自國さえよければ外のあらゆる關係は皆無視してしまつて自國が現在一番勢力のある位置に立っている事實を中心とした關係を對支問題の上に成立させようとしている。英國でも昔の支那に對する位置は今危殆に瀕しているから國際關係の歴史を重んずる國であつてもその實際は米國に類似した態度をとらんとしている」と。米英がそういう風だから中國は益々過去の歴史的事實をも無視し日本の立場といふのは曾て考へてみたこともないやうに日本の滿洲に於ける特殊關係など帳消しにするやうな遣り方をするのであつた。

### 國民政府時代

國民政府の時代になると公然排日教育を採用した。排日記事はあらゆる種類の教科書に盛り込まれ、日本を憎悪し敵視する觀念を強烈に執拗に生徒の頭に植付け、小学、中学から大學に至るまで之を推し及ぼした。一般民衆に対しては新聞、雜誌、映画、芝居等を通じて排日を宣伝した。かくて日支間に何か問題が起ると忽ち排日運動、日貨排斥が始まり、無分別なる學生がその中心となり、名を愛國に借りて商人を圧迫し労働者を煽て罷課、罷市、罷工、ボイコット、デモンストレーション等に騒ぎ廻るのである。中國に「上の好むところ下これより甚し」と言う語がある。政府が既に「革命外交」を標榜してい

て、これを取締る誠意が無いばかりか、却つてこれを国民運動かの如く称して煽動し利用する。これは文明国家には見られぬ現象で決して中国の名誉ではなかつた。——翻つて敗戦後の今の日本にこれと同じ現象が見られるようになった。すなわち共産国に煽てられた政党、労組、全学連などが反米運動をやっているのが是である。米国はそんなものに目もくれないが当時の日本はこの強暴な排日運動に気合負けしてしまい、世界の大勢が変つたのだ、仕方がない何も彼も時勢である、ただ日本の最少限度の權益だけは護りたいという敗北的気分が漲るに至つた。昭和二年田中内閣が成立するや東方会議を開いて革命外交を呼号する中国に対し、東亜の和平を乱す如何なる勢力に対しても適宜の処置を講ずべしとの宣言をし、その前に発生した南京、漢口事件に鑑みて居留民現地保護の建前を取り山東に出兵した。これは対支外交の退嬰不振を挽回せんとするもので、つまり支那に対しては余り弱く出るばかりでは相手を増長させるばかりで南京事件のような事が起る、一つ強く出る必要があるという訳であつた。然るに当時は欧州戦後から世論の軟化している時で、その上政党が外交を政争の具にし、結局この政策は有耶無耶に終つたのみならず、田中上奏文などという根拠なき流説が日支の間に行われ、今日でも田中内閣が故意に兵を動かして中国の統一に反対し侵略政策を採つたように言う者があるが思わざるも甚しい。この後外交は益々萎靡し果ては支那の反感を買うような条約は自ら取消せなどと云う言論が現われ、満洲放棄論まで飛び出すようになった。やがて朝鮮人が日本の俯甲斐なさを知つて見縊り、日本人



は朝鮮にも大きな顔をして居られなくなった。日本は満洲に鉄道二本残して引揚げるかどうかの瀬戸際に来た。日本が狭い国土に溢れる人口のはけ口として大陸の足場を確保しようとしたのは已むに已まれぬ生存の欲求であつた。英国や仏国がはるかの極東に帝国主義の貪欲な獲物を持つのは違ふし、米國や露國が自國に支那以上の資源と土地を有しながらただ領土欲や金儲けのためにやって来ているのは違ふ。今やその米英人らが中国人と一緒にたつて日本人を排斥するに至つて、日本人は死物狂いにならざるを得なかつた。当時心ある米人が云つた「アメリカが支那の為に流す涙は空涙である」と。「満洲は我生命線なり」とは日本人の流す血の涙の叫びであつた。そう云えば又「満洲は我生命そのものなり」と中国人は云うかも知れない、それもそうであらう。この深刻なる相剋は一朝一夕のものではない、不幸な運命であつた。遂に満洲事變が起つた。久しく絶望感に沈淪していた國民が一斉に声援を送つた。満洲のことは外交に任せておけない、このままでは日清日露の意義が没却されて了うと云うので血の氣の多い少壯軍人が憤起したのである。事變の最大の原因は日華双方に正常な外交の無かつたことである。当時日支間の懸案は積るだけ積つて一つも解決せず、支那側に解決を図る誠意は毫も無かつた。外交でいけなければ武力でいこう、武力なら勝に決つてゐるので軍人が起つたのである。「軍人が起たなければ満鉄社員が起つ」と言われたくらい現地の情勢は緊迫していたのである。だから後になつて平地に波瀾を起したかのように言うは當らない。当時政黨財閥は全く腐敗し、政權や利

権を争つて国家の大事を顧みず、一方では国際主義だのデモクラシーだのマルクス主義だの世を挙げて平和の幻想に耽り、軍備を呪い軍人を嘲り、且つこれを敵視しつつあった。満洲事変はこの内外二つの情勢に迫られて起つた反動である。満洲事変が思いの外有利に運ぶと段々軍部の独善が始つた。外交機関は軍部の命のままに動き、内閣はいわゆる戦時内閣で、政治も外交も総て軍の作戦上の必要に基いて行われるに過ぎなくなつた。それが戦争中から終戦まで続き、戦後その反動が来て満洲事変前の状態に逆戻りしつつある。我国の学界に於て満洲史学開拓の功労者たる稲葉君山博士は其の著「満洲発達史」に序して「我国朝野の対満洲意見は幾變遷し、大正中年よりはほとんど冷却し去り放棄論さえも抬頭した。日本は全面的に支那と交渉を有し之が情勢を有利ならしめんには東北一隅を犠牲にしても敢て惜まざるといつた見解であり、奉天政権のなすがままに跳梁跋扈せしめたのである。若しも一昨年九月の満洲事変なかりせば、事態はいかに逆転したかは測られない。予は痛心し焦慮し、機に觸れて私見をも公開し、本書を以て識者に問わんとした。」今日博士を九原の下おこに作しても決して此の説を変えないであらう。見識なく節操なき今の学者とは違ふのである。私はここで再び内藤湖南の「新支那論」中の一節、故ふるくて而も新しいその説を引用せずには居れないのである。曰く「日本の支那に対する侵略主義とか軍国主義とかいうようなことの議論は全く問題にならない。尤もこの侵略主義とか軍国主義とかいうようなことは単にその問題から考えても日本と支那との間の関係を論ずる者としては甚だ不適当

なものである。日本の近来の国論が本心を失しているということは屢々言うことであるが、……日露戦争に依つて満洲に兵力を用いた結果、日本の経済力がその地方に加つたが為に大連の港を支那第二の貿易港にまで進め満洲の富を増したことは非常なもので、一時の兵力の關係を見てそれに伴つて来る経済上のより大なる關係を注意しないというのは故意に日本の進歩を妨げる米国人の議論ならば兎も角、日本人としてそんな誤つた見方をする輩は実には気が知れないのである。今の日本の国論は、自国の歴史とその将来の進むべき道を忘れて、一時応急の手段に用いられた武力を侵略主義とか軍国主義とか言つて、自らこれを貶しているものである」と。今日我国内で歴史を考えずに日本の侵略だの軍国主義だの軽々しく騒ぎ立てている輩に対し、内藤博士のこの説を適用しても当てはまるようだ。同じことを繰り返す、歴史にくらい日本人である。満洲事変以前の日支の情態についても内藤湖南は「支那の排日問題はどうしても一度は破裂すべき余儀なき径路に向つてゐる。……日本は隱忍の上にも隱忍して、結局破裂しなければならぬような道程をとつてゐる。利害關係を最も痛切に感ずる日本が支那との間に何時までも無事に進んで行こうと云ふことは人間の智慧では考えられないことである」と断乎たる結論を下している。その後の事實は湖南の先見の明のあつたことを証明している。中国人が何もしないのに日本人が踏んだり蹴つたりしたのはない、中国の排日抗日が如何に強暴を極めたか、それでも日本は隱忍に隱忍した時のあることを忘れてはならない。

私は満洲事変に就て中国人の書いたものは出来るだけ渉獵したが、いずれも千篇一律で取立てて言うほどのものもないが、欧米人の論評には往々面白いものを発見した。就中汎歐洲運動の創業者として有名なオースタリーの政治評論家クレーデンホーフカレルギの論評は我々の言いたいことを言い尽している。全文長くて引けないからその中の一、二節だけ引くに止める。「米国にとって中央アメリカは何を意味するか、英国にとって埃及が何を意味するか。それは日本に対して満洲が何を意味するかを答うるものである。日本の占領以前の満洲は支那の一边境に過ぎなかった。而も一度は露国に占領され、若し日本が奉天会戦に敗れていたら今日露の一州と化していたに相違ない。満洲は日本と支那とを結合する楔となるか永久に離反させる原因となるか、そのいずれかである。支那は満洲を放棄できないだろう、日本も戦勝と労力によって獲たものを放棄することは出来ない。双方の正当な要求を如何に融和するか、今や日本は兵力に訴え支那は国際連盟に訴えた。連盟は米国の援助の下に日本を圧迫し退却を強制したが完全に失敗した、連盟はその奉天会戦に敗れたのである」と言い「双方の正当な要求」とは第三者の公平な言というべきである。最後に「支那を争う政治的勢力はソ連と日本の二国である。支那は早晚この二強国のいずれかに結ばれなければならない。歐洲の利益は支那の選ぶ国がソ連でなく日本であることを欲する。日本が共産主義の脅威を感じていることは歐洲と異なる所がない。日本はソ連の亜細亞侵略を阻止する唯一の強国である」と。米国にこの先見の明がなかったことが、亜細亞今日の禍を

なしている。

滿洲事変の後日本は完全に戈を収むべきであった。それが事変とも戦争とも訳のわからぬ時局が続いて遂に今日の破局を招来した。日本の政府も軍部も初めから中国と全面戦争を遂行し中国本土を侵略するという計画などなかった。それは政府の度々の声明に強調された通りである。中国人はまだそれを信じないか知らないが事実そうであった。それがずると泥沼に踏み込むように無限に戦事が拡大されて行き、いつまでも打切らずして日米戦争にまで進展した。曾て「川上は日清戦争の為に生れ児玉は日露戦争の為に生れた軍人」だといふことが言われた。それに加えて陸奥は日清の為に小村は日露の為に生れた外交家だといふことが言えよう。然るに不幸大東亜戦争には軍人も外交家も無かった、そうして訳の分らぬ大戦争をやってしまった。

米英に虐げられ中国から排日抗日を喰い、世界に東亞に孤立した日本が、その孤独感から来る不安と焦慮に堪えなかった時、独伊が勃興して米英に頡頏し、世界の情勢が又一変して日本に有利に展開するかに見え、漸く救われた感じがして、独伊の方に靡いて行ったことは無理ではない。当時としては三国同盟もその方向として誤りであったとは言えない。ただ三国間に緊密な協同策戦もないままに大戦に突入してしまったことは千秋の不覚であった。この事はここに細論する暇がない。

思うに日清戦争で日本が獲た成果を横から奪ったものは露西亜である。それは十年後の日露戦争で償われた。

日露日独の戦争で日本が獲た成果と、引続いて築きあげた成果を尽く一掃したものは米国である。然るに米国の収めた成果は米国に帰せずして今や中ソに帰している。強敵日本を倒してもらって喜んでゐるのは中ソである。気が付いた米国はあわてて日本の再強化を図ったが、余りに毒薬が利いていて日本の弱体は容易に直りそうにない。そればかりではない、数十年來一貫して中国を援助し続けた米国は恩に報ゆるに仇を以てせられた。今中共治下の大陸には反米の風潮が横溢し、往年の排日をはるかに凌ぐ勢である。それは近代国家には想像もされぬ野蛮なものである。反米は向ソ一辺倒の半面であり、且色々な内部政策に利用されている。

満洲事変後蔣總統が発表した「敵か友か」の文中に次の語がある。「中国の戦敗は日本の福にあらず、日本の戦敗も亦中国の福に非ず」「中日戦争若し発生すれば露西亜はまさに禍をアジヤになさん」と、不幸にもこの二つの予言は適中した。先に日米戦うべからざるを説いた孫文の予言と共に今日我等をして大いに考えさせるものだ。總統は更に云う「一般理解ある中国人は日本人の終局に於て我が敵人でなく、我が中国も窮極は日本と手を携うるの必要あることを知る。之は世界の大大勢と中日兩國の過去現在と将来に就て徹底的打算した結論である。思うに日本人士中同様の見解を抱く者も少くあるまい。然るに今に至り危局を打開できず苟且遷延するは勇氣と真誠の欠乏による」と。總統にこの正論がありながら兩國が破局に進んだのは何故か、總統自身にも勇氣と真誠に欠くる所があったのであろうか。「總統は虎に騎のって居り、虎から降りれば噛み殺される」

と当時中国の識者が評した。日支の紛争は由来する所遠く、当時騎虎の勢いは既に總統と雖も如何ともなし得なかつたのである。騎虎の勢とは何か——民国二十四年七月モスコウに開かれた第七回コミンテルン大会以来中国共産党は内戦停止、反帝国主義を標榜し、抗日民族統一戦線の結成を全国に呼びかけた。この尤もらしい口号は容易に民衆を動かすことが出来る。之に同調せぬ国民政府を売国と罵り、二十四年發表した「抗日救国の為全国同胞に告ぐる書」の所謂八・一宣言は純然たる対日宣戦布告であつた。責任ある国民政府は未だ日本と戦ふ準備がなく、先ず国内を安定して準備成れば日本と一戦を辞せざるものだと説明しても、多年に渉る民族意識の鼓吹と排日教育が実を結んで民衆を納得させることができず、それに西安事変と云うまづいことが起つて、共匪の煽動を受けた一世の狂潮は蔣介石の国民政府を揺り動かして盲目的に抗日戦に突入させてしまつたのである。当時国府の行政院長で外交部長だつた汪兆銘も蔣氏と同じ考えで彼は「一面抵抗一面交渉」と云うことを言い出し、如何なる場合にも交渉による和解を計ることを忘れなかつた。淞滬停戦協定や塘沽停戦協定はこれのために出来たので、満洲上海事件後の両国間にも和解の兆候が萌し、蔣氏と汪氏の政策は一致していたが、二十五年西安事件後形勢は一変した。汪氏の言「我当初以為蔣介石先生与我是同心的、所以誠心誠意与蔣合作、二十五年我遠適異國、直至西安事變發生、方纔趕了回来、則情形更加大變了、我当时只能牢々認定剿共事業決不可中止、因為共產党受了第三國際的秘密命令、將階級的斗争的招牌收起、將抗日的招牌掛起、利

用中国幾年来的民族意識、挑動中日戰爭……自從蘆溝橋事變以後、我對於中日戰爭、固然無法阻止、然對於共產黨的陰謀、也沒有一刻不想著抵制他、揭破他、直至最後最後、方纔於十二月十八日離開重慶、二十九日發表「和平建議」これは汪氏が外国に行つていた間に西安事件が起り、蔣氏が剿共を止め抗日戦に踏切つたのを見て遂に重慶と手を切つた理由を述べたものである。今日汪氏は漢奸と云われるか知れぬが、蔣汪両氏の政策が徹底し成功していたら、今日の中共なるものは勿論なかつた筈である。又民国二十三年蔣氏が廬山の軍官学校で行つた秘密演説で「外侮の抵禦と民族の復興」と題し抗日戦の秘策を縦横に説いているものがあるが、蔣氏としては和戦兩様つまり一面抵抗一面交渉の策がついに抗戦の道を選ばざるを得ざるに至つたのである。これはつくづく蔣氏の本意ではなかつたらう。前に日本軍、後に共產軍、腹背に敵を受けたのは蔣氏だからである。昭和十一年民国二十五年の夏、日本に來た駐日大使館參事官に王芃生という人があつた。私と懇意になり度々詩酒の宴を共にした。彼の書いた詩が今猶私の所に沢山あるが、彼は王曰叟と署名しているからその訳を問うと、孟子の開卷第一行にある語「王曰叟不遠千里而來」云々の語を挙げて、今や日支の間が危いので大いに日本の朝野に説く為に千里を遠しとせずして來たからだと言う。国府要路では蔣汪を始めとして日支の危局を取扱したい、ここで日支が戦えばロシヤ共產政府とその傀儡中国共産党を利するばかりだと考えていたので、蔣氏はその懐刀たる王芃生を日本に寄こしたのであつた。然るに半歳もたたぬ中に西安事件が起つて王氏は急遽



帰国し我が朝野に説く暇がなかった。又事件後蔣氏もその方針を抗日に一変せねばならなくなった。西安事件こそは日本と中国の運命に取つて最悪最凶の出来事であった。王芃生は終戦後南京で死んだ惜しい人であった。蔣總統は又云う「日本に兩種の誤解あり。その一は国民党を以て排日勢力の中心となすこと。その二は中国国民党を打倒せざれば中日問題は解決せずとなすこと。中国にあって中日兩國の唇齒相依るの道理を講明するもの国民党總理孫中山先生を以て最徹底となす——中国国民革命發展の時期こそ兩國過去不快の關係を清算し国交を更新するの好機會、民国十六年以後の国民党は明白に容共政策を放棄した。吾等は国民党の歴史とその人物を見てその間に何等の排日成分の存在を見出さない。中日感情の悪化に伴い国民党員と一般国民は対日怨望の心理を免れなかつたが、孫中山先生以来、日本公私各方と友誼交往し中日の平等提携を理解し兩國の兩敗を憂えたるもの少なからず」と。私が蔣介石の共匪討伐が今一息で成功したら兩國和解の時機があつたらうと云うのは右の蔣氏の言と一致する所である。当時の蔣氏の立場と背後の共産党のことを日本軍部が洞看していたら決して蔣氏と国府のみを目の敵として戦争するの愚はなさなかつたであらう。これが蔣氏の云う日本の誤解であつた。誤解ほど恐ろしいものはないが、この誤解を除くために蔣氏の努力も日本に対し充分に徹底しなかつた恨がある。蘆溝橋事件はなお今後の究明に待つものが多いが、当時共産系学生らに行われた逆九

- 一八の語が示すように、総ては共産党の手に操られたものようだ。日支が戦わねば共産党の活きる道がな

い、どこまでも蔣介石をして日本と戦わせるよう、日本と戦ふ為には共産党と合作する外ないという方向に国民党を誘い込んでしまった。日支戦争の元凶は中共であることを忘れてはならぬ。

蔣氏の云う孫中山の説とは、民国六年中山が著わした「中国存亡問題」中に云う「中国今日友邦を求めんと欲すれば米日以外に求むべからず。日本なければ即ち中国なし。中国なければ亦日本なし。両国のため百年の安きを謀ればその間に稍も芥蒂を設くべからず。之に次ぐを米国となす。米国の地我と距り我を侵さず我を友とす。況や兩國皆民国。義最も相扶くべし。中国必ず当に資を米国と日本に借り、人材、資本、材料に論なく皆当之を此の両友邦に求むべし。中国の日本に於ける、種族を以て論ずれば弟兄の国たり。米国に於ける、政治を以て論ずれば師弟の国たり。故に中国は日米を調和するの地位あり義務あり。此の三国の協力を以て世界永久の平和を謀らば特り中国の福のみならざるなり。」云々とあるを指すのである。孫文が死去の数ヶ月前病軀を押して日本に來り大亜細亞主義を講演したその観点もここにある。李鴻章や袁世凱は皆日本に悪かった、孫文ほど日本に理解の深い中国人は無かつたろう。蔣氏は孫文唯一の後継者としてその遺志を実行せねばならなかつた。又実行する気があつたにも拘らず、それが正反對の結果すなわち今日の破局を成している。一体何の因果というものか、蔣氏の言に「過去の中日関係には、中国側に十分の四の責任あれば日本側に最少十分の六の責任あることを知るべし」云々とある。我々は日支事変以前に蔣氏の文を読まず今日に至って之を読

むを悲しむ。過去の中日関係には、中国に十分の四、日本に十分の六の責ありとは總統として甚だ公明正大な言である。之を日本の政治家が、戦前戦後の支離滅裂の言動、何等の見識なく信念なく責任感もなきに比し感概に堪えない。

### 現在の日中関係

「旧悪を念わず、恨に報ゆるに徳を以てせよ。従前日本の錯誤的優越感に応うるに奴辱を以てせば冤々相報じ永く終止なし。これ我が仁義の師の目的に非ず」云々と布告したことは吾々の記憶に新しい所である。之を同じ終戦の時自ら条約を破るの不法を敢てし、僅か六日の参戦をしただけで「日露戦争の仇を討った」と放言したスターリンの太々しい態度と比較してみるがよい。後又總統は言うた「中国は日本に対し何等過分の要求なし、唯盟邦が我が交戦八年の特殊地位を認むるを求むるのみ」と。

台湾に退いた後の總統は又言う、「自由中国と民主日本と合作して始めてよく東亜を安定し世界の和平の爲に助け合い得るであろう、日本国民がソ連中共の陰謀に対し警醒する所あらんことを希望する。中国大陸が一日ソ連の制圧下になれば日本国家は一日の安全を得ず、自由中国の反共抗ソの艱苦は東亜民族の禍福に関係あり、日本が東亜の和平に責任を分担せんことを望む」と、日本米國を友邦とした孫文の志は未だ行われず、蔣氏亦事志と違い、却って二人が一時の方便とした連露容共が遂に今日の破局の因をなした。地下の孫文の靈も以て瞑することができないであろう。ソ連の傀儡中共は中ソ友好同盟条約に日本及米國を仮想

敵国としている。私は孫文の遺志「友邦を求めんと欲せば日本と米国に求めよ」の一言を直ちに今日の日本の上に移して、日本の友邦は中国と米国の外にないことを強調したい。表面上我國策はこの線に沿っているには相違ないが、実はそれが甚だ不徹底で、当局者に確固たる信念が無いために之を國論として盛り上げる事が出来ない。その虚に乗じて左翼の宣伝が横行し無知な民衆の心を中ソに引きつけている。政府はこの左翼の宣伝に惑わされた民意に氣兼ねして、堂々と掲ぐべき國策をも掲げ得ず、自由主義陣營だと言ひながら、中共の鼻息を窺ひ、貿易の小惠に浴したいような風をする。その為益々中共を増長させ、彼は今や傲慢無礼な内政干渉までして来るやうになった。是れ國府が「如即如離盟邦日本」即くが如く離るるが如き盟邦日本と、その頼りなさに不信を表明している所以である。若しそれジャーナリズム・マスコミに至っては殆んど中ソの代弁であり。宣伝機関である。國民もウカウカとその宣伝に乗り勝ちである。蔣總統は中国の正統政府を率い台湾に抛つて中共と戦争を継続している。台湾は未だ嘗て中共の領有になつたことはない。台湾の存在は中華民國の存在である。所謂二つの中国は南鮮と北鮮、西独と東独の如く未だ存亡の決を見ないのである。日本は中華民國と戦い敗れて之と和を講じたのである。米国は盟邦中国を捨てないのみか、共產主義の大陸支配は永続せず、何時かは過去のものとなるとの信念を持している。曾て四十年も日本を抑え中国を援けて来た米国である、共產主義の続く限り百年でも中共を承認しないであらう。英国は曾て米国を差し置いて満洲国と

通商したが、今度も逸早く中共を承認した。これは極東に一切の政治勢力を失った英国として、ただ経済の利しか考えないですむからである。中ソの同志的結合は堅く、両者の間にひびの入ることは当分なさそうである。日本は米国と一体關係を以て之に対処するの外はない。

往年の日本は露清同盟に対するに日英同盟があった。今日中ソ同盟に対するに日米安全保障条約がある。日中關係の過去を顧み、露清同盟、日英同盟、三国同盟、中ソ同盟の歴史に鑑みた眼を以て現今の日米安全保障条約を觀れば我々はこれを如何に解釈すべきであろうか。日共や社会党はこの条約の廢棄を叫び反米闘争を宣傳して居る。曲学阿世の学者や売名的文化人等が之に雷同し、思慮なき学生や労働者がその煽てに乗って騒ぎ廻っている。日本に安保条約なく米国の援助なく無防備の儘で孤立していたら夙に共產圏内に隸屬せしめられ、ポーランド、ハンガリーの運命に陥っていたであろう。その時の日本の状態を想像すれば慄然として肌粟を生じるばかりである。条約に不備不利の点があれば漸を追うて改訂すればよい。現に米国は之に應ずるに吝かならぬ態度を示している。然るに日本人のこの条約に対する態度は末梢の問題を捉えてそれに力を入れたり、戦争の起った時何とか逃げられるようという虫のいいことばかり考えて、如何にこの条約が必要であるか、如何に条約の信義を守るべきかの根本問題に触れ、国民一致して之と取り組もうという真劍な態度がない。この条約は中ソの同盟が出来たのに刺戟されて成ったものである。然るに中ソは自分のことは棚に上げて

此の条約を目の敵にし日共や社会党を煽てて之に反対させ、日米の離間に一生懸命である。世界赤化は共産主義国の最終目標である。中共はソ連が周辺に東欧の衛星国を持っているように、自国周辺の東南亜細亜や日本を赤化して衛星国にしたいとの野心を抱いている。それで表面は平和とか友好とかを口にし、或は利を以て誘い、或は力を以て嚇し一々その反応を注視している。それにみすみす引かかっているのが左翼政党や進歩的文化人と称する輩である。今日中韓両国の目に自由主義国を標榜しながら容共親ソを事とする日本の態度が如何に映じているか。自由中国の言論を通観するに、その言う所は—日本人は今日中共が日本に対し力を以て嚇し利を以て誘い、虎視眈々、機を見て動かんとする陰謀を知らず、中立の一路あるが如く錯覚し、好餌に釣られつつあるは「鳩を呑んで渴を止めんとする」の愚に等しい。共産勢力の東亜に於ける拡大は国際共産主義の世界的政策の一環で、これは中、日、韓、比（ヒリップピン）越（ベトナム）暹（シャム）等各国の単独行動で防げるものでなく、太平洋国家の集団安全の措置が必要である、というに在る。韓国の立場も日本が容共で北鮮が共産では腹背に敵を受けることになり、日本の動向に警戒を怠らない。日本人は二つの中国とか二つの朝鮮とかいうが、実は日本も二つの日本に分裂していることを思わねばならぬ。昔、日露戦争の前に朝鮮人は親日と親露の二派に分れて争っていた。韓廷の密使は度々日本に來た。玄奘運は近衛公に會うて「日露戦が起つた場合朝鮮は中立するから日本軍は朝鮮を通らず朝鮮を戦場にしないで欲しい」と頼んだものである。近衛

公は諄々として中立の不可能を説く所あったが、いつも駐日ロシヤ公使が嗅ぎつけては邪魔をした。当時朝鮮を説得することに如何に日本が骨折ったか、それは丁度今日米國が何とか日本を自由主義國側に留めておきたいと色々苦心しているのと似ている。今や日本人は当時の朝鮮人のように国内は二派に分裂して争っている。

中国国民党の長老で日本通を以て知られ、孫文の秘書として日本にも来た戴天仇が民国二十年頃に書いたものに「日清戦争以後、殊に日露戦争以後、民國の初めに至るまで東京の吸引力は絶大であつた。全中国の青年は日本に学ぶため陸続東京に走つた。最も盛んな時には同時に東京に三万人を超えた。歐洲戦後露國革命が成功するや、中国青年はマルクス・レーニン主義に走つた。露國の野蛮と専制を輕蔑した心は一変して革命の成功を謳歌した。民族的自信力を失つた中国青年こそ真に憐むべく、日本とロシヤの二つの中国民族圧迫勢力が何れも一種の吸引力となり、この吸引力に吸収されたものは皆惡魔に魅せられた狂人の如くなつた。今この二大圧力はその神通力を挙げて吸引しつつある。人刀俎となれば、吾魚肉となる、中国國民は自己將來の運命に對し如何なる準備をなしつつあるか。最近七十年の東洋史の前半は日本の露西亞に對する臥薪嘗胆の歴史であり、後半は日露兩國の争覇史であつた。歐洲戦後再び兩國の新しい争覇時代に入り、東京に向わざればモスクワに向わんとする、意氣地のない中国人の心理」云々と言っている。私は時勢の一変した今日の日本が往時の中国の如くになつたことを感じる。即ち民族的自信力を失つた日本人は今やロシヤと中国（共）即ちモスクワ

と北京の吸引力に吸収され、悪魔に魅せられた狂人の如くなっている。しかもこの二大圧力はその神通力を挙げて吸引しつつある。私は三十年前の戴氏の悲痛な叫びが今日の吾々の叫びとなりつつあることを悲しむ。最も肝要なことは国民がこの中ソの悪魔的吸引力をはね返すことである。然るに進んでこの吸引に引かれ、祖国を中ソに売りその独裁下の一衛星国になり下らんとする社会党日共其他容共団体の驚くべき売国行為を、国民の大部分が余りにも無関心に見過している。

去年社会党の浅沼以下中共を訪問した使節団は周首相の言う「岸内閣は中国を敵視する」に迎合して自国政府の政策を攻撃するという国辱を敢てし日本人の面汚しであった。一体敵視しているのはどちらか、中ソ条約を結んで公然と日本を敵視したのは誰だと何故分り切ったことが言えないか。社党のみならず保守党まで之が言えない卑怯さには呆れる。我國の二大政党は内政ならとも角外交に於て正反対の方針を持し対外的に日本を二分し、非常な国家の弱点をなし損失を招いている。欧米の政党が事外交に関する限り超党派的に一致するのとは大変な相違である。この弊は明治一代に見られず、我が国の政治が乱れかけた大正時代の二十一箇条の時からのようである。昭和の初、外交の長老石井菊次郎の著した「外交余録」にその時の事を「我提案中に外国人が八釜やかましく攻撃せる程に帝国主義とか軍閥的とか批評すべきものは何所にあるか。日本として此の平和の保障を手離すが如き無責任なることは夢想だに出来ざる所で、實在の状態に應ずるため租借期限の延長を事実より



紙面に写し換えたのに何の不思議があるか。外国の批評家は是非もないが、特に残念と謂わざるを得ないのは、我国の政客の態度であつた。政府反対の論者が此の重要外交問題に対し之を痛撃したるは内政問題と渉外事項とを識別せざる非愛国的行動と謂わざるを得ない。将来慎むべきは外交問題と内政問題との混合である」云々と云っている。田中内閣の時もひどかつたし、爾来これが相手國の乗ずる所となつて國家の不利を招いたことが度々であるが、最近の社会党の如く共產國の宣伝、陰謀に迎合して自國を誹謗するのみならず、赤化の手びきをするような売國的行動は未だ曾て無かつた。吉田元首相はその「回想十年」の冒頭に、外交的感覚即ち國際的な勘のない國民は必ず凋落するということを説いている。現在我が國民の間には余りにも敗北感が強く、國の運命を思わない。それには左傾したジャーナリズムの影響が最も大きいと思われる。我國のジャーナリズムは今や殆んど挙つて左翼偏向の記事を載せている。戦時中軍部に迎合した右傾記事と雖もこれ程非道くはなかつたようだ。一部の學者文化人がこれに便乗して勝手なことを言い散らしている。戦後新聞雜誌の自由が十分に保証されて却つて自由が冒瀆され濫用され、新聞は左翼に有利な報道と宣伝にこれ勤めているとしか思えない。最近台湾の「中華文化論集」の中に「戦後日本の新聞自由」と云う長文が載っているが、完膚なきまでに我國新聞の左傾ぶりを摘発している。試みにその中の一節を訳してみると「民國四十五年（昭和三十一年）四月立法院長蔣氏統率の下に日本を訪問した我國代表團は各界領袖を包括し戦後最大且最

重要な訪日団体で、在日十日間に天皇との謁見を始め政治要路を歴訪したが、日本の新聞は代表団の活動消息について一字も書かず、ただ四月十六日代表団到着のことを小さく載せただけで、それも六十字を超えたものは無かった。中立の毎日新聞でも四行のみ。朝日は一字も載せなかったが、その晩代表団が鳩山首相を訪問したことを僅かに六行に書いただけである。これに反し、共産国家の消息に対しては甚だ熱心で、我代表団到着の翌日四月十七日、日中貿易関係者座談会の記事を毎日三段二十一行に亘って載せている。我代表団と座談会とどちらが重要か贅言を要しないのに、新聞の処理は此の如くである。以て日本新聞界の黒白顛倒ぶりが知れよう」とある。独逸が東西に二分され東独の共産治下から西独へ逃亡する者の続々絶えず、一九四九年以降昨年までの八年間にその数二百万に及びこれを一日当り換算すれば、住民八百人を越える東独の一村が毎日無人化していった計算になると云う。この東独難民の事實は我が国のジャーナリズムも屢々これを伝えているが、ここに怪しむべきは中共治下からの避難民のことが一向に伝えられないと云う一事である。我がジャーナリズムは恐らく知って知らぬ風ふうをしているのであろう。私は今年台湾の雑誌「民主潮」其他で大陸から逃亡して香港と澳門に來た学生百二十六人が連名で発表した「我們的呼聲ワレラノサケビ、給台湾及海外中国同胞的一封信」なるものを読んで、中共を理想国の如く言いふらす文化人やそれに欺かれて見せたかと思つたのである。大陸からの逃亡者は年々絶えないのであるが、殊に鳴放以来反右派運動があつてから、青年学生の集团的

逃亡が頻発するようになり、前記百二十六人の如きその一部分に過ぎないらしい。東独から西独への如く地理的に逃走し易いのは違い、中国大陸から逃れることはどちらへ向つても困難である。それが今までの所、台湾を筆頭に香港、マカオ、ビルマ、カンボヂヤ、ヴェトナム等へ命がけて逃亡し来つたものが、国府の発表では既に三百九十七万に達したと云うのである。数字のことは遽かに信用し難いものがあるかも知れないが事実の一端は想像されるといふものである。先年朝鮮の戦争で捕虜になつた中共軍の兵士で共產治下の本土に帰ることを願わず、自由を望んで台湾に渡つた者は一万四千人に達した。朝鮮に來た本国民の何百何千分の一なるかを知らぬ、その中からさえ一万以上の反共分子を出した。然れば本土には果して何千万何億の声なき反共分子がいることか。百二十六人の如き亦滄海の一粟である。私はここに前記学生の公開状の中から大事な部分を抄訳してみる。

親愛なる父老兄弟姉妹の皆さん、私達は大陸から逃れて來た許りの学生です。私達は親を尋ねて万里の途を行く孤児の心情を以て此の香港澳門―其処は自由を失つた人々の朝夕憧憬して已まなかつた所―にやつて來た者です。今やあの政治的恐怖は私達の側から遠く離れ去つて家人の懐ろに抱かれた様な気持で居ます。

親愛なる父老兄弟姉妹よ、どうか私達の訴える所を聴いて下さい。今日中国人が一人一人持つて居る苦痛と云うものは皆中共の暴政に由来するものであつて、私達の受けて居る苦難も其の例外ではありません。私達

は何故大陸を逃亡しなければならなかったか、是は私達が幾十回となく繰り返し聞かれた質問であるが、ここに簡単にその回答を致しましょう。

(一) 我々は中国人である以上中共の対ソ媚態政策を忍受する事は出来ない。外交の上では何事もソ連様々でソ連を陣頭に立て、内政面では政府は勿論軍隊にも学校にもそして工場にも鉱山にも凡ゆる部門にソ連からやって来たソ連人専門家なるものが居て一切の施策はこのソ連の専門家の同意を得た後に始めて実施出来る事になって居るのである。そしてそのソ連専門家の下に数十人の中国人が伺候するのである。このソ連人が胸を反らして悠々濶歩する後から中国人が頭を下げ腰をまげて随いて行くのである。フルシチョフが中国に来た時、中共は全国に通令して彼フルシチョフの事を「爺々」(老公様)と称よばしたものである。そしてこれに対して誰も「いやだ」とは言えない。又「爺々」と言うにしてもうっかり低い声で言ふ訳にもゆかない、それは私達の身边には何時何処に特務の者が居るか分らないからである。中共の対ソ媚態政策なるものは、中国の人民には帯革をきつく締め直さなければならぬ程空腹にさして置いて、尚且つ大量の糧食をソ連に輸出した事に最もハッキリと頭われて居るであろう。そして中国に居て大して用事も無くブラブラして居るソ連専門家には驚くべき高額の給料を支払って居るのである。十二万人に上るソ連専門家の平均月収は約四千元人民幣である。四千元と云うと一中国農民の百余年間の収入であり普通職員

で八年余の収入となる。中国の人民は毎月毎月この四億八千万元の血汗を彼等ソ連人に食わして居るのである。中国人たる者どうして貧乏しないで居れよう、どうして幸福な生活など出来よう。彼等ソ連人は何でも仕度い放題で贅沢の限りを尽し、おまけに國務院が彼等の手許に配置する女子通訳員の主要条件は「若くて美貌」と云う事である。「向ソ一辺倒」なるスローガンの下に、ソ連の事は何から彼にまで神話にして終ったが然し事實は何よりも雄弁である。(中略)「最も好き国際的友人」と称されるソ連の中国に対する態度は如何？ ソ連は中共を唆かして朝鮮戦争に参加せしめ幾千万の中国の子弟を砲煙の中に送り、ソ連は之に武器、弾薬を供給して遂に中国人をして徒らに血を流させて更に永遠に返還し切れない戦債を負担したのである。

(二) 我々の身辺には不安極りない恐怖政治が何時でも何処にも網を張って居る。統治者の刃は常に私達の首の上に光って居る、何時、パッサリやられるか分らない、年中戦々兢兢々として居なければならぬ。公安機關の者が沈重な足どりで何時「お前は不穩の言辞があつた反革命分子と認める」と言つてやって来ないとも限らない、鎮反運動とか肅反運動とかの時、幾多の学友が己れの手で或は行方不明となり或は自殺し、中山大学物理系四年生の女子学生は屋上から飛び降り自殺を遂げ、彼女の血痕は幾多の行人の涙を誘つたものである。毛沢東が「全国で九五%の者が好く五%の者が悪い」と言つたからと言うのでそれを基準に

して各学校から学生達を引っ張って行って反革命を自白した時の事である。政府が音頭を取って大宣伝をして大鳴大放を勧め、そして私達の血を沸き返らし事実を事実として語り叫ばしめたのである。そうして置いて今度は例の「反右派運動」を捲き起して幾万の学生を「右派分子」として吊し上げ虐待したのである。我々に何の罪があろう、解放以来数度の大運動中に捕えられる者後を断たず、新らしい監獄がドシドシ増えそれでも今はどの監獄も満員で弱って居る。中共は人民が主人だと称して居るが監獄の中に閉じ込められて居る者も皆人民である。今日は主人、明日は反革命分子……。私達は正直に「人民民主專制」と信じて居たが実際に体験した結果から言えば「共産黨專制」に外ならない。中共は人民の一切の行動を集團化すると言うが、いう所の集團化とは黨員を頭としての集團化である。そしてその集團化の中では、人と人とのお互に相疑い、お互に仇視し合い、お互に相手を売って自分の安全を図り、彼等相互の間には政治的利害以外には一点の人情味も無い様にしてうのである。お前は俺を監視する、俺は彼を監視する、彼は亦お前を監視する……。そして各自は党委員会に学友の思想状況を報告しなければ思想落伍者として吊し上げに遇う。共産黨は此の集團組織を通じて我々の一切の生活に干渉する。

(三) 解放以来九年、人民に自由が無くなったのみでなく困窮の深淵に陥らんとして居る。新聞紙上には日日の人民生活の改善を誇称して居るが、實際上普く行き渡って居るものは貧乏と飢餓であって、人民の一切

の私有財産はすっかり国有になって了い、人民はひたすら中共の鼻息を覗い乍ら生活して居るのである。大部分の人民は月に四兩リヤン（一二五瓦）の配給の肉すら買えない始末である。然し人民の困窮をよそに「新階級」の者は困り様がない。豪華な旅館は連夜満員、烤鴨（家鴨の丸焼）であろうと、真赤な葡萄酒であろうと何でも無いものはない。そして旅館の門口に列をなして彼等の残飯を貰おうと待つて居るのは餓えて都市に流れ込んで来た農民である。（略）

四 行動上の自由は勿論思想上の自由もない。凡ての文学、芸術は中共によって目茶苦茶にされて了い作品は千篇一律である。農村の事であつたら党の指導に依つて豊作になつた話、工場の事であつたら共産黨員が居るからこそ生産が出来ると云う具合に、共産党を讚美したもの以外には作品はあり得ない。「毛沢東の延安文芸座談会に於ける講話」なるものが文学芸術の領域に於ける金科玉条となり、自由な思想など全然有り得ないのである。我々の思想はマルクス・レーニン主義と云う籠の中に入れられて了つて居てそこから自由に飛び出す事は出来ないのである。人々の顔は誰を見てもまるで石の様な表情をして居て、私達は斯んな死の静寂と言つた様な空気にはもうこれ以上堪えられないものである。（略）

これに類似したものに、南方華僑の子弟で「中共の宣伝に誘騙」せられて大陸に入り、後に「魔掌を脱離」して香港、澳門に逃げて来た者たちが、学生代表の名で シンガポール 星 馬 政府に再入国を歎願している「一封公開

信」が香港の雑誌に載っている。前年北京新華社の記者戴焯は中央政府と毛主席に「万言書」を呈した中に「食糧以外、人口の百分の五を占める革命者の消費は人口の百分の八十を占める農民の消費よりずっと多い」「農民は非常に苦しい、老百姓は已に失望悲痛している。旧統治階級は倒れたが新統治階級が又現れた」と言い「人民の血汗で贅沢する特権階級」を「恨骨髓に入る」と痛論したということである。勿論反党反革命として処分されたことであろう。

最近中共は「人民公社」の新制度を全国的に断行しているという。私はその制度の内容を知った時、今まで中共の将来に就て色々懐いていた疑問も一時に消え、中共も愈々墓穴を掘るであろうと、其の将来を卜し得たような気がした。元人の詩に「南渡君臣輕社稷。中原父老望旌旗。」喜んでゐるのは台湾の国府であろう。人民公社のことは今後の問題として注目に値する。

思うに中国の歴史に堯舜の出たこともある。桀紂の出たこともある。而して今は何の世か。昔蒙古が中国を征服した時、漢人の耕地を野原にして蒙古人の牧場にしようとしたことがあった。その後蒙古は百年足らずで亡んだ。今中共は数千年の伝統ある中国の文化や民国以来の制度を一切毀滅して、全人民を酷烈なる新奴隸制度の下に置いた。正に蒙古の再来である。大陸の人民が何時までもこれに忍従するであろうか、忍従にも限度がある。然し中共のような全体主義的警察国家の下では反抗は容易なことではない。我々は長い眼で中国の將



来を見守っていたい。中国は中国人の中国で中共の中国でもなければ決してソ連の中国ではないのである。中共が近時「岸政権は中国を敵視する」と称して社会党日共其他容共団体のみを通じて日本を動かさんとするは、曾て日本が「蔣介石を相手にせず」と声言して自縄自縛に陥ったと同じ愚を演ずるものである。而も大なる武力を背景に日本を屈服せしめんとするは、過去の日本と同じ過誤を犯すものである。日本の強力な一方的手段によつて其の謂う所の東亜の新秩序は遂に出来上りはしなかつた。驕れる中共はここに鑑みる所がないのであろうか。過去約一世紀間に亘る日中関係というものも、要するに一方の強大な力が一方の脅威的な在とならぬよう、お互いあらゆる手段をつくして来たという一言に尽きる。相互の力の関係は相互に深刻なる政治的影響を与えずには措かなかつた。その劇甚を極めた転変の跡、それを歴史的に極く荒筋だけでも正確に読みとることを課題として聊かこの講述を試みてみたのであるが、決して外交史の講義というような専門的な堅苦しいものではない。飽くまでも常識的に談話的に興味あらしめるようにと思つたのであるが、甚だ蕪雑に流れ慚愧に堪えない。

木下講師の講義にひきつづいて会員研究発表にうつった。登壇した四氏はいずれも三十代の少壮学究である。内容は招待講師に比べて劣勢であったかも知れない。しかしながら教職員連盟結成と、合宿準備に忙殺される激務の中にまとめられたものであるだけに、それは文字通り血と汗の結晶であった。完璧の内容は大方の叱正にまつとして、次に発表内容を掲げる。

## 道徳の周困

若松高校教諭 山田輝彦

### 一、現代の性格

増大する全体主義的傾向と個人の自由の問題

発展の究極にコンミニズムを置く進歩史観は、日本の知識階級の心理的、論理的な中核をなしている。しかし、そういう人達が信じているように、歴史は果して進歩しているものであろうか。「進歩」の概念は科学の領域に限っては、まさしく適用され得るとしても、複雑多岐をきわめる人間の生の現象の全領域にそれを拡げることが果して「科学的」であらうか。

ルネサンス以後の歴史は、一途に人間の自我拡張の生命的な欲求に貫かれていた。永い宗教的な繫縛の期間を通じて、鬱屈し、抑圧されていた生命の膨脹力は堰を切つて溢れ始めた。それは先ず政治的な自由の獲得に向うて集中された。数次の流血の革命によって、それは徐々に、しかも確実に達成されて来た。自由主義を基底に持つ西欧的デモクラシーの政治体制はかかる動きの結果として招来された。彼らの生命拡張の欲求はまた生活圏の拡大へ向けられ、新大陸の発見や植民主義となった。そして、そのような外的世界の拡大と併行して、内的世界に於てはヒューマニズムの昂揚による芸術の绚烂たる開花と知的自由に裏づけられた自然科学の異状な発達への萌芽が育てられた。こうして、ヨーロッパ人のダイナミックな生命力が世界を席捲し、西欧即世界という黄金時代が続いた。しかし、近代文明の創造力の中核となった自我の自由は、その無制限の拡大を自律的に制御し得なくなった。こうしてヨーロッパ文明の鬼子としてナチズムとコンミュニズムが生れた。この二つはしばしば反動と進歩というように、相反撥する概念に於て把握されるが、その国家組織は驚く程の近似性を持っている。一党による独裁、苛烈な思想統制、国民生活の末端に至る精緻な組織、尨大な政治犯とラーゲルの存在、これらはまさしく全体主義の特徴である。近代の「悪」を克服する過程として、これを已むを得ない方法として是認し得るであろうか。ナチズムの悪への追究は峻烈を極めていゝ。あの熱狂的な民族主義と



力の崇拜を裏づける冷たい計量と知性はまさしくヨーロッパ的なものである。ナチスの指導者の知能指数が殆んど百三十を超えていたという事実は、近代文明の病根の深さを思わせるに充分だ。これに對して、コンミニズムは、その搾取なるものを取除き、平和をもたらすとの論にくらまされて、その実態は不明確とされた。しかし、ハンガリーの動乱という歴史的事実はボルシェヴィーキの惨忍さと権力政治の暗黒面を露呈した。「自由」の歴史は転機に來ている。増大する国家権力と個人の自由というテーマは二十世紀の最大の課題である。

### 機械による人間疎外

この政治的自由の問題と共に、もう一つの巨大な問題がある。ルネサンスによつて外的束縛から脱出した人間の知性は、自然を支配する法則の探究へ集中された。自然は眠っていた自然の力を掘り起し、人間の技術を代行する機械を作り上げた。そして元來人間の道具であった機械は、逆に人間を支配し始めた。恐るべき「人間疎外」が始まっている。又人間のどんな知性は物質の中に眠っていた巨大な核エネルギーを解放した。そしてこの恐るべきエネルギーは、もっぱら人間殺戮の武器として、きびしい国際緊張の中での異った二つのイギオロゴイ斗争の武器として、全人類の上に重たくのしかかっている。この原子力の持つ巨大な意味を、殆んど大多数の人は如何ともしがたい宿命として受け取っている。人知は今や自ら生み出した怪物の圧倒的威力に支配されている。

### 巨大な組織の発達による人間喪失

更にもう一つ現代史の特長点を附加するならば現代は「非人間化の時代」「人間不在の時代」という点である。大都會を見られよ、そこは無

機的な沙漠の様相を深くしつゝある大衆はテレビや映画や放送のような仮象の中で知識階級は觀念やイデオロギーの呪縛の中で、事実を直視する能力を失いつつある。抽象芸術の存在は、われわれにとって実在についての感覚が歪んだ不安定なものであることを示している。写實的な手法によって描きえた人間や自然の秩序が崩壊しつつある。われわれは巨大な組織—機械や権力や金銭やイデオロギーの齒車に過ぎないという認識、ここから異常な陽気さや性への偏執が生れ、心情の世界は失われてくる。前世紀の終りにニーチェが、来るべき二世紀はニヒリズムの世界だといった予言はまさに適中しつつある。

以上のべた全体主義と原子力の恐怖に加わる思想のメカニズム化は、人々から正常な思考と道徳を奪いつつある。人間性への信頼は失われつつある。現代の精神的状況はこういう精神史の必然の流れの上になつて把握されねばならないのである。

## 二、新教育の真相

敗戦による国家神道と儒教  
道徳に基く価値観の崩壊

以上のごとく現代の病根は近代文明の一つの帰結である。この危機の様相は戦勝国に於ても同様に現れているが、敗戦によるわが国の混乱の度は、ヨーロッパ

ツパが第一次大戦後三十年間に徐々に行つた変貌を、この十年に圧縮した形となつて現れたために更に深いも

のがある。占領軍はいち早く神道についての政府の保護を禁止し（二〇・一二・一五）更に続いて、修身、日本史及び地理の授業を停止するように命じた。（二〇・一二・三一）価値の序列が崩れ、道徳教育はその支柱を失った。敗戦まで国家の教育を支えていた原理は、国家神道と儒教道徳であった。前者は思想原理として国粹主義、民族主義の中核をなし、後者はむしろ行動原理として国民を規制した。

#### 儒教教育の果たした役割

儒教はその発生の当初から「治世の学」であり、処世哲学であったが、特に序列の道徳をその本質としていた。この上下、尊卑、長幼という如き人倫的秩序は、江戸幕府の政策に従って、政治的身分的秩序の強調に利用され、あの三百年の階層制度の維持に最適のイデオロギーとなった。従ってそれは規範と儀礼を重んじ、人間性の自然を悪とする戒律主義の傾向を持っていた、この形骸化した儒教は江戸末期に既に道徳的な支配力を失っていた。近松の心中物に表われる義理と人情の痛ましい葛藤や、武士の内面的な墮落、極端な官能享楽主義邪教の流行等は儒教道徳の無力化を最もよく語っている。しかし明治維新を貫いた基本線は「西洋の術、東洋の学」であって、儒教道徳は近代教育の中でも大きな発言権を持つものとして継承された。そして明治の少数のエリットにとって、儒教倫理はむしろ積極的な力となって蘇つたといえる。この事實は儒教のもつ積極面として正しく評価されねばならない。

しかし大正時代に入ると、儒教の持つ否定面、即ちその本能蔑視の立場や、他律的、徳目的な形式道徳に対

する批判が現われて来た。この批判の立場となつたものは、ドイツ理想主義の哲学であり、特にカント流の倫理学であつた。いわゆる教養派の人々の思想の中核はこの道德の自律性の觀念であつた。しかしその影響は一部の知識階級に限られ、国民の道德感情の基本線をかえ得るだけの力はなかつた。現代行われている民衆の意識の後進性を強調する公式主義の論断は儒教の果した歴史的な意義に全く盲目であるものが多い。国民の道德意識の底にあつた儒教思想は、むしろ自然的、人倫的な秩序の觀念であつた。それを意識的権力的な秩序に利用し、ナチスマがいの国家主義理論をでっち上げたのは少数の戦争指導者の恣意によるものであつた。

戦後教育の特長—国家主義の克服  
に代る合理主義とヒューマニズム

占領政策としての日本の弱体化は民主主義の呼び声と共に始まつた。そのスローガンは戦争末期の重圧感からの解放として受け取られた。占領下の民主主義は秩序形成の原理として働く筈はなく、もっぱら秩序破壊のそれとして作用した。敗戦という異常な心理のもとで、旧き一切は悪であるという誇張の心理が支配した。そして国家主義の克服として二つの原理が迎へられた。一つは合理的主義であり、一つはヒューマニズムである。二十一年三月の第一次アメリカ教育使節団の勧告は、統治者の命令とだけは片づけられぬ善意を認めうるが、対ドイツの勧告とくらべる時、明らかに文化的後進国への指導という意識が濃厚である。

合理主義とヒューマニズムが教育に於ける救いの言葉であつた事には、必然的な理由がある。前者は旧教育

に極端な形で表われていた精神主義、非合理主義への反動であり、後者は禁欲的戒律的な道徳、自己制限の美徳への反撥を地盤としている。事実、合理主義は近代精神の生み出した一つの積極面であるが、古い教育では極端にこれを蔑視した。勘や経験を重視する傾向が支配的であった。これに代って新教育の風土では実験心理学や児童心理学の専門化したあげつらいが横行した。科学に対する極端な崇拜が起った。合理主義の最も重要な概念は「能率」である。しかし能率は教育の世界にあってはあくまで手段でなければならぬ。科学性や計画性が重視される余り、教師と生徒との間の心情の交流や、生徒相互の協同体的共感の世界は寸断されがちである。かくして合理主義は功利主義となり、生徒の個性は平均化される。こういう結果を招来した原因は、合理主義を教育の場に於て正当な位置に据え得なかつた為である。

他の一つの原理ヒューマニズムはどういう定着のし方をしたであろうか。ヒューマニズムの立場は人間の欲望や衝動をそれ自身悪として抹殺することには反対する。むしろそれを肯定し、純化する方向を持つ。従つてそれはなまのエゴイズムの肯定ではない。戦後、祖国は亡国の状態にあることを忘れて、人々は配給された自由を狂喜した。史上未だかつてなかつたような無制限な自由が、敗戦後の日本を掩っていた。そういう風潮の中で、ヒューマニズムという至高の言葉は、低次の人間の欲望の肯定と結びついて、本能主義の謳歌となつた。かくて功利主義と本能主義は日本のの骨肉をむしばんで、道徳的頹廢は極まつた。



### 三、道徳の危機

道徳のアプリオ的規  
範性と自律性の崩壊

ドイツ語の「徳」に当る Tugend には「有用の性質」という意味がある。とすれば、道徳とは人間生活をよりよくする何物かであることに疑いはない。但し十九世紀後半を境として道徳的に異常なずれが出て来る。「しばしば省みれば省みるほど崇敬の念弥ます二つのものがある。外にあっては天に輝く星、内にあっては道徳律」というカントの詩的表現にこもる確信は、道徳が人間にとってア・プリオリのものであり、規範性を持ったものであることを示している。「汝の格率が常に同時に普遍的立法の原理と合致するように行為せよ」という規範性と、「意志の自律はあらゆる道徳的法則及びそれに従う義務の唯一の原理である」という自律性とは、カントの倫理学の二つの支柱であろう。丁度日本で儒教倫理に相当するようなキリスト教的秩序が、その機能を使いつくして、生命を制約する虚偽と感ぜられるようになったのが十九世紀後半であった。

道徳は約束であり人為的後天的なものであるという道徳観の登場

人格や人間性や道徳性は今まで考えられていたような、不変な、不動な物ではないという認識が時を同じうして最も秀れた思想家の心をとらえた。人間は人間の意識している以外の要因によって支配されるのだという認識である。ニーチェは「ツアラ

トウストラ」第一部の最後に「神々は死んだ。いま我々は超人が生きることを欲する」という言葉を書きつけて、キリスト教的な道德の終末と、強烈な自我によるその克服を叫んだ。フロイドは人間の行為は潜在意識によって動かされることを、そしてマルクスは道德とは支配者の搾取の方便であることを教えた。更にドストエフスキーは善の衝動と悪の衝動がほんのわずかの具体的条件の変化で、たちまち所を代えることを教えたのであった。これらはすべて当時にあつては恐るべき思想であつた。道德は今やア・プリオリの規範ではなく、人為的な人間関係のルールであるという認識は二十世紀初頃の人々の心を震撼せしめたと思われる。そして道德についての現代の一般の観念は概ねこの方向をとつてゐる。ことに知識階級に於て「道德」は積極的、肯定的な意味ではなく、常にある冷笑や皮肉の意味を伴つて発言され、急進的な人々にとつて、それは突破すべき壁でさえある。「生命」と「秩序」、「本能」と「倫理」は対立概念として把握される。例えば伊藤整の次のような発言はこの立場を代表している。「生命には元來善悪はない。その働きのある部分を、ある特定の期間、人が約束して拒否する。それがその社会で悪と呼ばれるものに過ぎない。重要な生命の働きの悪の名で長く拒否すれば、生命は存在する限り、その力によつて復讐し、自己を恢復しようとする。」「その時の、その国の、習慣の、政治の支配権の都合によつて、便宜的に決定される者が善悪である。それは最もよい場合でも、市民相互間の自我の境界設定の公約にすぎないのである。」道德はここでは約束であり、人為的、後天的なも

のである。これが日本の知識階級を代弁する道徳観である。

#### 四、道徳教育をめぐって

##### デューイの道徳観—特設反対の論拠

戦後日本の教育を支配したデューイを先ず問題にしよう。彼の道徳教育の基本的方向は、初期の著作「教育に於ける道徳原則」の中に述べられている。彼は従来の道徳教育が「道徳についての観念 (Ideas about Morality) を「直接徳育」の方法で教えたことは間違であり、「道徳観念」(Moral ideas) を「間接徳育」の方法に於て教えるべきことを説いている。彼に於て道徳教育の目標とは社会の要求や条件に適應する社会的人格の形成であったから、そこでは「モラル」と「ソーシャル」は全く同義語であった。従つて彼は道徳を特殊な体系として教えることに反対し、学校社会の中で、カリキュラム編成の全教科によつて行わるべき事を繰り返して述べている。彼が道徳は本能的衝動に對立するものではなく、それに指導と方向を与えるべきものとし、従来の道徳は病理学的（非行を矯めるという意）であると批判したのは卓見であつた。現在の道徳教育の基本線が、この軌道を忠実に走つてゐるのは周知の通りである。

ハッチンガやマリタンによるプラグマチズム批判

しかしデューイのプラグマティズムに対する批判はアメリカに於ても切実な問題になつてゐる。進歩主義の教育といわれる彼の教育学が持つてゐる現実社会へ

の適當性の優先は、職業性と功利性に墮し、相對主義、機會主義、經驗主義の偏向を來すことを指摘したのは前シカゴ大学々長ハッチンズ博士であつた。又、フランスの著名な哲學者シャック・マリタンはエール大学に於ける講義で、既に十五年も前にこの傾向を指摘した。即ちデューイのプラグマチズムに屈服して獨立性と理想主義を失ひ、經驗を重視して抽象的思惟や本質的思考能力を蔑視する傾向におちいつてゐることをキリスト教的人間主義の立場から鋭い批判を加えた。デューイの持つかくの如き欠陥—価値批判のない並列主義、一貫性のない機會主義、過程を重視する余り目的を失つた教育にかわるものとして、日本にあっては今や明確な目的意識を持つたマルクス主義が強烈な影響を与え始めた。

**ニヒリズム克服をめざす  
ルキシズムとカトリシズム**

一體道德の領域は、「他を犯さない」という法律に近いものから、「汝の隣人を愛せ」という宗教に近いものまで、かつてはかなり広い領域を含んでゐた。しかし、この道德固有の領域は今や法律と宗教へ分裂しつつある。このニヒリズム—道德の空白—を克服する道は、ヨーロッパに於てはマルキシズムとカトリックである。前者は國家權力によるエゴの放棄であり、後者は神の前にエゴを調整することを前提とするが、いずれも自我の強烈な膨脹欲をきびしい權力や戒律という枠によって制禦する点で一致している。自律意志によるエゴの抑制という道德の持つ根本機能の衰弱によつて、國家は人倫の秩序であるという觀念は崩壊し、權力行使の組織であるという側面が強化される。それは更

に国際的な権力政治の横行を促し、緊張のかもしれない不安が人間を益々反道徳的方向にかり立てる。道徳の面から世界の現状を概括するところのような悪循環がくりかえされている。

### 戦後教育の抽象性と国家観の欠落

従って道徳教育の中核には正しい国家観が据えられねばなるまい。国家はマルクス流の消滅すべき過渡的存在でもなければ、人民搾取の道具でもない。それは人間が人間として本質的に生きんとする時、当然遭遇する不可欠の政治的文化的単位である。ソ連や中共の生徒守則の劈頭に「祖国愛」を謳わざるを得ない理由も実にここにある。戦後教育の「社会の形成者」を作るといふ理念が、歴史と具体性を欠いた抽象的人間像を創り上げ、それが革命理論で染め上げられて行く現状は、改めて直視されねばなるまい。道徳教育が保安と革新の政争の具に供せられているという事実こそ、危機の深さが底知れぬことを痛感させるのである。

## バイブルを統綜する日本文化の遺法

笠岡商工高校教諭 名 越 一 荒 之 助

### 旧約の創世記と古事記上巻

旧約聖書の冒頭をかざる創生記は、イスラエル民族の語る宇宙創世の大ロマ  
ンである。この創生記は民族の世界観的基礎を最も端的に擲むことのできる好  
資料といわねばならぬ。創生記は「太初に神天地を創りたまいき」をもつてはじまる。即ち全智全能のエホバ  
の神によってこの天地はすべて創成せられたというのである。それでは「神は誰が作ったか」この疑問には応え  
られない。ただエホバなる絶対者を設定するのである。この一元的割りまり方は必然的に敵対者を設定するこ  
とになる。即ち神（エホバ）に対立する悪魔（サタン）である。この両者の斗争相剋として世界をとらまえる  
のである。更にはエデンの園を仮定し、神の像に似せて造られた人間がサタンにそそのかさされ、神の禁じた木  
の実を食べたことによって樂園から追放されるのである。これが神のアダムに下し給うた厳肅な宣告である。  
ノアの洪水も人間の悪業に対する神の処罰である。バベルの塔の建設半ばにして彼らが散乱せしめられ、人類  
の言語が混乱するのも、同じような神の裁きであった。浩瀚な旧約全篇を一貫したテーマは、唯一神エホバの

絶対化であり、それに歯向うサタンとの斗争史である。

旧約の創世記に対比できるものは古事記上巻であろう。上巻は高天原を舞台にした国家創成をテーマとする人間ドラマである。古事記の冒頭は「天地の初発の時に成りませる神の御名は天御中主神」をもってはじまる。そこには誰が天地を創造したかの説明はない。古事記の神々は万物創造というような観念神ではなく、天地の中心、意志の建立を語る権威の確認である。古事記は更に「次に高御産巢神、次に神産巢日神」と続いている。次々と現れでる神々は皆個性の横溢であって、善神悪神の区別ではない。だから一神教か多神教かという観念のとらわれはない。そしてエホバやエデンやバベルのような空想性もない。そこには神々と国土のほげしい生産の活動が息づいている。「神天地を創りたまいき」という安易な解決ではなくて、国土も神々も「肉体の襖」の中から「息吹の狭霧」の中から鳴り出るのである。女神である天照大神が「伊都の雄建び踏建」べば、須佐男品は母の国に行きたいといつて「青山をから山なすなきからし、海河は悉くなきほ」すのである。それは人間性さながらの悲苦動乱というよりほかない。このような神々の人間劇がつみ重ねられて、高天原集團の創成は拡大されてゆくのである。この民族の爆発的エネルギーこそが日本集團形成への現実的力となつて開花していったのである。それは善玉悪玉にわりきる理的分析ではなくて、意志と生命の創造讃歌なのである。

本居宣長は古事記のユスモスを「道あるが故に道てう言なく、道てう言なければ道ありしなり」といって、殊更に道を定義したり言挙げしたりしない、日本的認識の特質をついている。そこには革命主義のように思想を戦術化する意図もなく、善と悪を截然と区別する構成上の配慮もなく、人生体験の痛烈なる直叙に終始しているのである。それが民族集団形成への壮大な抒事詩となって展開する。この包納性調和性こそ日本世界観の源流なのである。

### モーセと神試天皇

旧約創世記につづくものはモーセの出現である。彼は奴隸民族としてエジプトにつながれたイスラエルの民を率いて、父祖の地に大移動を敢行し、民族の起死回生をはかった。出エジプト記から申命記に至る長大な叙述はすべてモーセの行蔵である。モーセは旧約の主役であり、ユダヤ民族の信仰を久しきにわたって決定づけた大英傑である。彼の超人的エネルギーは百二十才にして「目は眩まず、その気力は衰」えなかったと申命記にしている。

旧約の性格を決定づけたモーセは出エジプト記に「わがエネバ、汝の神は嫉む神なれば、我を悪む者にむかいては、父の罪を子にむくいて三四代におよぼし、我を愛しわが誠命を守る者には、恩恵をほどこして千代に至るなり」「汝は他の神を拜むべからず、其のエホバはその名を嫉妬と云って、嫉妬神なればなり」といって神という絶対性と、嫉妬という執念とを併存した唯一神エホバの力を背景に、恐怖の支配を確立せんとしてい



るのである。

エダヤ民族がエジプトをのがれるにあたって、エホバはエジプトの長子をすべて殺し、エジプトの秩序を相続の面から崩壊させようとしている。エジプトからイスラエルへの民族大移動中、モーセはエホバの教のままに、一国から一民族へと侵略と略奪と支配をくりかえしていった。民数記略三十一章によれば「汝イスラエルの子孫の汝をミデアン人に報ゆべし」というエホバのお告のままに「ミデアン人の男を悉く殺し、イスラエルの子孫すなわちミデアンの婦女子とその子女を生捕り、その家畜と羊の群とその貨財をことごとく奪いとり、その住居の村々を尽く火にて焼」きはらった。

モーセは民族を窮地から救出する大壮举の中にエホバの権威を彼らの生活の末端にまで滲透させた。そして

### スポット

チャーチルとモーセ

チャーチルは「我々はモーセを単なる伝説的人物とする術学的な神話学の牽強附会のすべてを、軽蔑の念をこめて否定するであろう。我々は最も科学的な見解、最も新しい、又合理的な頭脳は、聖書の物語を文字通りに受けとることによってのみ、完全な満足を見出すであろうことを信ずる。我々はこれらすべてが実に聖文書にのべられてあるがままに起ったであろうことを確信する。我々はそれらのことが我々の場合とそれほど異なることなくして起り、人々が受けた印象は忠実に記録され、而も我々が今日読み電報記事の多くよりも一層高度な正確さをもって幾世紀間も伝達されたと思う」といっ

それを恒久化すべく「十戒」というきびしい戒律を作った。申命書法によれば、エホバ以外の神々に仕えることを死罪をもって嚴禁している。かくしてエホバはユダヤ民族団結の中心として仰がれてきたのである。

モーセをしてヒトラーを想像させるような暴挙を敢てなさしめたものは、エホバへの信仰と民族を窮地から起死回生せしめんとする革命的勇猛心であった。このような断乎たる行動に民族を動員させた力はエホバの力を背景にした宗教的秘儀の演出であった。彼は偶像という芸術を極端に憎んだ代りに、芸術以上に魅力ある祭祀を創造したのだ。利未記の大部を占める老大な宗教祭祀の演出手法は、今日のソ連製心理学より更に大がかりな洗脳工作といわねばならぬ。こういう民族改造論の実行が彼をして一代の大事業をなさしめた秘密なのである。

旧約のモーセに対比できるものは古事記の神武天皇であろう。古事記中巻の冒頭から天皇御東征の悲劇ははじまる。それは日向から大和に及ぶ遠々たる民族の大移動である。その行程はエジプトからカナンの地に至る

ている。神話をもたない英国、そして自国民宗教をもたない英国の老宰相は、全身の感激をもって国家創業と民族苦難の神話的記録に傾倒している。又或英国人は古事記の神武天皇を、モーセと共に世界十傑の中にかぞえて、国家創建の偉業をたたえている。国家がよく独立の尊貴性を保つ秘密は、案外なところにかくされているのかも知れない。

(岡山・妹尾大之祐)

モーセの偉業に対比できる。モーセが奴隸的境涯の民族をひきいて脱出のサスペンスを経験したのに対して、神武天皇は「何の地に坐さば天下の政を平けく聞看さむ。猶東の方にこそ行でまさめ」という暗示から、民族移動の壮挙を敢行せられた。その御東征はまつろわぬ民族を焼き払うモーセ的敵しさではなくて、各地の種族の權威あるものへの畏服である。それは神と悪魔という対決ではなくて、「言向けやわす」伝導的態度が根底にある。勿論「撃ちてしまむ」という軍歌に代表せられるように、まつろわぬ者共とのはげしい戦斗は行われたが、モーセのように「エホバは嫉妬む神」といって憎悪をもってする他民族の殲滅ではなかった。建国即位の時は「十戒」という戒律でしぼるのではなくて、「八紘を覆うて宇とするのはまたよろこばしからずや」という包納無窮の精神をもって中外に臨まれるのである。観念神エホバを永久化するのではなくて「天壤無窮」即ち天地自然と共に窮りなしという、内心の痛感としてのべられるのである。

### イエスキリストと聖徳太子

旧約聖書の性格を決定づけたモーセの死後、ユダヤ民族は久しい間他国に占領支配せられた。彼らは迫害にあえばあう程エホバによって統一感を強めていった。強烈な性格をもつユダヤ民族は、次第にエホバへの狂信から選民意識を強くしメシヤ觀をそだてた。即ちユダヤ人はエホバの約束通り救世主が現れて、世界を最終的に統一するという終末觀によって自己を満足させるよりほかなかつたのである。

このようなユダヤ思想の偏執性は、ヒトラーがアリアン民族優越論をかざして選民意識に酔う執念の強さに通ずるのである。更にユダヤ教の鬼子といわれるマルクスの共産主義思想は、プロレタリアをメシヤとしてとらえ、ブルジョアを嫉妬してサタン視するのである。プロレタリアはブルジョアの永遠の斗争を十字架として背負わされ、共産主義社会という終末観に立っているのである。これに対し自由陣営は、共産主義思想そのものをサタンとしてとらえ、自らはエホバの申し子としての狂信性を包蔵しているのである。そして両陣営の間には、エホバとサタンとの間に妥協の余地はないのである。このような現代的危機にまで通ずる旧約の伝統を背負って立った予言者イエスキリストは、当時の混沌とした世相の中にどのような生き方をもって応えたであろうか。

彼は洗民意識と終末観からぬけきらぬユダヤ民族に対して「悔い改めよ、神の国は近づけり」「神の国は汝らのうちにあるなり」という痛烈な内心の反省と懺悔を要求した。彼が念願した事は「天国に入る者はわが天に在す父の旨に遵う者のみなり」「何故我を善きと称ふるや、一人の外に善き者なし、即ち神なり」の切言にうかがえるように、イスラエルの父なる神エホバにおこるのでなくて、敬虔に仕える信仰の体験的認識を要求したのである。即ちイスラエルの興隆は「救世主の出現」と「天国の到来」によってもたらされるのではなくて各人各人の精神の復活によってもたらされるべきであると唱えた。だからイエスはモーセのように、エホバを

嫉妬の神としてとらえ、民衆を畏服するような態度はとれなかった。「神は試すものにあらず」として、エホバに仕える敬虔な民として生き方を唱導した。イスラエルの興隆はこのような敬虔な魂の回復によってもたらされるべきであるという、文化精神興隆を願う彼の態度であった。人心が遊離分散してとどまることなきイスラエルの分裂性に「おのれの如く汝の隣を愛し」「敵をも愛する」同胞的心楽の世界を先ず実現しようとしたのだ。これが彼にとって旧約の「成就」であり、イスラエルの国民共同体的認識を深める唯一の道であった。

併し内心の苦斗よりも表面の成果を願うイスラエル民族にとつては、イエスの遠大な抵抗運動の趣旨はわからずイエスをとらえて王とする動きさえ起つた。併しあくまで人と神に仕えるシモベとして終始したイエスは「王となさんとするを知り、復ひとり山に遁れ」たのである。

かくして弟子の数もわずかに十二人、力足らずしてイスラエルを救う望み少しと観取しはじめた時の「噫エルサレムよ、エルサレムよ。予言者を殺し爾に遣さるる者を石にて撃つ者よ母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我汝の赤子を集んとせしこと幾度ぞや。然れども爾曹は好まさりき」という悲痛なる叫びは、「原理イスラエル」に生死する忠臣の末路を思わせる。

彼は終に時の権勢の忌憚にふれて、泥棒二人と共に十字架の上に送られた。そこでは奇蹟は起らなかった。「神よ何ぞ我を見捨て給いし」という痛ましい告白は弟子達の心を甦らせ、「キリスト復活」実現させた。し

かし彼の復活した先は「イスラエルの迷える羊」の中ではなかつた。

かくて彼はイスラエルの四分五裂後、政治的国家的制約から解放されて、完全なる国際宗教の中に生きたのである。ヴントも「亡国の民のみがかかる国際神を生み出し得る」といつているが、イスラエルの亡国はイエスキリストとして異邦の中に再生させたのである。イエスの真姿はかくして失われて、イスラエル亡国イエスの神格化国際宗教の誕生が、三位一体となつて同時に発生したのである。

これは自国を支えるべき現実的価値観を喪失して、予言者イエスを殺したイスラエル国民自体の悲劇であり、自己の悲劇が終に異邦に伝らざるを得なかつたイエスの悲劇であり、イエスをメシヤとして美化する事に演出的手法を用いざるを得なかつたバイブルの悲劇であり、イエスをイスラエルの忠臣としてでなく人類の救済者と仰ぐことによつて、自国の民族国民宗教の伝統を遺亡した多くの国々の悲劇であつた。

イエスの遺志を正しく把握できない深い思想的昏迷は、キリスト教を中心とするはげしいインターナショナルリズムを生んだ。それは国際的に伝導の悲劇となつて現れ、宗教戦争による屍山血河をまねいた。民族固有の信仰を失つた諸国民は、共感の基盤を喪失して、精神的には異邦人的流浪を続けるよりほかないのである。自己を謙虚にふりかえる態度を忘れたイデオロギー狂信の空転的習癖は、うち続く「白人社会の内乱」を惹起し今尚世界的規模に於て尖鋭な対立の悲劇をくりかえしているのである。

イエスはユダヤ思想史の中に民族の魂を復活させた稀有の出現であった。この登場は日本思想史における聖徳太子に似たものがある。太子は建国以来のマンネリ化した日本に、外来仏教摂取の原理を示された文化創業の思想的偉人である。

小田村講師が合宿冒頭の講義に引用せられた維摩經義疏や十七条憲法をみても、太子が国民共同体の政治的基底をいかに信じ、それを身をもって貫かれたかがわかるのである。それはイエスが「悔い改めよ神の国は近づけり」「汝の隣を愛せよ」といって、自己の凡夫性と同胞愛に目覚めるべく訴えた態度に通うものがある。

しかしイエスは信仰一本に生きた人であり、その影響力は現世で実を結ばず、傷ましい悲劇的最期をとげたが、太子は直接廟堂にたつて、その影響力を文化政治外交と広範囲にわたつて及ぼされ「哲人政治」の実をあげられた、イエスの言葉が純度高い天啓的叫びであるに對して、太子の言葉の韻律は国民教化の政治哲学をこめた重量感にあふれたものなのである。その太子は政治家としての態度を「国家の事業を煩わしとなす。唯大悲やむことなく志益物に存す」という風に理解せられている。これは国家の事業をわずらわして逡巡されながらも、大悲やむことなく国家の仕事を「益物」としてとりあげる、宗教的政治的人格を謳われたものである。これは王となる事を強要された時、山に入らざるを得なかったイスラエルとイエスの国民的分裂性とは程遠い現実精神といわねばならぬ。「万億の生、無量の世界を感ずと雖も、その所在に従いて常にまさに施化すべし

「という言葉は、政治も文化も経済も、夫々その「所在」に従って「施化」すべきことをとかれたものである。だから複雑な要素を包括しつつ運営せられる国家生活は、そのままの姿に於て「施化」せられねばならぬのだ。それを「神と悪魔」の相剋に於て画いたり、「個と全」にわけて説明したり、「搾取者と被搾取者」の斗争を促したりしたのでは、国家の生命活動は死滅してしまふのである。政治は「大悲やむことなき」献身の精神をもつて、全ゆるファクターを国民生活の中に摂取しなければならぬのである。これが一国を支える文化威力の謂である。

キリスト教精神に対比せられる日本文化の系流

太子を「和国の教主」として仰ぐ親鸞は、このような認識の原理を「摂取不捨」といい、禅では「函蓋相称」といつて、あるがままの姿を摂取してゆく原理を観をうたっているのである。即ちこのような一連の日本文化の系譜は、あるがままの自然的秩序を原理とし、その立場から全ゆる要素を摂取して捨てないのである。

この文化精神は仏教摂取に於て最も端的に現れている。奈良時代に見られる国民的仏教ブームの開発者は朝廷そのものであられた。それはエホバ以外の信仰を異端視する選民意識とは似ても似つかぬ精神である。すべての宗教思想文化を摂取してやまぬ積極精神はこのような形で發揮せられた。併しこの仏教流入の渦中にあつても、天皇家は仏教に改宗せられるような事はなかつた。西欧の王家はこぞつて皆キリスト教に改宗し、ロー



マ法王から王冠を貰う事を誇りとした。破門された時は許しを乞う為に雪の中に一晚中立ち続けた逸話さえ残っている程である。しかしながらわが天皇家は民族の權威を見失わず、「日域大乘相広地」として、外来文化批判の原理を示されつつ、「民族国民宗教」を一貫して相続されて来た。ここに底知れぬ天皇家の英知の深さを思うのである。

更に山鹿素行は「上古は君長皆之を教え之を導く、後世は然らずして別に師を立つ既に衰世の政なり」といって、わが国で政治がマツリゴト―祭祀と一致した姿に於て行われた「上古神聖の治」を謳っているのである。これを現代的に云えば、宗教も政治も教育も国民的規模に於て「共通の広場」に立たねばならぬということになる。日本の歴史は時に隆替はあったけれど、この広場を「祭政教文化」の渾然たる復合体として相続してきた。これが国民生活を内面的に統一するゆたかなニュアンスであった。

国民は天皇の祖先と国民自らの祖先を祀っており、天皇も亦国民と同じ態度で祖先をまつる事を伝統とされて来たのである。死ぬまでに一度は「お伊勢まいり」をすることが、エルサレムやメッカに行く意義と同じように、国民的に励行されて来たのである。しかしながら日本人のお伊勢まいりは、マホメットやキリストのよきな借りものではなく、国民的崇神への帰依であった。

この国民宗教的背景をもつ天皇家は、根強い讃仰の対象となり、藤原、源平、徳川等の権勢をも畏服せしめ

ていたといわねばならぬ。彼ら実権者は皇位を奪うことは出来ず、天皇の下位に立って、摂政、関白、太政大臣、征夷大將軍などの官職の任命をうけた。私が特筆したいのは、このように権勢が失われた時に於ても天皇家は、文化的威信をもって国民生活の中に生きて来た事実である。

このような威信に生きた天皇家の英慮を、歴代詔勅の中にうかがえば、詔勅の数々の中には天皇自らの徳の菲薄を嘆ぜられて、天地神明に祈られる言葉が実に多い。「直言ヲ求ムルノ詔」と題して、人民の天皇への直言を求められる嘆願の詔書が驚く程多く出されている。天皇の地位は祖崇への熱禱と、人民の意志を求められる哀願そのものであるとも思われる。それはエホバの権威を背景に戒律を強要するようなものではなく、優者劣者の秩序を正当化する「指導者原理」でもなく、又「相互批判自己批判」で時の政権に忠誠を要求するソヴェット方式でもないのである。

この天皇の心情を御製の中からうかがえば

後水尾天皇 独述懐

ともかくもなさばなりなむ心もてこの身一つを歎くおろかさ

靈元天皇 苗代水

春の田をこゝろにまかす民も知れ苗代みづのゆたかなる世は

後桜町天皇 述懐

おろかなる心ながらに国民のなほやすかれとおもうあけくれ

孝明天皇 述懐

神ごころいかにあらむと位山おろかなる身のをるもくるしき

すましえぬ水にわが身は泌むともにごしはせじなよろづ国民

ここに選んだものは現代人になじみの少い天皇の御製ばかりであるが、天皇は観念化されたゴッドやアラールではなくて「神心いかにあらむと」「おろかなる心ながらに」民草の上を「歎き」「祈る」大悲そのものであられた。それは「詩を解する政治家」の心情という浅いものではない。又イエスのような激越な口吻をもって絶叫する悲壮感でもない。それはおおどかにしてあたたかく、清くしていつくしみ深い慈父のような、ニュアンスの結唱さながらである。この「述べて作らざる」アトモスフィアが、權威作用、安定作用、統一作用となつて久しく、国民生活の安寧秩序を保持し得たのである。

以上のように日本歴史に相続されて来た天皇を中心とするレジームは、政治にして政治にあらず、宗教に似て宗教のみにあらず、文化にして文化のみにあらず、日本国民生活の中に深く根ざし、そして切りはなす事の

出来ぬ民族国民文化を現成して来た史上稀有の実例といわねばならぬ。天皇一家は常に日本民族の心を心として日本民族永遠の生命の中心にあった。だから、天皇一家には虚栄なく、政治のみに心をうばわれず、文化の意義を高く把握して謙虚一すじの道を歩まれた。「つみあらば我をとがめよ」という天皇の御心なればこそ、国民の意志は永遠のひろがりをもって天皇に吸収せられた。歴史生命、永久のいのちのちの体現者がそのまつ天皇御自身ともなったのだ。日本の天皇が西欧の王国では見られない純度の高さを持つのは、このような諸条件を包括しているからである。「万世一系」が現実国民生活の中に相続されて来た事は決して偶然ではないのである。

世界に遍満せしむべき  
日本文化の遺法

日本の国民的文化伝統を支えて来た原理は、バイブルのように観念神を恒久化するのではなくて、地上に「万世一系」を実現することであった。唯一神の権威を掲げて国民を畏服せしめるのではなくて、大らかな大悲をもって国民に直接臨まれるのである。絶対神の権威のままに生活の末端に統制を及ぼし、精神の内奥まで支配するのではなくて、人間性をそのまま容認して「自然的秩序」の彼方に恩讐を超えて立たれるのである。未来に神の再臨を狂信する必然論的終末観に立つのではなくて、天皇への忠誠がそのまま祖国の歴史に包摂されるという現実体験をうたうのである。特定の個人や民族を「神のひとり子」「選民」として地上に下したという超越的独断ではなくて、「共に是凡夫」という謙讓の態度を相互に

触発させるのである。特定の宗教やイデオロギー以外を異端として排撃するのではなくて、仏教も儒教も西欧思想も渾然として摂取融合させるのである。

ユダヤ教は自らの持つ世界観の故に、永い歴史にわたって民族の悲劇を生んだ。その残映であったイエスの意志も国民生活の中に相続せられず、民族全体が久しい放浪の生活を運命づけられた。それはバイブル一巻が現実国家生活の原理としての資格を持たない事を意味する。しかしながらわが国土に相続せられた一連の日本文化の系譜は、摂取不捨の原理として相続せられて来ているのである。

それは「天壤無窮」という天地自然に合奏する悠久なる現実感覚を生み、「日域大乘相応地」として、仏教思想の現実体現者をもって任ずる高度の文化精神ともなった。或は空か有かという対立するイデオロギーに対しては「空有相即」という両者の立場の限界性について、相互関連の中に生きた現実を掴む方法論を示した。それは更に発展して自然的秩序の中に真理は輝く、「自然法爾」の社会哲学を生んだ。その社会哲学の背景には、悪の自覚こそ人間救出の正しい転機である事を示す「悪人正機」の宗教原理があった。この「総合的創造精神」こそ日本文化の精華であった。この精華に生る時「日本は東洋の博物館」（岡倉天心）という大らかな芸術的直解を生み、自由な精神の作り出した自由の芸術（ブルノータウト）という日本美術讃歌ともなった。

この事実の確認こそ、日本文化が世界に背負わされた現実的任務なのである。日本は常にこの使命を体し

て、世界史の混迷の中に高度の批判者調停者をもつて任ずべきである。断じて「白人社会の内乱」に参加すべきではない。これが日本文化の威敵の命ずる所である。

しかしながら日本に於ける思想混迷の度は甚だしく、日本文化の遺法を開発する試みは具体化せず、日本は近世世界史にうちつづく世界戦争の中に「風にそよぐ葦」のごとくに浮動を続けて来た。その上現代の日本は、ユダヤ民族がローマの占領支配に置かれてからいよいよ亡国の度を深めたように、無条件降伏は精神的屈辱をまねき、民族を支える国体観は薄明の彼方に没し去ってしまった。

国家の命運に直接つながる政治自体の中にも、国民主義と階級主義とが水炭容れない姿で対立を示し、国法の權威さえも失われた現代の姿である。夫々分裂してそこに統一ある精神は感ぜられない。それはパリサイ派とサドカイ派との相剋に加わる熱心党の革命主義がいり乱れ、更に外敵ローマの為に木葉のようにただよう、物情騒然たるイスラエル末期と近似しているのではないか。このままで推移すれば日本は内部の不統一の故に、国際勢力によって歴史の最終的審判をうけるより他なくなる。その時如何に予言者イエスが現れても、そのキリストは「人民裁判」の前に銃殺の対象としかなり得ないであろう。

親鸞は「末法五濁の有情の、行証かなわぬときなれば、釈迦の遺法ことごとく、竜宮にいらたまいにき」と悲歎している。太古以来相続されて来た日本文化の遺法は、「末法五濁」混迷の現代に滲透する所とならず、

海底深く「竜宮城」に沈められてしまった。如何に日本文化伝統の中に、世界摂受の原理をもつといつても、これを引きださなければそれは、竜宮城にうづもれた秘宝にしかすぎぬのである。久しい間海底に沈んでしまった日本人の魂を、白日のもとに浮きあがらす、ことそぎて力ある「手力男命」の出現は、日本文化精神の「遺法」を世界に遍満せしめずにはおかぬのである。

#### 河村幹雄博士遺稿集より

自然科学は新しきがよし、人文の学は古きがよし。物質の学及び知識は推積す。人生の体験は人と共に亡ぶ。

#### ポアンカレ「晩年の思想」より

人が我々に祖国への愛を推理によって示せと要求するときは、我々は甚だ当惑することもあろう。しかし我々が心のうちに、我々の軍隊が敗れ、我がフランスが侵略されたとせよ、我々の心は悉くわきたち、眼には涙がうかび、もはや何事にも耳を籍さないのである。だから科学は科学だけでは倫理を創造することはできない。科学は科学だけでは伝統的な倫理をかき乱すことも破壊することもできない。

（河村博士は地質学研究者として晩年は九大工学部長をつとめた人。ポアンカレは数学、天文学、物理学に卓抜な業績を残した大科学者。）

## 生理学・医学の流れ

都城中央病院長・医学博士 小川幸男

自然科学の応用方法に誤謬はないか

人類のいとなみの窮極の目的は、健康で長寿を保ち平和で幸福な生活を送る事にあるのではなからうか。それは人類始つて以来の夢であり、すべてのいとなみはそのみ果てぬ夢に向つて集結していると云つてもよいであらう。

科学を含めてあらゆる学問もその例外ではあり得ない。特に自然科学の発達は驚異的であり文明の進歩に直接間接に貢献している功業は誠に偉大である。

しかしながらよく考えてみるとこれらはいつかその本来の目的軌道を外れているところがないと果して言えるであらうか。

例えば文明生活が高度に営まれる程健康を害う事が多く、人間精神もまたむしばまれ、遂には自ら作り出した原水爆の恐怖におののくにいたっている。かく考えてくると文明とか科学とかは、人類の夢に向つての努力



に見方によっては逆行しているかの様でもある。という事は純粹の科学はいさしらず、応用の科学又は科学の応用に於て、研究方法上の誤謬を犯しているためではなからうか。

人文・社会系統の学問に於ては、自らをその場に投入し実人生に密着して物を考えようとせず、単に外在的傍觀的に眺めるという致命的な研究方法上の誤謬が犯されている。例えば世の進歩的学者文化人と称する人々の如く蔽蕪な現実精神を忘却し、自己が本質的に日本国民であるという事実認識を有せず、単なる概念の操作にのみ熱中してつぎはぎされた論理のみが学問であると教えている。このことが国民生活を厭離呪咀し、果ては之を否定破壊する事に依って人間の幸福が招来されるという風潮の根本因をなしていると考えられるのである。

### スポット

## 綜合科学者

末安悟郎遺作

自然科学的研究作業と

精神科学的研究との

内心の綜合統一

おゝ、それは

余りにも不可能に思はれる

けれども

けれども

ぼくはそれをなしとげねばならぬのだ。

どんなことがあっても

ゲエテが

ヴントが

あつたという事實は

その様な誤謬が自然科学、特にその応用の面に於ても犯されている事は果してないであろうか。

なる程学問には自分を離れて外在的傍観的に眺めると  
いう立場があり、又そこから学問は発達して来た事は否

定できない。しかしながらすべての学問は窮極に於て人

間のためのものであり人類の夢に向つていとなまねなければその意義はなくなるのではなからうか。

アレキスカレルー七十一年の彼の生活はただ一筋に祖国への忠誠と全人類への熱烈な愛情と、更に真理探求への真摯な態度に貫かれ、一九一二年にはノーベル生理学・医学賞の受賞に輝いた。人は人間の本質が未知のままに残されているのに他の科学ばかりが跋行的に進歩してゆくという事はやがて人類の破滅を来すであろう、現在の科学はまさにノアの洪水への道を進みつつある、早く考えを改めて滅亡から逃れよとのべている。

人間をその様な破滅から救うためには、未知のままである人間の本質を、他の学問と一緒に科学的に生理学・医学によって説明してゆく事が必要であろう。

自然科学を応用した生理医学  
から精神身体医学に至る流れ

デカルトの二元論に淵源し、疾病の所在は細胞にありとするウィルヒョウの細胞病理学説によって発達してきた現代医学は、機械と人体を同一視し、

絶望に苦しみもたえる  
ぼくのこゝろに  
かすかなる希望の光を  
あたえてくれる。(昭和十九年)

精神と身体は切離され、更にその身体はバラバラの部分に解体されている。しかし個々の臓器は一見独立した働をなしてはいるが、それは人間という綜合体に向つての個々の分担であつて、決して不統一な別箇の存在ではない。

かくて現代医学は「体」を対象にするものがその主流になり「心」を対象にする精神医学もできては来たが、之も未だ精神と身体は別箇のものとして取扱われていた。

病氣を説明するために解剖学がすすみ微生物学が進歩し、物理化学を自らの中にとり入れて躍進していった。最近では原子核物理学の発達により放射性物質を利用した生命現象の探求と、電子工学の進歩による生体の電気発生の追求並びに電子顕微鏡による極微の生命の限界が明らかにされつつあり、又化学の進歩は前世紀に分化した生化学を再び生理学・形態学と同化させ蛋白質や、高単位有機物質・膠質化学的伝導などのテーマに向つて成果をあげつつあり、ソ連のオーリンの云う「人工生命」の創造も或は近き将来には可能であるかも知れない。又臨床医学の分野は診断学の進歩、外科手術の進歩、新薬の出現等まことにめざましいものがあり、多くの疾病から人は救われ平均寿命も延長して来た。

しかしこの様な驚異的な進歩の反面解剖学的に又組織学的に何らの変化も見出されず自然科学的方法で手のつけようがなく「氣」のせいとして放任されてきた多くの病人がいて、しかもこの様な病人は今日ますます増

加の傾向を示している。

之らは生体の構造には何ら異常なく、ただその働きの面に故障を起しているにすぎないから前者の「器質的疾患」に対して「機能的疾患」と名付けられている。悲しい時に胸がつまり、ビックリした時に動悸がし、恐ろしい時に顔が蒼白になり、恥しい時に赤くなる等は日常よく経験する所であり、情緒が身体機能に微妙に影響している事を知るのである。大胆・小胆・肝積・心胆を寒からしむなどの日常語にも我が国の先人が経験的に此の事実を認めていた事を知る所以あり心身相関の思想を窺う事が出来るのである。

心の如何なる変化がこのような機能的変化―疾患を起すかを知るために、やがて心理学を生理学・医学の中に導入する必要が生れてきた。フロイドに始り又キャノンの「情緒表出の生理学」の研究に端を発し、更にストレス学説その他の研究にまですすんで来た。即ち人間を従来の自然科学的方法と平行して、新しい心理学的方法によって研究し「病める体」丈でなく「病める人間」を全体的にながめ理解し取扱って行こうとする考え方―精神身体医学―が発達し来た。

ここに於て漸くアレキシスカレルの指摘に答えるかのように、ながらく忘れられていた「人間」の再発見がなされようとして、医学は従来の身体の科学から人間の科学へと前進してきた。

即ちその本来の目的軌道にのって進んでゆきつつあるという事が出来るようになった。

### 生命医学の立場に立つ 東洋医学の方法

実は東洋の医学なのである。

東洋医学というと前世紀的であり既に過去に没し去った医学であり、現代感覚からいうと異邦的な感じを受けるのであるが、その古典理論は現代医学の直面している方法論的問題——例えば単なるレントゲンやアイソトープの利用の如きは科学の機械的応用化にすぎず、原理的な医学の基礎化ではない。単なる応用化では現代医学の方法論的前進は期待出来ない——を既に二千有余年も前に素朴な形に於てではあるが解決しているという事が出来る。

一九一七年ドイツのシュベングラ―は「西洋の没落」を発表して甚大な衝動を科学思想に投じた。即ち文明というものは成長発展没落の過程を辿るものである事を指摘し、ヨーロッパ文明は二十世紀を頂点として週期的没落に直面しようとしていると唱えた。

この世界の対立がとける兆しは一向になく不安が現代を蔽い、又人間自らは機械に引廻わされ自ら作った原水爆の恐怖におのき、経済機構や社会機構に引ずり廻され、更にはイデオロギーにしばられて、例えばかかる事は歴史の必然であるとか、又あらゆるものは結局経済的な要因によって決定されるなどと信じて、人の作

つたものにすぎない一つのイデオロギーの前に人間喪失してしまっている今日の実状をみると、シュェペングラ  
ーの予言が的中しないと断言する事は出来ないようである。

しからばカレルのいう「人類の滅亡」やシュェペングラの予言する「西洋の没落」を救い補い得るものは果  
して何であろうか。すでに没し去ったと思われる東洋的思惟にそれを求めるのは果して偏見であろうか。

西洋文明はその救済更生の生命原理を東洋文明に向って模索しつつありというのは果して連断であろうか。

事実生理学・医学の領域に於ては、現代医学に対して全体的概念を与え、哲学的深みを加え得る思想体系を  
有する東洋医学との接触融合は既に始まっている事は既にのべた医学生理学の傾向特にアメリカのセリエ教授の  
汎適応症候群、ドイツのシャイト教授の自動制御理論、ソ連医学のものの考え方などをみても、唯物論医学の  
迷蒙よりさめぬ保守頑迷の人々を除いては誰しも既に之を認めているところである。

そして東洋文明の伝統及理想の現実的把持者はまさしく日本であり、日本人こそはこの様な流れの中にあっ  
て最も有利な位置にあるという事が出来るのである。

東西両洋の文明の綜合融化する事業が、久しい間未知であった人間を破滅から救うために、その本質を科学的  
に解明し、そして人類窮極の目的である健康で長寿を保ち、平和にして幸福な生活を願うところの最も進歩し  
た生理学・医学に於て、今日の歴史的課題として着々行われているという事は誠に意義深いものがあると思わ

れる。

以上のような発表に対し、八代の加藤氏から、東洋医学の方法について片鱗だけでも聞かせてほしいという質問がでた。それに対し講師は、東洋医学の古典といわれる「傷寒論」と「黄帝内経」を引用しながら次のように答えた。

カナダのハンス・セリエ教授は多くの病気がストレス—心や体の無理によって体内のホルモン系に不釣合がおこる—の結果であり、それは一定の順序で経過してゆく事を発表した。之は従来の近代医学が分析的であったのに対し、身体の総合的・全体的理解を志向しているという事が出来る。

しかしセリエは知らなかったけれどもその様な見方が古代の東洋においても西洋においても存在していたが、今日なお命脈を立派に保っているのは東洋の医学である。

東洋医学の根柢にあるのは東洋思想であるが、それを今日でもなお我々に示している古典は、薬物療法を主とする「傷寒論」であり、物理療法（針灸）を主とする「黄帝内経」であり、それらが中国及日本の医学思想の根柢を作った思想体系である。之らは各種の形而上的思想が導入されてはいるが、特に「傷寒論」の思想は

東洋医学全般の根柢の思想を代表すると考えられ、次の様な見方・考え方を示している。

即ち第一に病氣を把握するのに全体的・総合的である。例えば感冒の場合、熱とか咳とかを個々に取扱わずあらゆる症状を綜合して「証」として全体的に把握し治療してゆく。之に対し近代医学は熱とか咳とかを一つ一つ分析的に把握して治療する傾向がある。

第二は前者に於ては病氣を動的に把握する。例えば三陰三陽という六つのカテゴリーによって病氣の変化を表現し、病邪の身体における位置を示しており、それによって治療法が決ってくる。後者に於ては静的固定的に把握する。例えば肺結核の場合体力の強弱、症状の重軽を殆んど考慮せず肺結核という診断を下し殆んど一律に化学療法を行う如きである。

第三には近代医学に於ては基礎医学はそれだけでも学問として独立しているが、東洋のそれは臨床医術の中にその方便として包含されている。「楠公父子別離の図」に於て松の枝がことごとくしなだれて泣いているかの様であるが、之について芳崖は絵には一つの目的がなければならぬ。すべての点景物はその目的を助長する以外の何の意味もないと云っている。東洋医学の基礎医学の目的である臨床医学に向つて傾斜し、為に事実と離れる事があつても平氣である。即ち極めて実用的な考え方をとっている。

第四には常に体験的である。そして体験的立場から長年の厳密な観察の結果すべての病氣を三陰三陽の六つ



のカテゴリーに還元した。体験的であるが故に今日追試してもその適確さに驚くのである。

以上傷察論に代表される東洋医学の考え方の一端を概括的にのべたのであるが、医学がより高次でより完全なものになるためには、東洋思想だけでも勿論足りないし、又西洋思想丈でも足りない。両者を統一する体系が形成されなければならないと思う。

## 階級史観と民族問題

鹿児島大学助教授 川 井 修 治

### 一、階級史観とは

ここで階級史観と言うのは、マルクス主義者の説く唯物史観の別称であつて、これを一言に要約すれば、人類史の流れを経済、特に生産力の発達状況が決定するものと見、人間の活動はその時々を生産力と生産関係との矛盾に照応した社会的勢力（階級）間の斗争をこそ実内容とする、という観方である。かの共産党宣言の

冒頭にある「従来の一切の社会の歴史は階級斗争の歴史である」の一文は、これを端的に表明したものと言えよう。左翼系の歴史家はこの基本テーゼに則つて、複雑な歴史の流れから階級対立→階級斗争の側面のみを取り出し、これを歴史の唯一の本質的な相であると強弁する。しかし公正なるべき歴史家の立場よりすれば、このような論断には随分問題があり、専門の学会等ではかかる公式主義的意見は殆んど相手にされないのが実情である。ただ現在のジャーナリズムでは、左翼的言論が異常な迄に勢力を占めている処から、一般にはさして深い考察もなく階級至上意識に捲き込まれている向きもあるの——例えば日教組の倫理綱領の如き——先ずはこの階級史観に批判を加え、これが殆んど事実の検証に堪えぬことを明にする必要があるらう。

## 二、階級史観批判

### 階級の概念

階級は単なる貧富の差を以て区別される概念ではあり得ない。マルクスは所得源泉の相異によって階級を区分し、利子—資本家・地代—地主・労賃—労働者の三つを析出した。レーニンは更にこれを敷衍して、「社会



的生産体制内における地位、生産手段に対する関係、社会的労働組織内における役割、従つて社会的富の中その処理し得べき分前の方式と獲得分量」を階級区分のメルクマールとした。これによつて見れば、階級とは法律的概念である身分や技術的概念である職業とは異なつて、純粹の経済的概念であり、しかも生産手段の所有非所有、従つて剰余価値の搾取被搾取をめぐつて不俱載天的に対立する二つの人間集団ということになる。それ故階級間の斗争は絶対に調整和解さるべきものではなくて、正に食うか食われるかの死斗以外にはあり得ず、この斗争の最高の形式たる革命にあつては、一階級（現時は被搾取階級であるが未来の生産力の担持者たる新しい階級）による他階級の制圧克服しか解決の途はあり得ないことになる。

以上が概略ではあるが唯物史観による正規の階級概念である。世上この概念が不明確なるが故に、本質的に異種の社会集団の動きをも單純に階級斗争であると見做し、恰も階級史観が一貫不変の原理であるかの如く誤解する傾向が、少くないようである。

### 階級の範囲の不当な拡大

マルクスは、古代に於ては自由民対奴隷の外に貴族パトリキート対平民プレブスの関係を、中世に於ては領主対農奴の外に諸侯対家臣・親方対職人の関係をすべて階級対立の実例として取り上げた。しかし前項の定義よりすれば、眞の階級

対立と目されるは自由民（貴族も平民も含めての）対奴隸・領主（諸侯も家臣も含めての）対農奴の關係のみであつて、それ以外は似而非なるものと言う外はない。何故かならば古代の貴族と平民の差異は、家格に基く身分的特権の差、それに基ずく所有の大小の差であり、決して生産手段（主として土地）の所有非所有をめぐると對立ではないからである。中世における諸侯と家臣の差異も又同様の性質のものであつて、成程これ等の間にはトラブルがあるにはあつたが、これらは苟くも階級斗争と言うべきではない。親方と職人との對立はたしかに生産手段（工場工具）の所有をめぐると對立ではあつたけれども、本質的にはこれは同一業種内部での階級等順位の差であり、職人の目的は親方制度そのものを廢絶することではなくて、自分自身が親方になることにならなかつた。それ故古代・中世における階級對立は、基本的には自由民對奴隸・領主對農奴の關係のみであり、それ以外の對立をも無差別に階級對立として取り上げたのは、マルクスにも似合わしからぬ不用意な失策と云うべきであらう。そして同様のことが近代以後についても指摘し得るのである。

階級史観は近代の中間階層の動きを説明することができない

近代における真個の階級對立は、言う迄もなくブルジョアとプロレタリアとのそれである。特に産業革命の

發足により所謂經濟時代に入った十九世紀に於ては、この兩階級の懸隔、そして対立は極めて熾烈なものがあつた。この事實は承認するとしても、これを以て直ちにこの時代の労働者の動きが意識的な階級斗争、つまり単に資本家の酷使や低い生活条件を緩和改善することを目的とする運動ではなくて、現存する生産体制そのものの全面的変革を、マルクスの言う収奪されたものが収奪し返すことを志向する運動（これぞ階級斗争の基本的性格）であつたと断定することは、後に述べるように大いに疑問がある。蓋し階級の存在自体は必ずしも階級斗争の存在を意味しないからである。

それはとも角近代に於ては、ブルジョア対プロレタリアの基本的対立関係の外に、多くの中間階層——独立農民や手工業者や中小商人達が存在していた。マルクスは例の資本集中説に基いて、これらの中間階級層は資本主義生産の進展と共に兩極に分化して行き、就中多くはプロレタリアになり下つて中間階級層は解体して行く運命にある、と予言した。しかしこの予言は全く適中せず、現在我々の周囲を見廻して見ても所謂中小企業者や農民、ブルジョアとも言えないがさりとてプロレタリアとも言えない独立生産者乃至独立生計維持者が、依然として数多く存在していることは、疑うべくもない事實である。しかのみならず資本制大企業の發達とそれに伴う国民生活の膨脹は、新しく多くの経営者技術者事務員そして公務員を輩出せしめた。所謂ホワイトカラーの大量進出である。これらはもとより生産手段の所有者ではないが、決して資本家の意のままに搾取され酷

使されるものではなく、企業体或いは国家による生活の保障の下に、自己の持てる技術や知識を活用して夫々の部門を担当するものである。生活意識について見ても、日々画一的な肉体労働を強いられ、現在の苦しい境遇から脱脚する為には腕を組んで革命をおこす外ないというプロレタリア意識とは程遠く、むしろ小市民的な意識に安住し、自主性ある生活設計を目ざして地道に生きて行くのがその一般であろう。もつとも高級技術者や官吏・経営者等の生活状況は、ブルジョアのそれに類するものさえある。

要するにマルクスが近代の社会層をブルジョアとプロレタリアの二大陣営に截断し、諸他の動きの一切をこの二階級対立抗争の基本線で以て割り切ったのは、十九世紀中葉産業革命発程当初の認識に基づくものであり、言はば百年前の予想にしか過ぎないのである。爾後の歴史を知る我々が、この余りにも古びた認識に固執するいわれないことを、私は声を大にして訴えたいのである。

階級対立は必ずしも階級  
斗争革命を意味しない

マルクスは周知のように、階級の存在をそれ自体（即自的階級）と階級が階級意識に目ざめて運動する状態（対自的階級）とを弁別した。そして即自的階級を対自的階級に迄成長せしめねばならぬとして、あのように奇

激な宣伝煽動を開始したのであった。このマルクス自身の経験よりしても明らかのように、対立せる階級が現に存在したとしても、それは必ずしも階級斗争（その経極目標は前記の如く既存社会の生産体制を全面的に変革すること―革命でなければならぬ）の存在を意味するものではないのである。古代の奴隸や中世の農民は時々叛乱や一揆を起した。それは事実である。けれども彼等が激発したのは、主人や領主の苛斂誅求に対してであつて、支配体制そのものに対してではない。彼等が求めたのは、主人のよりよき待遇と領主の善政であつて、主人や領主の地位の全般的転覆ではない。一部の過激な煽動家の中には、例えばドイツ農民戦争におけるT・ミュンツァーの如き、革命的意図を抱く者があつたけれども、これは決して農民全体の意向ではなかつた。これを階級斗争乃至革命運動と見るのは、階級斗争や革命の何たるやを知らぬ妄説である。

近代に於ても尚且つしかり。一九四八年のドイツ三月革命に於て、マルクスはこの革命を民主革命から一挙に社会主義革命に迄押しで行こうとし、「新ライン新聞」に寄つてさかんに煽動を試みたが、その企ては完全に失敗した。かかる動乱期に於てすら、マルクスの傘下に集る者は三千人を超えなかつたのであつた。成功せるロシア革命に於ても、ボルシェビキの人数はかたがた五・六万、国民の大多数を占めるに程遠い状態にあつた。又ここでは計密な計算の基礎を明にする余裕はないが、ワイマール共和国治下におけるドイツの労働者の中、社会民主党及び共産党以外のブルジョア政党内に投票したものが三分の一以上に達することは確實であり、

自己の階級所屬と階級政党支持とが必ずしも一致しないことが明白にうかがい知られるのである。同様の实例は枚挙にいとまがない位で、一般的に言つてイギリス労働党や北欧の社会党の如き国民政党的色彩を持つものは別として、純粹の階級政党にして国民の三分の一以上を獲得した例は一つもない、というのが政治史の常識である。前述のようにマルクスは、近代に於ける階級の分化・対立・抗争が愈々激化して行くことを予想し、やがては国民の大多数を占めることになるプロレタリア階級が団結することによつて自己の力を意識し、恰も自然的必然性をもつて革命を成し遂げると断言した。しかし爾後の歴史の経過は、事実の上でこの夢想を完全に打破し去つたことを、我々は認めない訳にはゆかぬ。

歴史的轉換期（革命）の真相は階級斗争一本では律せられない——（省略）  
要約…対立—斗争に非ずして大和協調の世界を求めよ

以上によつて我々は、あの誇大な階級史観が事実の検証の前ではいかに欠陥だらけのものであるかを知ることができた。にも拘らずマルクス主義者達が冷厳な事実を目を覆い、あくまで階級斗争→革命に狂奔するのは、一つの心理的前提、彼等の痼疾とも言うべき一つのドグマ的センスがあるからである。それは一言もつてすれば対立観、斗争万能観である。すべての事物を兩極に極分し、その間の対立・抗争・征服に解決を見出



そうとするどぎついセンスである。しかし仮に利害相反する二人の人間が向い会ったとして、問題の解決の途は両者の罵り合い、擲り合い以外に見出せないものだろうか？動物ならいざ知らず、理性ある人間ともあればお互いの言い分に耳を傾け、互譲協調の途を求めるのが本当ではなからうか。（ヘーゲルの理性の発展形式としての弁証法はかかる意味合いのもので、マルクスはこれを物質の物理的衝突による敵対的弁証法に変形し下グマ化した）その際同一の平面上でお互いの言い分を主張するだけでは、協調の途は開けぬのであって、一段高い両者を包含し得る次元に立たなければ和解が不可能であることは、誰しも気づく処であろう。かかるものとして私を取り上げるのは民族（国家）である。そして過去の歴史は、この民族という立場が錯綜する階級的利害をも、内に含めつつより高い次元に於て統一する役割を果して来たことを、如実に示してくるのである。

### 三、歴史に於ける民族の意義——（省略）

### 四、共産主義と民族——（梗概のみ）

共産主義は民族（国家）  
を原則的に無視する

共産主義は国家を資本主義社会の形成物と見、民族主義をブルジョア・イデオロギだと規定する。従って資

本主義が崩壊して社会（共産）主義社会が実現すれば、国家（民族）はその立脚地を失って必然的に消滅すると見る。そこに生れる新しい人類社会（長田新氏等の常套語）の担い手たるプロレタリアは、苟くも民族や国家に捉われてはならず、所謂「労働者に祖国なし」とこそ認識すべきだとするのである。このように共産主義が原則的に反国家的であり、国際主義を志向することは、天下周知の事柄であると言えよう。

なる程西洋に於ては、近代国家の擡頭が資本主義の発生と時を同じくしたことは事実である。資本主義の完成期たる十九世紀に於て、国家間の利害が最も激しく対立し、所謂国家的利己主義の極端なる発現の時代を迎えたことも、一応は承認されてよい。だがしかしこの一時期の国家主義の強勢の現象を捉えて、国家の全機能・全意義を資本主義という経済構造の一屬性と化し去って果してよいものであろうか？ここで階級國家論に対して全面的な批判を展開する余裕はない。ただ現実の歴史は、国民的結合の要請の前に階級的利害の対立が雲散霧消した実例——その典型的なものは第一次大戦勃発時におけるドイツその他の社会主義者の動向——を幾つでも提供してくれることを附言するに止めたい。そして過ぐる大東亞戦争の体験に鑑みつつかのルナンが言った「民族は単に人種でも宗教でも言語でも定義できない。民族は精神的原理を共通にし、魂を共通にしているものだ。過去の豊かな記憶を共同に持ち、将来も一しょに共同生活しようとする共同の意志を持つもの、過去の光栄と悲哀を共にうけつぎ、将来の喜びも苦難も共に分かち合おうとするもの、これが民族という

ものだ。民族の根本は共同の道德意識である」という言葉を、我々自身が噛みしめてみる必要があると思  
う。

共産主義は戰術的に民族  
(国家)を利用する

原理的には民族(国民)を無視する共産主義も、行動の實際面に於ては歴史的に蔽存する民族的紐帯を無視することはできなかった。既にマルクスでさえ「労働者は自身を国民として構成せねばならぬ」(宣言)として、世界革命への過渡的な粹としてではあるが国民の立場を認めており、レーニン→スターリンに至れば尚更である。レーニンは周知のように民族自決を唱えたし(但しこれは世界革命戦略の一環として植民地・隷属国民の蹶起離叛を煽るといふ戰術的念慮から発したもので、ウイルソン等の唱えたものとは動機に於て異なる)、スターリンは一九三七年歴史を民族主義的に書きかえさせ、対独戦争を「大祖国戦争」と称して支え切った。彼が日本降伏に際して発した布告には「一九〇四年の日露戦争におけるロシア軍の敗北は、わが国民の意識の中に苦い思い出を残した。この敗戦はわが国に汚点を印したものであった。わが国民は日本が粉碎され、汚点が一掃される日の来るのを信じていた。我々古い世代の者は四〇年間この日を待っていたのである。そして遂

にその日が訪れた」とあるが、これは全く自国の歴史を熱愛する古老の言とも云うべき調子を帯びている。げにスターリンをしてかく言わしめたものは、共産治下四〇年にして尚抹消することの出来ない民族意識の敵存であり、現実政治家たる彼が理論の矛盾を冒してもかかる国民感情に乘托して自己の權威を高めようと思つた結果と思われる。

更に見逃せない点は、国内に対してのみならず国外に対しても、戦術上のスローガンとして民族の名をふんだんに用いていることである。アジャ・アラブの民族主義を自由陣営と噛み合せ、その勢力を滅殺するためにかに巧妙な術策を弄したかはここに喋々する迄もないし、日共が得意の平和という看板と並べて民族独立をさも神妙げに説くのも、同じ理由からである。だがしかし我々は、彼等の言う民族独立の呼び声が所詮特定の政治目標（日本の場合は自由諸国との離間）に従属する一つの戦術にしかすぎぬこと、それ故歴史の土壌の上に形成された自民族の生命に対する真の愛情などではなくて、時々の政略によつていとも簡単に抹殺されてしまふものであることを、記憶に留めて置かなければならぬ。現にスターリンは言っている「民族自決権が他の権利、即ち労働者階級がその権力を強化しようとする権利（プロレタリア独裁）と矛盾する場合もあり得る。その場合には——卒直に言っておかねばならないが——民族自決権は労働者階級の独裁を樹立する権利に対しては、その障害となることはできないし、又なつてはならないのである。前者に後者は対して道をゆずるべき

である。』(一九二三年・第一二回党大会報告)と。

## 五、結 論 —— (梗概) ——

1、階級史観は人生事実の正確な把握から生れたものではなく、一個の独断的理論に発した極めて粗雑な歴史解釈である。複雑多岐な人生の動きを、予め指定された階級という同質的な集団概念で以て割り切ること、成程便利な手法ではあるがすべてを盛りつくせるものでない。

2、しかもその理論の根底には、憎悪と反抗・斗争と征服というドギツイ人間観が横たわっており、大和協調という高い倫理観とは無縁のものである。

3、しかし畢竟深く歴史に根ざす民族(国民)の紐帯を克服することはできない。それでいて尚も理論に偏執しつゝ、人生事実を曲げて利用しようとする。原理的に民族を敵視し、戦術的にこれを利用しようとする欺瞞と撞着は、やがて馬脚をあらわさずにはないだろう。見よ東欧衛星国はもとより、ソ連国内に於ても胚胎しつゝある動勢を!!

4、それにしても不可解なのは我国の自称進歩勢力の妄動である。独立の名の下に自由諸国との依存関係を弊履の如く擲って願ない。我々は今こそ其の国民共同体的基盤を確立し、共産勢力の弄しつゝある術中に陥ることを、断然防止しなくてはならぬ。

以上六人の連続的講義を整理するには、班別討論によるより他なかった。夕食後行った各班毎の会合では、本日の多彩を極めた発表を中心に全ゆる角度から問題が提出された。天皇制の問題、外交の問題、国際共産主義の問題、日本思想史の問題、精神科学と自然科学の限界の問題、革命の問題、階級と民族の問題、道德教育の問題等、それらは皆現代日本につながる本質的な重要課題ばかりである。

或参加者はこのように豊富な体系を用意しながら、何故合宿という緩慢な方法で訴えているのか。何故もっと直接的に大衆啓蒙運動に乗りださないのか。曰蓮のごとく、松陰のごとく、イエスキリストのごとく、失敗をも省みない実践活動が、今こそ要求されるのではないか、と本部に迫る人もでて来る始末であった。

折から合宿の昂揚を象徴するかのように、驟雨が沛然と降りはじめ、大講堂で三々五々二時三時まで語りあかす人もでて来た。

## 合宿第三日 思想の流れをみつめて

— 社会主義と教育問題を中心に —

昨夜の豪雨に見舞われた春日山は、深山を思わすばかりにけぶっている。土も木々もしとどにぬれて、葉蔭になった露玉がキラキラ光って美しい。

限られた時間内に問題が次々と提出されて、友らは苦しい内心のたたかいと、新しい期待を交錯させながら、今日の行事を見守っている。今日の講義は日本労働者教育協会理事、国民会議準備会事務局長菊池紳隆講師によってはじめられた。講師は社会党右派社民系のイデオログで、その影響力も党内に隠然たるものがあると聞く。氏は労働運動、政治運動の豊富な体験の中から、大胆明解に論旨を進められた。次に「日本における社会主義の運命」と題する講義内容を掲げる。

社会主義とは何か

「社会主義」という言葉は、かなり広範囲に解釈されております。学者たちの研究でも百九十に分ける人もあれば、二百数十に分ける人もあります。従って「社会主義とは

何か」が非常に問題があるかと考えます。「社会主義とは何か」と問われた場合、明確に答えられる人は、実はおらないのです。学者たちと会談しまして社会主義の問題に触れたときには、必ずどういふ社会主義かという前提が必要になります。

しかし現在一般に理解されている社会主義というものは、第一に「私有財産制度の排除」ということがあります。マルクスはじめエンゲルスあるいはカウツキー、ベルンシュタインも私有財産制排除に触れておりますし、レーニン、スターリンに至ってはこの大御所であります。第二には個人主義や自由主義に対立するものだということが、さらに「搾取」といふ社会悪も社会主義によつて排除くんだというふうに考えられております。とりまゝとめて申しますならば、社会主義というものは人類の不

### スポット

## 資本主義という迷信

現代資本主義に対立する概念として社会主義が考えられ、その社会主義の定義は二百程あると聞く。それでは社会主義のテーゼと考えられる現実の社会体制を資本主義と呼称することが果して正しいかどうか。乏しい筆者の経済学説史的知識をひけらかしてみても、十五世紀から約三百年間欧州を支配した経済政策、経済思想を総称してアダムスミスは、マーカンティリズム、マーカントイルシステム、コモーションシステムというように呼称しているし、或時は「国家致富についての経済学の体系」ともいつている。更にフランスに起つた重農主義学派は、この制度の妙味に驚嘆して、「神の作つた自



幸を社会悪に求めている。資本主義社会の私有財産制度を変革することなくしては、この社会悪を排除することはできない。貧富の懸隔や抑圧、搾取のない生産に充ちた平等の社会を目的としている。この目的の故に、被圧迫者など無産大衆を解放する。このようになるかと思いません。

社会主義の言葉は一八二七年にロンドンの労働組合機関誌にはじめて使われました。現実に社会運動や労働運動に適用されたのは一八三六年で、マンチェスターの労働会議に正式に取上げられました。社会主義は論理的にみますと、はじめは「社会の理想」でしたが、次にどうして社会の理想を樹立していくか、つまり変革と革命の問題に移り、次に誰が変革や革命をやるかという主体性の問題が出て来た。この三つの柱によって社会主義

然的秩序」と名づけている。更にオーストリア学派は需給関係からとらえた「均衡理論」を展開し、歴史学派のゴットルは「生命構成体」としてとらえている。シュパンは重農主義的な感じ方をしてこの制度を「個人の思考からでたものではなく、誰か特定の理論建設者があつたものでもなくて、時代そのものから成長したもの」といって特定の名称をつけることさえも慎んでいる。オイケンも又それと共に鳴るかのように「それは実践上の体系であつて、経済学の理論的ないし科学的体系ではない」といっている。これらは皆動いている社会を定義化し概念化することによって、却って経済の生命力を殺す結果になることを心得た発言とうけとれよう。それを心得てイギリスのクロスランドは「福祉国家でも、複合国家でも、進歩的資本主義でも、ファイアデ

が立っているとも言いうるのです。

結局社会変革の方向を見極めるには、貧窮問題をどうするか、どのように解決していくかという所から経済の分析、経済の計画、新しい経済社会の形態を考えるという姿が各国の社会主義者によって検討され、一八六七年に至ってマルクスによって集大成されたといつて過言ではないのであります。

これが一般に理解されている社会主義と申してよいかと考えますが、社会主義はそれだけであつたかどうか。現在国内の売文的学者やインテリの説く社会主義とは、いずれもマルクスのワク外に出るものではありません。マルクス流の社会主義は、搾取と私有財産が根本となるから経済制度の変革を考え、生産手段の領有いかんを論ず

イル主義でも、国家資本主義でも、社会主義の第一段階でも何でもいいが、私として示唆し得る一番よい名前はステータリズム（国家統制主義）である」といつている。このように現代の社会制度を正確に表現しようとして、色々な言い方が既に現代のアメリカや日本にもある。曰く修正資本主義、進歩的資本主義、科学的資本主義、人民資本主義、共栄資本主義、労働化資本主義、協同（働）主義、公私混合経済、会社国家E・T・C

これをもつてしても、マルクス流の公式的資本主義論がいかに偏狭な一面性しかもたぬか、そして制度観にとらわれて資本主義か社会主義かを問題とすることが、如何に神話的迷信のとりこになつていゝかがわかるのである。（岡山・N）

るわけですが、日本に関する限り社会主義を論ずるものは誰が書いてもこの種のもです。

しかし現実社会主義を理想とし、これを実践している者は—真に社会主義思想を持っている者と私はこう申します—社会主義というものは人間性の解放である。個人の尊厳の尊重である。そして個人を全体の中に融合させていく。この融合によって人類全体を自然の制約から解放していこうという念願を抱いている。人間が個人としての人格の価値を実現するという意味の人間性の解放が目的である、と実践的な社会主義の指導者は考えております。従ってこれを達成するための基本的な人間活動を要求し、その手段として重要な物質的条件（経済）を充すための計画的な行動を社会主義といっております。

この所は重要であります。「その手段として重要な物質的条件」とあるのは、物質的条件以外の条件が、社会主義達成のために絶対に必須のものであることを、彼らは観念しております。この点が一般的に理解されている社会主義の中から抜けております。従って真実の社会主義者—思想と社会的行動と私生活が三身一体である社会主義者—は、社会主義という手段のために人間性の解放が絶対に犠牲に供されてはならない、と常に反省しておる。この点マルクス亜流の社会主義者にはほとんどゼロであります。何故ゼロであるか。彼らは社会主義は倫理的動機なしに、必然的に到来するといっておるからです。

経済的条件及びこれ以外の幾多の精神的な条件、心理的な条件を含めて平等、自由、博愛を具体化した社会

を、社会主義の立場から建設していこうという立場の社会主義があることを念頭に止めていただきたい。

### 日本における社会主義

日本の社会主義は一体どういふものであろうか。それは「資本主義は生成し、発展し、消滅するものである。」というように言い現わすことができます。赤松克麿の「日本社会運動史」や、荒畑寒村の同じく「日本社会運動史」を読めば解ります。ここで山川均の考えを述べてみましょう。山川は大正十一年の「方向転換論」の中で次のように言っております。

日本の無産階級運動の第一期は、少数の前衛が進むべき目標をはっきり見ることであった。そのため彼らは思想的に徹底し純化した。だが前衛は本隊の大衆を遙か後方に残して進出した。敵のために本隊から断ち切られる恐れがある。そこで第二期は、前衛が大衆の中に立ち帰り、大衆を運動の中に引入なければならない。

しかし山川の考えは、あくまでも議会主義を否定する立場が看取され、政治的な直接行動を謳歌していた。だから、デモクラシー確立の望



みない支配階級の政治分野を前提とし、組織された労働者と農民を前衛と規定し、この前衛を中核として全無産階級を一切のブルジョアの、小ブルジョアの政党から独立した政治勢力に結集しなければならんと言ひ、さながら全無産階級を打って一丸とした政治勢力を結集できる基礎的条件が備わっているかのように空想してゐた。この山川イズムは今日でも社会主義の底流として根強く残っている。戦後の日本社会党左派は山川イズムによつて指導されているといつても過言ではありません。

これに対し、福本和夫が大正十四年と十五年に「山川の方法論は修正主義で、社会主義でない。」と反論して福本イズム時代を打出した。グループ内の主導権はやがて福本が握り、山川は共産党から脱落、労働党を結成する動きを示した。結局山川イズムが出るまでは、日本の社会主義は共産主義と変る所がなかつた。ただ共産革命の前に社会主義革命が起るんだという段階論が出たにすぎなかつた。

次に戦後の日本社会党をめぐる社会主義論争に触れてみたい。日本社会党は国民勤労階級の結合体といふ大きな建前で再建された。中核体は、キリスト教社会主義の人たちであります。

当時の綱領は

- 一、国民勤労階級の結合体として、国民の政治的自由を獲得し、民主主義体制の確立を期す。
- 一、資本主義を排し、社会主義を断行し、国民生活の安定を期す。

一、軍国主義的思想と行動に反対し、世界各国民の協力による恒久的平和の実現を期す。

とあり、政治的には民主主義、経済政策は社会主義、国際的には平和主義の三つの柱で発足しました。しかし社会主義とは何なのかというような論議は重ねなかった。従って片山内閣当時から左派社会党が台頭し、左右両派に分れ、昭和二十四年春の党大会では、運動方針をめぐって森戸・稲村論争が起きた、これは今日でも大きなウェイトを占めている。その前に社会党のグループを分析してみます。

共産党の暴力革命方式は否定するが、必要に応じて人民戦線を提唱して共産党と共闘する。この立場の旧労働派の山川均、大山郁夫、荒畑寒村、鈴木茂三郎。社会民主主義、キリスト教社会主義、さらに人格社会主義——これは耳新しい用語ですが——のいわゆる社会民衆党系の安部磯雄、鈴木文治、松岡駒吉、片山哲、西尾末広ら。また労働派と社民党の中間の日労グループの河上丈太郎、河野密、三宅正一らがあり、持っている社会主義がみな違っている。自民党の派閥は人のつながりによる親分子分の派閥だが、社会党の派閥は理念の違う派閥です。これに対する一般の理解は極めてあいまいです。社民系の人たちは立党宣言の中に「社会主義の実現は、国民個人が個性の完成に目覚め、相互に人格を尊重し、社会の連帯性を自覚して、教養ゆたかな人間となることが根本要件である。」とうたい込んだ。

そこで森戸・稲村論争に移りますが、稲村は科学的社会主義の立場で（マルクス主義の上に立つとの意味）

革命のプログラムについて、平和革命方式をとる。しかし議会で圧倒的多数をとった時にどうするか、稲村は社会主義政策を議会権力で実施するが、もしこの政策に反抗する者があれば弾圧する。裏を返せば反対党の立場を認めないというわけです。これに対し森戸案では、平和革命で議会権力を握るけれども、反対党の存在を認め、少数意見を尊重するという。さらに平和革命についても森戸案は「社会の矛盾は一つ一つ丹念に克服して変革を達成する。」ものだが、稲村は「部分を修正しても社会革命にならない。一挙に解決する状態がいつかはある。」と主張した。社会党が天下をとったからといって、これは社会主義政権ではない、社会革命をやつて初めて社会主義政権となるという建前です。森戸さんはそれは共産党の立場であつて容れるわけにはいかぬというわけです。水と油のような違いでした。

稲村論では共産党に対して「一線を画す」といつておる。一線を画すということは対立点がないことです。現在の社会党が同じことを言っているのは、共産党とは兄弟の間柄だ、あるいは夫と妻の間柄であつて、世間態が悪いので手をつながないのだというに過ぎない。森戸理論では、社会主義政党内は共産主義と対決し、克服していくという考え方に立っている。ここにやはり、日本社会党の宿命的な問題点があるうと考えます。

日本社会党はサンフランシスコ条約を契機に分裂した。日本無産党史あるいは戦後の日本社会党史をみます

と、分裂はしばしば行われていますが、政策の面で分裂したことはこれが初めてです。この分裂によって社会党の中に新しい思想が発生しました。それは社会党は平和三原則を立て (一)全面講和(二)中立の堅持 (三)軍事基地反対を外交方針としたけれども、国際情勢は、これを現実化するためには余りにも隔りがありすぎる。民主系社会党右派はこの行動を是正しようとしていた。たまたまドイツのフランクフルトで行われた第一回社会主義インターが、平和のための斗争における社会主義者の世界活動と題して、一つの決議を行った。その中で、

「過去は、自由な民主主義が武装なくしては、全体主義の脅威に対して、自己を防衛できないことを示している」

とあります。これは大変な前提です。日本の社会主義者にとっては全く驚天動地といつてよい。さらに「コミンフォルムの政策は、自由な民主主義諸国をして、軍事的防衛に高い優先性を与えることを余儀なくさせた。」と、はっきり言い切っている。また「平和は武装なくしては確保されないが、しかし武装のみでは十分でない。完全雇用と高度の生活水準を目的とする建設的な社会主義的政策の実現が必要である。」とも強調している。この一節は社会主義陣営だけでなく、日本の保守陣営も十分に考慮しなければならぬと考えます。ともかくこのインターに参加した鈴木茂三郎は「にわかには賛成はできません。」といつて、帰つて来た。



このように平和三原則を根底から覆すような新しい条件が生れて来た。社会党右派は、自分たちの見解が正しかったことに確信を持ちました。そして自らを主張して、万一これが分裂になっても国民大衆から支持されるであろうとの確信を持ったわけです。またこのインターで民主社会主義の原理に関する宣言が出され、これが綱領になった。これが社民系の唱えていた社会主義—人格社会主義—とマッチするものであったことから、西尾末広グループがこれを受入れた。ついで故三輪寿壯の提唱で民主社会主義連盟ができた、私も当時はこれに参画いたしました。

このような背景があつて社会党が分裂しましたが、マスコミの一般情勢は、イデオロギーによる分裂を攻撃して「社会党は統一しろ。分裂はけしからん。派閥を解消せよ。」と言つた。いわばマスコミの暴力は、国民に正しい社会主義を与えようとしないう形が出て来ておるのだ。「ライスカレーか、カレーライスの相異だ。」といつておる。しかし実は根本的な違いで、十分に見きわめなければならぬ点です。

マルキシズムと民主社会主義の大きな差は、どこにあるか。マルクスにおいては、

「人間の社会的な発展も、一つの自然的な過程である。それは人間の意識や意志から独立している。そして目的的概念を決して人間には許さない。また個人は、主観的にいかに周囲の事情を超越しようとしても、社会的には、単なる被造物にすぎない。因果的連鎖に基く必然が一切を貫徹するんだ。という因果論を唱え、この

故に資本集中法則、中小企業廃滅法則、労働者窮乏化法則、恐慌法則などの必然的な単一な法則に基いて世の中は動いていくんだ。」

というようなことを主張した。そこで日本社会党の経済政策とその背景にあるものについては「長期経済計画―その具体化について」を読んで判断していただき、また左派綱領について申し上げる時間的余裕もないので結論を急ぐことにします。

### 日本における社会主義の運命

「では日本の社会主義はどうなっていくのだろう。」ということについては考えてみたい。その前に、今述べたマルクス流の考え方とも対比する意味で、「近代歴史の傾向をどうみるか。」を考察する必要があります。

近代史は個人の自由の解放を理想として進んで来た。自由主義的資本主義として発展したわけです。この過程で、個人の自由と平等を要求する階級の抵抗が増大し、それが次第に資本主義自体が自らの矛盾を修正するという形で、資本主義自体に変革が起きて来た。そしてこの変革の方向性は、社会化という形で移行して来た」と判断しています。

資本主義の矛盾によって、マルクス流に言うならば、プロレタリア階級のレジスタンスが起きた。その抵抗

が拡大したため、資本主義陣営では「これはいかん。」といって、この部分は手直しするとの修正が行われた。つまり「チック・アンド・バランス」が行われて来た。その方向は社会化に向っている。これはアメリカの経済政策をみればはっきりします。アメリカでもイギリス労働党の政策と方向性において大差ない。つまり社会主義政策と大差ない方向で、アメリカの資本主義は移行している。

更に西欧社会では資本主義の急速な社会的変貌と、大衆の勃興がある。社会主義社会の拡大と、超国家的イデオロギーが住んでいる。それに自由、共産両世界の対立から、民族国家の絶対主権というワクが崩壊しつつある。これは現在の中近東の姿をみればわかる。すでに君主制に対する圧力が非常に強くなり、新進諸国においては、君主制―絶対主権―のワク、国家主義のワク、つまり明治初年に日本にも確立された国家主義というもの、国際的に否定されているということができる。さらにアジア、アフリカ地域などの植民地社会における、民族革命の普遍化、未開発地域のレベル・アップという状況が起って来た。またオートメーション（原子力利用に代表される新科学）が持ち上り、第三の産業革命が現に行われている。十九世紀の頭では考えられない。さらに国際的経済、社会、文化、技術の連帯性が、マスコミの発達によって生活常識となって平均化されておる。

違った立場からみて、人間の恣意が放任された古典的な自由民主主義、利益集団と階級の対立する集団民主

主義から、人々が社会的、連帶的に共存する共同民主主義へ發達して來ている。企業の自由經濟主義から人間の生活と生産の社会性に立って、万人の雇用と社会福祉の均等化を実現するための、社会公益的な計画經濟に進みつつある。社会的には個人的、集团的弱肉強食と専制に相對して連帶共同の社会に向っている。政治的にみると、資本主義の番犬的国家の姿や集權主義の官僚国家から大衆のための奉仕国家の形態に進んでいる。軍事的には集團保障へ向っております。さらに核兵器の國際管理の方向に進んで簡単に戰爭を起し得ない狀況が生れつつある。

國際的には、ナシヨナリズムの対立斗争から、自主的な協同による國家連合一統一と均衡化の方向へと、國際情勢が意欲的に指向されている。祖国日本も決してこのような歴史の推移の埒外に置かれぬ。

そこで日本の社会主義はどうなるかに歸ります。現在日本の社会風潮は徹底した唯物主義であり、他をかえりみない利己主義にまで達している。社会的には非協力、非共存の姿です。日教組や国鉄、全通などの労働運動をみても、はつきりと言ひ切つてよい。現象的には、日本には民族の存在はなく、國家の存在がありません。國民階層の中に唯物主義が徹底したのです。もしそうならば、日本ではマルキシズムが圧倒的勝利を収めるでしょう。

だが、民族を知り、民族觀念が階級を乗り越えるものだとの立場をとっている者もあり、絶対的真理はあり

得ないにしても、それに近い科学的真理というものは、階級、民族を越えるものであるということを理解する社会主義者もおり、その勢力もバカにしたものではない。現実を冷徹に把握して、民族あるいは国家の正しい発展に努力する人々はやはりおる。これらの社会主義者は口を揃えて

「我々の考えには前提がある。もし日本資本主義というものが、チェック・アンド・バランスの形で協力的な福祉国家、連帯性を持った国家—協同国家—という方向をたどるのであったならば、必ずマルキシズムは滅びる。もしそうでなかったならば、日本は必ず共産圏の一国として隷属せしめられる時代が到来する。」  
と言っております。どんなに国粹主義者が、民族の何のと言ってみても、到底そういう形のものとは出来得ない。と考えておる。

唯物主義の社会風潮の現状では、日本の社会主義は、現状のままで行くならば、必ずマルクス主義に立った社会革命を惹き起す団体になります。戦略戦術論から低姿勢をとって国民を瞞着し、知らぬ間にある特定の勢力を利用して、これがやがて違法行為をもって革命を行い得るといふ十分な条件がある。一方日本資本主義の傾向あるいは反共勢力の傾向が、むしろ逆に、このマルキシズムによる社会主義の傾向を助長している条件から、この可能性は十分ある。従って意識的にこれらの動きの中にとび込み、内部分裂を起して、そういう方向に持っていかないように努力しているグループもあります。繰返しますが、現状のような日本資本主義の動

向、現状のような保守党の経済政策をもってしては必ず日本に社会革命をもたらします。共産圏の一国として日本が隷屬せしめられる時期が必ず到来すると断ぜざるを得ません。しかしこれは必然ではない、これを避けるため多数の人たちが努力していることを理解していただきたい。

講義を終つて質問にうつつた。社会主義への疑問を中心に鋭い質問が陸続と提出された。代表的と思われるもののみを講師との一問一答の形式で紹介する。

問、今後の社会党は、左右両派合同の現状をどう持つていくか。社会党自身が容共勢力を伸張せしめている責任を負うべきではないか。また大衆政党としての限界はどこにあるか。

答、日本社会党の統一は、日本民族の歴史にとって明らかにマイナスの一ページであるばかりでなく、唯物論に対抗する者にとって汚辱の歴史である。最後まで統一に反対したグループもあった。このグループは「階級論

#### スポット

#### 民主社会主義者開眼せよ

マルクス主義に立脚する共産主義或いは社会民主主義と、民主社会主義との間に大きな相違のあることは概念的に知っていた。しかし今度の話を聞いて、こんなにも根本的に異っているものかと、一種の驚きをもって痛感させられた。凡そ民主社会主義とはイズムの名を冠せらるべきものな

に強く反対している。階級論は民族を無視して、階級至上主義の立場をとっている。そして階級の純経済学的理解が我々には納得できない。また権力というものが、階級が他の階級を圧迫する暴力という形で理解されている。権力は社会秩序、生産の規制にとっては必須条件である。従って国家が階級抑圧の機関であるというボケた考えなどは持たない。むしろ国家の主導権を握っている者の、人間的資質そのものを問題にする。マスコミの一切が社会党統一すべしとの論をまいたので、これに引きずられて統一したという形になった。階級論に反対するグループは、大きく分裂するために闘う場を選ぶということでは社会党統一に踏切ったと思う。

社会党は伸びなやんでいる。この原因は、大衆が意識に目覚めないからだ。社会党はいつているが、とんでも

のかどうか、それすらも疑問にさえなってきた。これは決して軽蔑から言うのではない。むしろそのリアルな考え方、人生の自然に順応しようとする指向に共鳴を感じるからである。唯物史観が説くように、一つの生産体制が成熟すれば自然史的必然をもって崩壊変革され、所有や制度はもとより人間の頭脳の中までも一切がきり換えられ、一色に塗りつぶされるといふような機械的な観方に抵抗を感じるからである。こんな動きに対しては、僕達の理想主義は断然反撥せざるを得ない。

けれど敢て言わせてもらうなら尚二・三の疑問がある。国民的立場は全面的に容認すると言われる。しかし保守派に対しては仮借なく対決するとも言われたように思う——これが僕の誤解であれば

ない自惚れた。国民大衆は、無意識にせよ自からの安定を保つ唯一最善の途を実は選んでいる。これが人間集団なのだ。社会党の性格が嫌われている。このため社会党は益々エキサイトされて来るだろう。左翼理論が党内に勢力を占め、右派は壊滅状態になっていく。その中で右派がどうレジスタンスするが、どう転換をはかるか、重大問題だと考える。社会党が容共勢力を伸している点については、そのまま保守政党に献上したい。何故ならば、経済分析の上に立つならば、社会党左派の論理が正しい。貧困を増大させていることは事実であり、搾取は実際にある。資本集中も事実だ。左派が容共的にならざるを得ない経済的、社会的諸条件が保守側から醸成されている。

問、容共の意味を……。

幸なのだが。一体保守派は国民には数えられてはならないものだろうか。現在の保守勢力が完璧だとは僕も思わない。しかし保守の精神そのものは僕等の本然的な祖国愛・文化伝統への欣慕にも通うもので、願わくば現在の保守派（仮にも国民の多数の支持を得ている）をよりよき方向への叱咤鞭撻してゆく思いやりがあってもよさそうなのだと思う。保守・革新の対決—これ程嫌な言葉はない。国民的立場とは決して生半可な妥協ではないが、少くとも相手に自分の感じからどぎついレットルを張り、抗争し合うことではなからうと思う。

社会党左派に対してはどうだろう。話を聞いてみると右社と保守派よりも右社と左社との距離の



答、マルクス主義の立場で共産主義社会を考えると  
いう意味になる。この面から第一段階の社会主義革命の  
以前に起きるものは、ケレンスキー内閣であると社会党  
左派は考えている。そこで容共的要素が多分に濃くなっ  
て来る。

問、社会党の「公有化」は果して可能か。また公有化  
にみられる官僚性や、労働者が自主性を失うことにどう  
対処するか、個人の願望はどうして満たされるか。

答、社会主義は日本の場合はつきりいって、マルクス  
主義と理解されているといつてよい。この点が国際的に  
みた場合、大きく違っている。マルクス主義の立場に  
よる公有化や国営は、官僚によって支配され、悪平等に  
なり、自由な人間の創造性が認められないことになる。  
しかし社会主義は、社会に正義を確立しようとする考え

方が大きいように感ぜられる。しかも左社とは同  
一の政党に属し、何やかや言われているけれども  
保守派とはわたり合っている。そこには僕等の知  
らない因縁や戦術的顧慮があるのだからけれど、  
左社のリーダーシップの下に社会党全体が引きず  
られている現状に鑑みて、これは一つはつきりし  
てもらいたい問題である。社会党政権は所謂「平  
和革命」により、合法的に達成されるかも知れぬ。  
しかしその後はどうなるだろう？当然に引きお  
こされる混乱に乗じて、いよいよ左傾・過激化を  
予想するのは僕一人ではないだろう。そうした予  
想される結果から逆算するならば、この革命の歯  
車の廻転を始めることに右社が協力していること  
になるのは必定、ゆゆしき責任があるのではなか

方である。正義とは何か。第一には合法性であり、第二は平等である。この意味から例えば薬を考えてみる。薬はバカげた広告料をかけているので高い。自由競争の経済機構の中では、人間の生命を保つ薬がこのようになっている。健康保持のために必要な薬は、権利を国がうけるとか「製薬公社」を作つて薬を安価に提供するといふ。公社制にして三分の二が広告料という経済のムダを排除すべきだと考える。ただ官僚主義をどう克服するかが残る。しかし現状において国営や公社制を採用していけば、おそらく官僚の壟断する所となつて、その成果は期待に反したものになるという結論を下さざるを得ない。やはり唯物論を捨てるような教育、啓蒙を経なければうまくいかない。

問、総評、日教組を動かすのは果してどうというグループ

ろうか。今は中共の働きかけが積極化しており、国内では統一戦線の妄動が世間を震盪させている。こうした状況に即応して、是非とも民主社会主義者の勇断と奮起を望みたいものである。

(鹿大一年Y生)

### スポット

イデオロギーが商業を  
否定した一例

ミシン、自動車等の販売、保険、住宅会社の勧誘員等、セールスマンの仕事には徹底した「勤務評定」が行われている。或る住宅会社のセールスマンの場合を例にあげてみよう。

詮考入社後三ヶ月は見習、その間責任契約

プであるか、また日教組と社会党の関連はどうかについて。

答、日教組の平垣派は、実は総評高野実のグループで、高野理論によると、労働組合はあくまでも前衛的な犠牲部隊ということになる。日教組は教師の倫理綱領で「教師は労働者である。」と断定しているが、これは打壊わざなければならぬ。さりとてこれを全労系にもって来ることは不可能だ。そこで総評の主流派が何とかして日教組を自分たちの方へ向けさせようという考えを抱いていた。

総評や日教組出身議員は、山川イズムが実際として、相当社会思想を制約し、現実の経済諸条件にマッチする革命理論であることをおそれている。そこで山川イズムを最も表面に打出して来る日教組を、そうでない日教組

口数を果して始めて正社員。正社員になれば二級、一級、主事補、主事と昇進の道は拓けて居るし固定給も支給され、歩合給の率もよい。然し各級に応じた責任契約口数が二ヶ月間に不足した時は文句なしに首と云うシステムだから正社員と雖も寸刻も安心は許されない、集金係もノルマで責められる、だから此の会社程新陳代謝の多い所も少く、新聞広告の社員募集の度数も恐らく全国一かも知れない。

このような性質の仕事に課せられた有無をいわずぬ搾取形態？は、戦慄するばかりの冷酷さをもっている。にもかかわらずこれらのシステムに対する敵しさが、日教組の勤評騒動のように社会問題化しないのは何故か。セールスマン達が組合組織をもたないからということもあるが、このノルマ制は充分客観性

にしようとした。でなければ総評の安泰は保てない。社会党も一時「勤評反対の意義について」というパンフレットを数十万まいだが、少しも世論を喚起しなかつた。

問、私たちが現実に考え、きかされている社会主義というものと、説明いただいた社会主義とはかなり違う。

むしろ先生は主義を超越したものを考えておられて、その内容を「社会主義」という名で説明されたような気がする。社会主義を立てている社会党、自由主義、資本主義を称えている保守党の問題を展開されて、そのもとで思想情勢の分析に入られた所に無理が生じたのではないか。保守的、社会主義的なもの他にも、そのどちらにも自分の心や志を属させないで、同じようなことを考える人間がかなり多数いるのが日本の現状ではないかと考える。

をもっていて、働く人に納得させる要素があるということもいえるのである。私も数ヶ月この仕事に没頭した経験をもつが、日本におけるこの世界の競争制度の合理性に舌をまかされた。この合理性は久しい間の経験の累積から自然に生れたもので、ソ連のノルマのようにゴスプランが机上できめたものではない。うまくやれば栄進の道は幾らでも聞かれる。それに没頭すればやり甲斐も生甲斐もでてくる。

それに比べてソ連では国家公務員によって配給が行われるのだからセールスマンはいない。その為に今も尚行列買がたえないというように、大変な配給不円滑をきたしている。競争制度を生すべき所に生さず、生すべきでない所にノルマ制を適用しているのがソ連経

日本人がイデオロギーの斗争と、表向き華々しい政策の羅列から飽き飽きして、日本人本来の自己卑下もしないし、高ぶりもしない人間性に戻っていく途を求めている状態であろうと考える。社会主義の立場をとって話す場合、現実的問題の解明に無理が生ずると思う。例えば公有化と官僚主義の問題であるが、公有的経済機構における官僚主義を否定する精神が今日の自由主義、資本主義の中にも展開できるとするならば、今日の自由主義資本主義なるものは、今日批判されているようなものとはまた違ったものになる可能性を持つことになる。また企業の自由という概念の中に、現実的な企業の自由から来る弊害の面が強調されて、企業が社会公有的な面に向っていく場合は、理想的な方向だけが強調される。要するに批判される対象については、欠点が多く扱われ、志

济政策といえるのではないか、計画できない作業内容にもノルマを適用してそれを実施させる。だから労働者のノルマに対する不満は大きい。しかし自由主義国の場合は、必要な所に有効なノルマ基準が自然に生れて来ている。だからノルマ制の適当でない仕事には最初から出来高払制はとりあげられていない。競争の要素をとり入れる所と、とり入れない所が自然の姿に於て現れながら、発展をはかってゆくのが、自由を尊ぶ国々の特長である。

この自由経済の特長を最もうまく活用して、経済発展に大きな成果をもたらしただが、西独のエルハルト経済相であろう。彼は「競争なくして経済の発展なし」といって、競争的秩序を全産業に生して「生産復興の奇

向される将来の形態に対しては、欠点が比較的想定されないという大きな問題があると感じた。

答、至極当然なことである。現在の社会党という前提に立って、その政策の解明をするということから、次元を一にしない問題が出て来たわけだ。私は人格社会主義を、社会党内の反社会党的要素として申し上げたが、果して社会主義という言葉を使って妥当なのかどうか。国民感情からすれば、社会主義は当初説明したような規定しかできない。私のいう所が、国民感情における社会主義あるいは学者のいう社会主義かといえ、そうではない。しかしこれを社会主義という用語で呼んでよいだけの条件は持っている。

結局、変革の主体性の問題であって、社会主義というものが、社会正義を打建てるとの意味でいわれた時代もあるし、今日でもそのカテゴリーでいっておる人もある。従って、主体性を労働者とか貧困階級をどうするか、あるいは人間の不幸をどうするかという問題から発しているために、社会主義という名をつけたのであつ

蹟」を実現した。このような競争制度に勇氣をもつて立ちむかう所に、民族の逞しさが生れてくる。社会保障制度の充実を云々するより前に、きびしい競争に耐える意欲が、国民の間に生れる時それがやがて民族の興隆をもたらす。それは福祉国家を目標とした英国と、競争国家を標榜した西独との興隆ぶりの相違点の中から云えることではあるまいか。

(岡山・杉本幸二)

て、これが現実に政党の立場として考えてみた場合、現状において社会主義といつたら労働者に媚態を呈する意味ではよいかもしれぬが、一般国民に呼びかける面においては大きなマイナスがあることを考えている。だから果して、一般的理解における社会主義ということで問題を採上げてよいかについては、私はそうでないと考えてる。

午後はお茶水女子大助教授勝部真長講師によってはじめられた。講師は最近の道德教育をめぐる一方の立役者であり、氏の編述になる教科書や著作によって、参加者にはなじみ深い方でもある。氏は夏休を利用して既に九州一円を講演旅行しておられ、手なれた手法でその蘊蓄を従横に傾けられた。次に「戦後意識の論理―現代教育刷新基本課題」と題する講義内容を掲げる。

### 教育勅語と教育基本法

文化の進むにつれまして法律と道德とは、はつきり分れてまいります。明治以前に於きましては、或る意味において我國の道德と法律とは未分化の状態である。古くは聖徳太子の十七条憲法というものを読んでみましてもこれは今日いうところの憲法ではございません。即ち法律のみではない。むしろ官吏の服務規律、官吏に対する道德的な訓戒と言つていいであります。むしろ

る道徳そのものと云つていい、或は宗教である。要するに道徳と法律とが分割されておらない。或は徳川時代におきましても御<sup>おきだめがき</sup>定書とか、或は制札、高札というものがございしますが、そう云うものも多分にこの道徳的なものと法律的なものが未分化の状態に置かれてある。然るに明治になりまして、ヨーロッパ系の、ローマゲルマン系の法思想というものはつきり学びまして憲法というものを打出して来た。この時に法律的なものと道徳的なものが分化されて一応考えられるという事になる訳であります。即ち明治憲法が生れて、それに対応する道徳としての教育勅語が登場して参ります。明治憲法は博文の考えのように前提に皇室崇拜の国民感情を強力に育成していく、という事が意図されていますから、勅語は当然それを狙っている。即ち教育勅語のねらいとしました中核は忠良なる臣民の育成というところにその眼目がある。それは明治憲法の国権中心主義と国の権利をあくまでも拡張する事によって、この日本国の独立を維持していくというねらいと正に対応するものでございます。これは今日の新憲法がその中心点を人権尊重、一人権中心というところにその狙を置いているのに対して、教育基本法第一条即ち教育の目的を論ずるところが、丁度人格の完成を目指すという狙をもっているのに対応するものであります。

独立国家形成に費した明治四十五年

一体、この明治の四十五年間を顧みますと、殆んど明治の全時代をあげて日本は独立国となる為に血みどろの努力をしてきたと言



つていいのであります。安政の仮条約に始るところの日本の不平等な条約、即ち治外法権というものを認めておるといふこと、もう一つは関税自主権（開関税と当時申したが）を我国が持たないと云う事、この二点におきまして日本は独立国とは言えない。従つてこの条約改正という事が、明治時代を通じて、国民の念願であつた訳であります。ところが治外法権の徹底に成功したのは明治三十三年であります。関税自主権の獲得に成功したのは明治四十四年であります。ですから大正の始めに中国革命の祖と言われた孫文が神戸に参りまして演説を致しました言葉の中に「数年前までは日本といえどもヨーロッパの一個の植民地であつた」といふ文句がございますのは正にその条約の不備を指しているのであります。つまり治外法権と開関税という二点に於て日本は独立国と見做されていなかつた。ヨーロッパの一個の植民地同然にみられていたといふ事であります。明治三十三年に治外法権の徹底に成功したといふ背景には明治二十七、八年に於ける日清戦争の勝利、その勝利の結果得られた賠償金二億テール、これをもとにして日本が銀本位制から金本位制に貨幣制度を変えていつた事と、それから明治二十七、八年頃までによく迎り着いた我国の軽工業の確立、紡績業などを中心とする軽工業の確立といふ経済的な実績が外国をして日本の条約改正を認めさせるに至つたといふ事、また明治四十四年の関税自主権の獲得もその前提として、明治三十七、八年の日露戦争の勝利と、この勝利を通じ

て得られたところの我國の重工業の確立とこの実績がものを言つてこの日本の条約改正がようやくそこで日の目を見たという、こういうことであらうと思ふのであります。

實際今日、日本が造船国として非常なトン数の船をつぎつぎと造つておりますが、そういう日本の造船業というものもこの日露戦争をきっかけとして飛躍的に増大したのであります。日本海海戦で使つた船はことごとく外国から買入れた船でありました。当時日本ではそれだけの軍艦を造る力はなかつたのであります。日露戦争の後に軍艦製造が興り、それに併つて普通の商船などを造る造船業というものが展開してまいりました。

いわばそういう惨憺たる努力の果てに明治四十五年を費して、日本は始めて独立国の地位を獲得した。そういう時代において国権中心、ナショナルリズムということが日本の動向を支配していたという事は歴史における必然でございます。今日アジア、アフリカの諸国、そうゆう後進諸国が独立国たらんとして激しいナショナルリズムに燃えているという事態を我國は半世紀早くすでに経験しておつたわけであります。ですから明治の初年、天賦人權とか自由民権論というものは非常に盛んでございました。けれども初期の人権論、民権論というものがございます。ものがしだいに国権論というものへ自然に吸収されていくというのが明治における思想史の情況であります。

## 民権論から国権論への発展

例えば福沢諭吉という人をとってみましても、その初期には大いに民権論を鼓舞する、これがこの時代の動向でございましたが、しかし良く考えてみると、一体日本人の一人一人の権利を拡張する、人間らしい生き方をすると言っても国全体が後進国であり植民地的であつては、どうしてその国民が人間らしい生活を営めるか。先ず国が全体として高まること、そしてヨーロッパの先進国と対等に並ぶところの地位にまで国が先ず高められなければならない。国が高まつてはじめてその国民一人一人の地位が高まる、という考えの中に人権論、民権論は屈伏してゆくのであります。福沢諭吉は明治二十七、八年が近づくに從いまして次第に国権論に傾きます。或は民権運動の斗将と言われました大井憲太郎という人物も晩年には朝鮮に事を起して日本の国権を拡張するという考え方に賛同してまいります。そういうふうにして人権論が或は国権論の中に吸収されてゆく。

大正、昭和を通じてみられるデモクラシーからナシヨナリズムへ

ところが大正に入りまして再び吉野作造等をリーダーとするところの民本主義、デモクラシーという考え方が台頭してまいりまして、一時国権論の中に預けておきました人権民権というものをここに掘り起して来るというデモクラシーの運動が、大正年間にみなぎって来たのであります。政党政治が活潑になったのもその頃であります。一方に明治憲法の中

に秘んでいましたところの絶対的な要素、これがこのデモクラシー思想に対抗して興ってまいります。そうして、そういう人権論、民権論の方向をチェック致しまして、再び拡大された形で国権論、ナショナリズムというものを再生産して行く、この動向が今次の大戦まで展開して来た、こう見る事が出来るのではないかと思ひます。

### 敗戦後の人権尊重主義

そして、敗戦後外からインポーズされた形ではございますが、日本の民衆の中に秘められていました人権民権回復の願がはつきりした形で新憲法の中で姿を表わして来る。丁度世界の潮流はあたかも世界人権宣言というものを生み出して来るという時期にマツチして、ここに人権中心の考え方が浮んでまいった訳であります。明治以来の人権拡張、天賦人権の願というものがこの新憲法の中に始めて場所を占めて来た。そういうところに新憲法の一つの位置づけが可能であると思われれます。

### 民主主義のルールを形成するもの

そこで、一体民主主義とは何であるか、これは実に色々な定義が可能であつて、これ位雑多な思想を含む言葉は少ないと思われる位であります。仮にジェファーンソンの有名な言葉「民主主義とは権力に対するジェラシイを忘れない事である」、ここでジェラシイというのは一般には嫉妬とかやきもちと訳されますが、字引を引いてみますと第一の意味は警戒心という事であります。即ち民主主義とは政治権力に対する警戒心を失わないことである。いつも警戒心を持

つことである。これを仮に民主主義の一つの規定として使いますならば、政治権力、政府権力が何事か打出して来るならば常にそれに対して警戒心を持つこと、一度疑いの眼を持って腹をさぐるという事は民主主義の根本ルールであると云わなければならぬ。けれどもまた民主主義政治というものは根本においてはコムプロマイズである。妥協である。妥協を知らない政治というものはあり得ない。少なくとも平和的な方式、漸進的な方式をとるならば常に妥協というものが政治の根本である。もし政治の方式としてソ連中共的な暴力革命の方式を取るといふならば、それは絶対斗争、無条件斗争というのでなければならぬでしょうが、若し暴力革命方式が不可能であるとするならば平和的方式以外に進む道がないとすれば常に政治は妥協を忘れてはならない。これが民主主義のルールである。

### 民主制下における政治と教育

更に民主主義における特長点を別の角度からあげるならば、教育は政治と丁度、車の両輪、鳥の翼の両翼の様な形をなしているといえよう。教育を通じて啓蒙活動することなしには政治が円滑に展開出来ないという性質を持つておるのであると思う。そこに今日、政治と教育とは密接に連関しておることがいえます。政治から教育を切りはなして、これを独立のものにするなどということは、民主主義においては考えられない。そういう意味で戦前と戦後を比べてみましても、今日ほど教育が大きな社会のウェイトを占めている時はないと言つていいと思います。例えば文部大

臣一つをとりましても、戦前は内閣が作られますときに文部大臣というものは伴食大臣、文部大臣の椅子をあてられると当人は悲観したものであります。むしろあまり光榮ではなかったけれども今日は組閣にあたりまして外務、大藏次に文部と、大物を据えるというのが常識になって来ている。そういうふうには文部というものが、大きなウェイトを占めるという事は一方に日教組があるからでもありませんが、しかし単に日教組がさわぐだけではない。やはり民主的な政治をやろうとすればどうしても教育にウェイトを置かざるを得ないという大きな制約があるからであると思ひます。そういうふうはこの民主主義というものは教育にたよるところが大きい。従つて教育に政治的な動向が著しく反映してまいるということも、これもさけることが出来ない。特にこの同じ教育の中でも算数とか国語とか理科とか音楽ということならば政治からかなり距離をおくことが出来るのであります。社会科や道徳のことは法律、政治と対応するところのパラレルな関係にございますので、どうしてもここに道徳教育を論じますと、政治の問題が介入してくるのであります。

### 教育勅語制定の裏面にあるもの

一体、教育勅語を作りますとき前提になりましたものは、先程申し上げました様に天皇崇拜の国民感情の育成と、そうすることから出て来る忠良なる臣民ということが狙でございました。その時、この教育勅語の最初の草案を依託された人に中村敬宇という学者がおります。ミルの自由論などを訳した人でありまして、私の勤めておりますお茶水大学の前身、東京

女子高等師範学校の初代の校長をつとめた人物でありますが、この中村敬宇が書きました教育勅語の第一草案におきましては、天皇というような形ではなくて、むしろ天の崇拜、日本の道徳の根源に天をもつて来る。儒教の天でありますと同時にキリスト教で言うところのゴッドをも吸収出来る様な天の崇拜ということを出したのであります。ところがこれは当時の文部当局並びに内閣のるところとならなかった。そこで中村私案は教育勅語草案から脱落していくのであります。後に教育勅語の原文が出来上りましたときに再び中村のところにもつていって感想を求めた時に「結構です、何も言うことはありません」と言つて敬宇はもう何もタッチしなかつたのであります。天皇をかつき出すよりも、そういつたもつと大きな絶対者・天というような考えを打出して来るところに、実は当時の一方の考え方があつたのであります。即ち天というのは福沢諭吉が平等ということを言いますときに「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり」というふうになんか天という絶対者を立てることによつて人と人との平等という事、相対的な人間対人間の平等の上に天という絶対者をおく。或は西郷南州が「敬天愛人」という、天を敬い人を愛せよ、この場合も人を愛するという事、相対的、有限的な皆んな欠陥のあるところの人間を愛するという事は、その前提に天を敬うという形で絶対者というものをつかんでこなければ人間を愛するというエネルギーが出て来ない。或は人を相手にせず天を相手にせよという、人間の問題の究極においては人対人でありますけれども、その人ばかりを見ているとついに欠点だらけの

有限な人間対人間の争いというものになって来る。それを救うところのものは天を相手にするという形で絶対者にかえって行く、こういう考え方があつた訳であります。或は熊本の横井小楠も天という事を考え、天論という本を書こうとしておつたのであります。ついに果しませんでしたけれども、小楠が沼山津の塾を出まして、越前の松平春嶽にめされましたときに詠んだ詩がございます。「この道ふところのある三十年、公に向つてはじめて天を談ず」という詩でありますが、三十年来考えていたところの天の形而上学、これを実行にうつさんとするのが横井の思想である。横井は後に明治二年でしたか一月五日京都で暗殺されました。暗殺された理由というのは当時非常に小楠は進歩思想であるといわれたからであります。つまり天皇を廃して共和政治、アメリカの共和主義というものを日本に敷こうとする考えがあるというふうに見られて、即ちこの進歩思想家の小楠は暗殺されたのであります。しかしながらそう言われる根拠は確かにある。今日も小楠の書いた詩文を見てみますと天の形而上学からしておのずから共和政治、つまり民主主義というものの根本を擱んでいる。人間平等の思想というものを擱んでいる。彼はワシントンを非常に尊敬致しました。もちろん英語を読めた訳ではありませんから、人の話を聞いたり翻譯を見たりしての理解でありましょうが、それでもこのワシントンの考え方、アメリカの民主主義政治のあり方というものを非常に深く理解致しております。彼には碧眼紅毛の聖人であるというふうにワシントンを読んだ詩がございます。小楠の息子の横井時雄が熊本の花岡山の盟約に



よって日本に於けるキリスト教のさきがけをなした。日本のキリスト教精神の出発点をなしたというのも偶然ではない。この天の思想は直に、またとつてもつて、キリスト教の精神に通じているところがあるといつてもいいくらいであります。しかし当時そういうふうな広範な天の思想というものをもつてくるという考え方が入れられなかった。これが実際政治としては天皇をかつぎ出す方が日本の国民国家統一の爲には近道であつたといふこともあるかと思ひますが、また一方には伊藤博文とか当時の政治家達に思想的な深さが足りなかつた。思想のわかる者は政治に深入り出来ず、政治を直接担当するものは思想の理解が足りなかつたといふ点に、或いは困難があつたのかとも今日想像されるのであります。いずれにしましてもそのような国民感情に定着したといふ事によつて、日本のその後の動向がかなり狭く限定されてきているといふことは考えなければならぬと思ふのであります。

### 道德教育のねらいはどこにあるか

それでは今度とりあげられた道德の理念はどこに仰いだらよいか。現在の所では「人間尊重の精神と、これに基く共同体の倫理」といふふうな共同体の倫理」といふことになつた。そこで人間尊重の精神といふのはわかるが、共同体の倫理といふのは何であるかといふと、新憲法の精神は或る意味で個人主義、人間の尊厳尊重といふことを何ものよりも優先す

る。個人の尊厳ということ優先的に扱うという意味で個人主義であります。けれども個人主義ということとは利己主義とは違う、エゴイズムではない。そこで個人主義がエゴイズムでない為にはそこに社会の協力、社会的連帯性という事を忘れてはならない。そういう社会の協力とか社会的連帯性を忘れないところの個人の尊重、これを人間尊重の精神とそれに基づく共同体の倫理というふうに表示して来ている訳であります。教育基本法でねらいとしているのは人格の完成という事であり、この人間尊重といった中には人権と人格とが共にはいつている、人権というのは現実にあるところのものです。これは法律的なことばですから憲法でうたっているのは人権という事でありまして人格じゃあない。人権というものは現にあるところの現実の概念でありますからこれは守るべきものである、生れた以上すべて人は人権をもっている。ところが人格というのは現にあるものじゃあない。これは未完成なもの、人格の完成を目指してというところをみると我々はまだ人格者じゃあない、未完成なものをもってこれからこれを完成していくというところの理想的な概念である。これからあるべきところのものが人格これは理想であります。そうしますとこの憲法では先ず全体よりも個人が優先しております。ところがこの望ましい人格というものに於ては個人が優先するとか社会が優先するとかいう、そういう問題じゃあなくなってくる。むしろ両者が一体になる、つまり社会や国のために尽すことは同時に自分の喜びであり、社会の為に自己をささげることが真に自己を実現するところであり、また自分のしたいことを

やっていることが同時に社会の為になると言った様な、社会と個人或は国家と個人というものが一体的に融合するところに真の意味の人格がある。ところが自分のしたい事をすればそれは社会の為にならず、社会や国の為にささげるとそれは自己を否定するといった様に、国家や社会と個人とが分裂してくるというのが現実であります。しかしながら理想的な人格というものはそういうものが一体になってくるというところに真の人間があります。あり方があると考えていいのじゃあないか。そこで人格の中心はこの善であります。善とは誠実と言ってもいい、まことですね。つまり人格とはそういう社会の連帯性、共同性というものと、個人の独立性、個性というものが合致したところにある訳であります。そしてその人格の根本に善がある。善とは結局よりよく生きるということでもあります。道徳というものはよりよく生きるということ、自分も他人も社会もよりよく生きるというこの「よりよく」という事がなければ道徳にならない。これが扇のかなめどいっていいのであります。

以上で講義を終り質問にうつった。質問は次々と提出された。菊池講師の場合のようにその一部を一問一答の形式で紹介する。

問 教育基本法をどう思うか。

答 一般的な人格の完成のみを強調した前文及び第一条に問題があるのではないか。成立当時の事情を記録の中から一寸紹介すれば、荒川氏は社会面の強調、犠牲奉仕の精神、宗教心の涵養がない点を示摘し、三島氏

は普遍的すぎて日本国としての特長がない点をついた。更には人格、個性、生活等の規定が曖昧である点をついた人もあった。しかし当時は沢田氏の「教育の目的を法律にとりあげるべきではない」との発言が主流を占めて、あのようなものになった。

ここで問題にしたいのは、ともすれば教育基本法を盾にとって斗争の用具に利用する日教組についてである。基本法は誰がみても「国民全体に対し責任を負う」ことがうたわれているにも拘らず、日教組倫理綱領は階級的立場をとっている。更に基本法は「特定の政党を支持し、又はこれに反対する為の政治教育その他政治的活動をしてはならない」とうたっているに拘らず、常に特定政党と結びつき、特定の偏狭イデオロギ―に狂信して、国民の期待を裏切っている点である。

問 教育と政治との関係はどうあるべきか。

答 民主政治に不可欠の要件として教育が考えられる。①アイルランド、ポルトガル、スペイン、パキスタンには国教があり ②ソ連、中共、東欧諸国にはマルクス・レーニン主義というイデオロギー教があり ③米、英、濠にはキリスト教があり ④ベルギー、フランスには宗教は勿論道徳教育もある。即ち各国共に政治の根柢に何らかの宗教教育、道徳教育がある。西欧の場合それがヒューマニズムということばで概括できるが、西欧ヒューマニズムの底には神がある。日本の場合果して西欧のように民主政治に不可欠の教育原理

があるか。それはないというより他ない。日本に民主政治が育たないのは、民主政治を成育せしむべき教育原理がないからである。この空白を埋めるものは何か。その条件として ①科学文明を育て ②日本の民主主義を開発しうる、という二つの条件を備えていなくてはならない。これを埋めるものとして「天」をもつて来ることはどうか。もしこの日本の空白をうめるものが生れれば、必ずや世界の空白をうめるものとなるであろう。

これに対し小柳陽太郎氏は次のような意見をのべた。

「天」というとどうも儒教あたりからの借物概念の臭みがある。日本人の感覚からは天に匹敵するものとして何を感じ取したか。教育勅語の方がやはり具体性があり、国民的心情にマッチしているように思う。しかも教育勅語は「古今に通じて謬らず、中外にほどこしてもとら」ざる本質的なものがある。こういう意味で教育勅語を再評価したい。

最後に小田村氏は

日本に宗教が果してなかったか。例えば神社を考えれば、宗教に代る雰囲気があるといえないだろうか。こういうものがあるから千年以上も続いて現代に厳存しているのではないか。日本人は元来天とか神とかの概念的思考をきらって、体験的直叙を尊んだのではないか。人間は欠点ばかりもった至らぬ動物だから、そ

こに天とか神とかいう絶対者をもって来ずに、自己の凡夫感に目覚めて共にやってゆこうという思考に立った。それが我々の祖先のムードを形成した系譜ではなかったか。例えばヒューマニズム一つとりあげてみても「平等」という論理的、概念的思考ではなく、「共に凡夫」として感受する。こういう体験的、告白的感じの方がより日本人的であったと思われる。だから天をもって来なかったから、日本の動向が狭く限定されたのではなくて、凡夫としての体験的自覚が足りなかったから、即ち「自惚れ」「自我」「英雄主義」等のバツコがあったから、この日本的ムードを分裂させて敗戦への道を歩むようになったのではないか。そういう思考の方がより一層日本にそぐうものであり現実的であると思われる。

とのべて、記紀万葉聖徳太子に根ざした教養的背景から日本的認識の一例を示して、講師の認識との相違点を明らかにした。午後に予定した講義が終ったのは、ひぐらし鳴く夕暮近くであった。

もやのたれこめた春日の樹林にひぐらしは鳴きつづけている。精神的緊張の鬱積した疲労感に、ひぐらしのおとないは緊張をときはこすかのようにひびいて来る。

思えばこの三日間ものの認識のし方をめぐって、きびしい理論的追求がくりかえされた。誰の顔にも疲労の色が濃く残って、血走った眼をしている人さえ見られるようになった。その時夜八時から大講堂に於てコンパがもたれた。出された品々は粗菜にすぎなかったが、共に歌う情意の世界は堰をきったように昂揚をもたらしした。コンパは合宿における新しい転機を与えた。民族主義か階級主義か、冷静な理論の世界で比較しても、はて知れぬ堂々めぐりをくりかえすだけであらう。このコンパで手を取りあって歌う香り高い日本の歌曲は、理論の世界をおし流してそこに新しい精神の誕生を促すのである。

「富士の山」「しろじにあかく」「夕やけ小焼」「美しき天然」「桜井のわかれ」「荒城の月」それらは皆しみとおるような民族の香気であった。祖先以来語りつぎうた

### ひぐらし―佐賀にて―百武礼之遺作

人影のたえし夕ぐれ森の中の小道急ぐにひぐらし鳴けり

高もやのたれこむる森をとよもして夕鳴く声のさびしかりけり

あなあわれ夏はすぎてもそのいのち終へむきはまでなきつとくらむ(昭和十七年)

われ続けた健康な民族のメロデーは、今全員の歌と踊りの中にそっくり再現されてゆく。

続いて加藤、林、宝辺氏らが立って「聞けわだつみの声」や「はるかなる山河に」にただよっている感傷があった人道主義ではなくて、祖国の運命と悠久の歴史に莞爾として殉じた信友江頭俊一の辞世歌とその作曲

しらぬ火のつくしの野辺にますらをがたてし誓のきゆる日あらめや

うつそみのいのちたゆともますらをのかなしきねがひよろず代までに

を紹介すれば、小田村氏は終戦直後福岡郊外油山中腹で、見事古式にのっとり割腹自刃した同信の烈士寺尾博之の遺歌

江頭兄の御墓に詣でて

さがりがてぬ思いにたゞづむおくつきの上を飛びつゝ勝鳥鳴く

うつしよにあへぬわれらがとこしへにともにあるべき世をし思ふも

うつそみのいのち捧げてとこしへに共に生きなむ時を待つなり

○



たほれたる友をなげかずいつの日か吾もたどり  
ゆく道とし思へば

を朗詠した。それらの雄渾なる青年ドラマは、記  
紀万葉や、維新の志士の歌心に通ずるすばらしい  
民族の讃歌である。厳肅の気ただよう中に場面は  
急転して軽妙なるどじょうすくいに変る。十日町  
小唄、佐渡おけさ等国土に根強く伝承されて来た  
民謡は素朴なる日本独特の情調である。

更に場面は反転して勇壮なる明治時代の軍歌に  
変る。「上村艦隊の歌」「勇敢なる水兵」「水師  
營の会見」「桜島」等々。

このようにして大合唱と民族舞踊のちもしだす  
総合演出はさながら交響樂的展開であった。

### スポット

#### 大正・昭和の貧困

日本にスメタナやドヴォルジャックやシベリウスに匹敵する、民族音楽の名に値する交響曲が生れないのは何故か。モチーフとなる資料は民族の行程にダイヤの如くくりばめられておりながら、それを楽曲の中に再生できないのは何故か。それは日本の作曲家に健康な民族精神そのものがなかったからではないか。日本の古典に相続されて来た日本文化の遺法を、国民的综合感情として把握出来なかったからではないか。民族精神が最も昂揚するといわれる戦争中でさえも、うたわれた軍歌や流行歌は亡国的感傷のリズムに低迷していったではないか。このことは音楽に

最後に瀬上氏の音頭で全員手をつないで「四百  
余州をこぞる」にはじまる元冠を合唱して歴史の  
勝利感うづまくうちにコンパの幕をとちた。

しかし昂奮は昂奮をよんでねもやらず、大講堂  
で気焰をあげる人が終夜続いていたようであっ  
た。

ついでのみ言えることではない。大正昭和に  
おける文化万般は、その逞しさに於て世界一  
流国家に及ぶ所遠かったのではないか。私達  
の研究会が総合文化運動をめざしているとす  
るならば、その念願がいかに広汎な使命を担  
うものであるか。私はコンパの末席で一人感  
慨にふけたのである。(岡山・富岡)

## 合宿第四日 よろこびと前進のために

|| 高らかな詩的精神とともに ||

緊張と昂奮のあとに来るすがすがしい朝である。我々の間には皆んな一つにとけあった解脱感がただよっている。この一体感の中に小田村講師は登壇、「合宿最終日を迎えて―詩的精神興隆に期待するもの」と題して、やさしい中にも荘重な語調をたたえて次のように述べた。

### 本合宿の要点は何であったか

この四日間にわたって、みなさんは、いろいろのお話をきかれました。森先生には、日本の天皇の問題に触れられてご説明をいただき、また木下先生は、長い間の大陸関係の、ご生活体験から、そのご研究並びにご体験の成果を通じて、明治時代ことに明治初年から明治の中期に及んで、その頃の日本人、われわれの祖先である日本人、いわば現実的にはおじいさん達に当る層の人達のことについて、いろいろ当時の国情や、世界情勢によって、その人達の心のもち方と覇気、また持っていた夢などを、いろいろお話して下さったように思います。更に会員の方々は各専門分野にわたっ

て、研究を発表されましたが、あいにく時間の余裕が十分ないために、わずかに四人の方が代表的に短い時間を活用されて、かなり深い示唆のこもったお話しをして下さったようでございます。昨日は菊池先生、勝部先生が東京からお越し下さって、皆さんのご記憶も新たなお話がいろいろあったのでございます。

そこで私も合宿参加者は、今日で合宿を了え、この山を下りて、現実の世相に再びたち戻って、帰って行くことになります。しかし、そこでは、言論機関もあただしく交錯して動いておりますし、また学校にかえられる方にとっては、学校の教壇から教えられるいろいろの講義や交友関係がまちうけている。また職場にお帰りになる方にとっては、いかに理想的なことをここで知ったにしても、それを実生活に実現し実践していくことはむづかしいし、それはあまりにも縁遠いことで、とりつくしまのないものばかりであった、ということになったのでは、この合宿の意義も減じてしまうわけであります。そこで最終日の朝であるただいま、わづかの時間をいただいて、いささか纏めて、問題の要点についてお話し上げたいと思います。

日本の歴史を伝えな  
かった大人達の罪

そのことにふれるまえに、一言お話ししたいことがあります。私は昨日と一昨日の夜、第三班の学生班にまいりまして、いろいろお話しを伺い、またそのあとでこの全体会議でいろいろお話を伺いました。その折に一つ心深く感じたことがあります。それは、私どもの育った時代とちがって、終戦後の新教育と名づけられる時代に育たれた方々は、われわれ日本人の祖先のことについて

て、あまりにもお知りにならない。また、自分達が住んでおる日本のことがらについて、これはあまりにもご存じにならないことが多すぎる。われわれ大人達の責任であり、親が子に親の志を伝えるのは当然であり、それを子供が更に吸収して新しい別なものを吸収しながら生長していくのが人間生活、古今東西にわたって変りなき道であるに拘らず、我々自身の祖先のことを、若い人たちによく教えなかつた、或はまた、我々自身が持つておる感情を若い人々や幼い人達に伝えるのに、余りにも勇気がなかつた、あまりにも自信がなかつた。なんとという大人達、年輩者たちのおこたりと罪の大きいことか、を考えさせられたのであります。

天皇のことにしても、新憲法の第一条に明らかに国民の象徴として示されているにかかわらず、「象徴」のもつ意味すら、なんら研究されもしないし、考えられていないままである。これは年令をかさねている私ども、非常に大きな責任ではなからうか、先ず年長者がこの混沌とした時代を生み出した原因を自ら痛感し、そしてその痛感の責を再び具体的な努力によって補っていくところから出発しなければならぬ、それを怠つたまゝで若い世代とのむすびつきを求め、まぢがいである、とつよく思うのでございます。教育界の中のいろいろの混乱状況について、その原因を求め、あるべき姿に戻す為の努力も絶対に必要であります、それと共に、やはりかかる時代を現出せしめた原因のなかには「物の考え方」や或いは「学問の在り方」に問題の

あることを考え、学問そのものを、根本的に正していかなければ、その目的には到底到達しないのではないか、と考えてまいりたいとおもいます。

### 科学振興の根柢を培うもの

今日の日本は、一面においては、自然科学の進歩を大いに図らなければならない。いいかえれば、科学振興を行わなければならないのでありますが、科学の進歩の基には、人間の夢が秘められていることを忘れてはならないであります。人工衛星にして、も自然科学の進歩をそこまですすめた背後には、人間が月の世界に行ってみようという夢があつたと思いません。又今日までの人間が、かつて考え及ばないものをここで生み出そうとする、博大な人間精神の活動がそこに横たえられていると思えます。単なる数学的計算を積み重ねていけば、自然に月の世界にゆけるロケットが生れるのではなくして、その以前に、月の世界に行こうという意志と行こうとして心に描いた夢とが潜在しておると思えます。そこで、統一した精神や、夢というものが、どんなに人間生活に大切なものであるか、またそれなくしては人間生活の発展も開展もない、ということを考えてまいりたいとおもいます。言葉を変えて言えば、詩のないところ、統一した意志が培われていないところに、一体自然科学それ自体ですら進歩しうるか、あるいは開展しうるのであろうか、という問題があるとおもいます。

### 新しい論理主義の迷信

また昨日の講義にかなり強く出ました社会主義や保守主義その他の問題についてみましても、そこには人間の理智だけによつて問題を解決しようとする、いわば、

論理に頼りすぎておる傾向はないか。理論的にみて、社会主義がかくかくの如きものでなければならぬとか或はかくあつてほしいというのは、夢でございましょう。それは社会主義の名のもとにおける人生の夢であり希望である。しかし現実にある社会主義なり或は社会主義的斗争というものが、それとどうつながるのか、ということに、さらに心がそそがれなくてはならぬとおもいます。社会主義の中にも、大きな立派な夢が、たえられておりましょうし、また現実過程においても、それが練磨されていることとおもいます。しかし同時に、その夢や目標が、現実過程で没却し去られてしまうことがあれば、すでにそれらの夢や目的の故に尊いものであるはずの社会主義は、その値うちを失つてしまつていゝものかもしれないとおもいます。われわれの生を支えるものは、果して議論だけであろうか、論理だけであろうか、という問題に、我々は厳然と立ち向わなくてはならないのではないか、という問題が生れてきます。

今日、我々の前に存在するものは、諸々のことなつた思想並びに運動と共にこの論理主義や形式主義なるものも、人間性を劣等化するものとして注目しなければならないのではないか。それはまた現実的には官僚主

義となつたり独占主義となつたりして世の中をマイナスにするものではないか。もつと身近な身边で、これを見ますと、ゆたかな人間的情操が死に瀕せんとするほどの、空々しい人間生活をつくりだそうともしているように思うのでございます。今日のアメリカ、ソ連兩國のうごきをみても、国家の資源、経済力を活用して、自然科学の進歩をきりひらいていますが、そのバックボーンをみると、すでにアメリカ人にしてもソ連人にしても、またその他の各国民族にしても、民族の独立という大きな結合の夢と団結の喜びとをそだてており、さらにその団結と喜びの中から、世界のいずれの民族や国家にも負けないすばらしいものをこの世の中に生み出そう、と努力しております。かかる世界の現状に対して我々が日本人として今日の日本をみ、またかえりみるときに、我々の中に何が一番欠けているのか、に気がつくことであります。斗争にあけくれするばかりが能でもあるまいし、我々の中には古代から外国にも負けない諸民族にも負けない夢と詩とがたえられていたことも、おもいおこす必要がありましょう。今日の時代の欠陥はわれわれ日本人の日常生活のなから夢と詩に接する雰囲気有余りにも遠のいてしまっていること、それが日本人の人間生活をマイナスにしていること、などを考えてまいりたいとおもいます。

### 言葉のもつ生命力

夢と詩と申せば、それは余りにも空漠たるものであると一概にお思いになるかもしれませんが。しかし、人の子はこの世に生まれて親の慈愛に育まれながら成長してまいりま



す。三つの子供にはまだはつきりした意識はなくとも四つになり五つになりました時にはその子はその子なりに、この一生は何にしたいということをその子供の遊びの中から考えておりました。それが七つになると又変り八つになると又変つてまいります。その夢を追いながら人生をスタートしてきているのも人間の自然の情でございます。また、子供が話す話し言葉は誰の前をもはばかることなく表現しますので、それは誠に美しい、一つの詩でもございましょう。人生の汚れも知らず恥しさも知らず物を語る子供の言葉の中には、かえって大人達が論理を追求している世界よりも、もっとことだまのさきはう姿があるかもしれないとすら思うのでございます。ことばのなかに夢と詩がこめられて、人の心をうごかさずにはおかぬ魂もあるかも知れません。人間が成長していくに従つて何らかのとおり人間性を失い、美しいことばを毒々しいものにかえてしまいつつある現状にたいして、われわれは再び人間そのものが生れながらに持っていた雄大なる無限なる夢を、そこによみがえらせたいとおもいますし、世をあげて、そのような詩的精神が勃興してくることの重大さを考えたいと存じます。したがって我々のいとなむ国民文化研究会が歩もうとしておる道は、一つには論理主義を正しくふみわけることとともに、それに対する正確なる位置を与えること。論理的な学問のあり方は学問のすべではないということ、はつきり確認することから出発したいと存じます。従つて夢と詩と意志の統一とをはかるうとしない論理に対しては人間尊貴の立場から本能的の反撥を感じもし、また統一意志をもつたための人

間の努力が、うますたゆますつづけられねばならないことも心しいところでもあります。

魂の分裂促をしつ、  
ある現行学校教育

人間である以上われわれは統一意志をもたなきゃならない、という痛感をつよくもちたいとおもいます。勉強をすればする程、大学などの高級の学校へいけばいく程、

また小学校から中学、高校と、学校を重ねれば重ねる程人間意志が分裂していつているのが今日の教育の最も大きな弊風であります。それは論理主義にあまりにも走りすぎているものの一つの相である。一つの文化が分れて、国語、算術或は理科・数学、更に大学にいけば哲学・宗教・経済・政治とおのおのの学間が分れたままに教えられておるときは、これらを内心に統一するものが学間のなかでもっとも大切なものとなります。それはすべての学科の中になければならぬばかりか瞬時も教授たちや学生たちにとって忘れられてはいけなないのであります。しかし現実では大学の中に於ける講義は、知識の切り売りに過ぎない状況を呈しているのではないか。またそれを学ぶ学生達もその講義を、「はあ、これで経済がわかった」、「これで哲学がわかった」と言っておられる。けれども一体それは哲学であり政治であり経済であるのであろうか。それは人間の統一した意志をいよいよ統一するように、そしてそれが大きなものになるように育ててくれるものであろうか。或は人間の意志を理解できなくなるように分断するようにしている傾向はなからうか。更に言葉を換えて言えば自

分が学んだもの知ったものだけをもって唯今の社会は非常に劣等なものである、思想的に劣ったものであるというコンプレックスを植え付けてそこに一つの階級斗争意識をかりたてて現実に対する斗争が解決であるといいき方に私どもを誘導しているのではなからうかというような事もいろいろ考えるのでございます。で、こうした現状に立たされておる一日本人としての自覚をどう持ったらよろしいだろうか、それに対する大きな展開或は大きな努力が積み重ねられていくときに日本の学校も学問も社会も活気にあふれ、そこに大きな人間的ながりと同胞感、或は日本人としてのお互に心の底から信じ合う道が開かれていくのではないのでしょうか。そして、それが大きな自然界に立ち向ったとき、立遅れた日本の自然科学界を最高水準に引上げる大きな道の一つでもございましょう。詩のない所には何も育たない。このような意味から明治天皇の御歌を考えてみました。

### 明治天皇の博大なる詩的精神

歌をよまれ、あくまで詩的精神を追求しながら進まれた明治天皇のあの雄大な政治的精神、博愛的な真心、また国民をいつくしまれるお心、外国の使節に対しても厳然と立ち向われる威厳ある自信を学びとりたい、このような威力は明治天皇の詩的精神と夢に満ちた大きな人間の感覚から培れておったことを知るよすがと致しまして、お手元に若干の御歌をお配り致しました。その御製の解説というような意味でいささかでも足りない合宿の時間の中に、大和言葉の調べ

に触れたいと思うのでございます。我々国民が持つておる大和言葉、その言葉を通じてのみ、私どもは生きております。その言葉を余りにも無駄にしておりはしないか。言葉には魂がかよつておるに拘らず、言葉の魂を知る道を学ばないで、言葉のつながり方だけ、言葉の組合せ方だけを学んで、それをいじくつておるのが今日の日本の文化の状況ではなからうか。

言葉には言葉の魂が宿り、また言葉には人の心を打つものがございます。言葉の中に魂を伝え、そこに日本の国が伝承されて来たものでございます。

### 天皇のことば観

お手元に差上げた御製「歌」という六首がございます。それからまた「詞」と題した御製がござります。

### 歌

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにゝ心をなくさめてまし

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき

### 歌

おもふことうちつけにいふ幼児の言葉はやがて歌にぞありける

天地もうごかすといふことのはのまことの道は誰かするらむ  
ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

詞

ききし子はいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを

をりにふれて

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

大体「歌」ということについてのお歌でございしますが、「ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ」とおっしゃったのは明治天皇が和歌というものをいろいろの趣芸をやる、趣味をやるという意味ではないのだ。→ことのはのまことのみち」なので、「いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道」だと明らかにされている。三十七文字のことばに意志をつたえ情緒を表わしたのは、日本の国が始まっ

て以来神代から伝わって来た一つの具体的な道である。具体的の事実でもある。そこに日本人の長い歴史が移り変つておつてもこの「千早ぶる神代ながらの敷島の道」というのは現実に残っている、こうおっしゃつたのでございます。それは昨日もお話に出ておりました一番古い日本の書物といわれる古事記の中にもこの三十七字の歌が何首も出ておる訳でございます。それから万葉集の中にはまことに、ことだまのさきおう人の魂がことばにうつされて残された歌が多々ございます。

万葉時代当時の兵隊さんですがその人達が家を離れるときに本当に人間の心理を素直に歌い上げたものがたくさんあります。今ここで私がお読み致しても皆様すぐおわかりになつて頂けると思つて程に、ことばには自然と人間の心の通うものをもつておる訳でございます。その一つに「忘らむと野ゆき山ゆきわれくれどわが父母は忘れせぬかも」自分のお父さんやお母さんと別れて兵隊に来ると、もう二度と帰れないかも知れない、その時に忘れようとして野を越え山を越えてきたけれども、どうしてもお父さんやお母さんは忘れられないというふうにその気持をうたい上げたものでございます。ところが、大東亜戦争の時の事をお考えになつてごらんなさい。私の心を滅しななければいけない、滅私しなければ奉公は出来ないんだという天皇のもとにおける一つの概念化運動が起つた、私はいつか「化石化した」と申しましたけれども、忘れようとして忘れられないことを素直に認めたところにかえつて勇猛たくましい人間の姿が、国を守ろうとする姿がまざまざと映つてく

るのでございます。それを「忘らむと野行き山行きわれくれどわが父母は忘れせぬかも」というような歌をうたっているようでは、そんな意気地のない様な歌ではとんでもないぞ、おまえはまだダラシがない、滅私の精神が足りないと言われたのがあの大東亜戦争時代の形式化した臣道実践でありました。それは又大政翼賛と紙に書いて満足した時代でもあったのです。これによってかえって人間精神が高らかに伸びてゆくことを抑える結果になり、日本民族の精神はそこで沈滞していったのでございます。この意味で敷島の道というのはやはり「ことのはのまことのみちを月花のもてあそび」とは、おもってはならない、とおっしゃったのでございましょう。それはまた「いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道」とおっしゃったお心に通ずると思うのでございます。そして、「おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」思うことを思うがままに書いてごらんなさい、三十七文字並べてごらんなさい、歌のしらべになってもならなくともいいんだと、こういうふうにおっしゃっておられるのでございます。また、さっき私が引用した中にも、思うことを打ちつけにぱつと言ってしまう子供、思うことを打ちつけに言う幼な児の言葉はやがて「歌にぞありける」、言葉はそのまま歌であるというふうに言われる。歌と言ひ或は詩的精神、或は詩的表現、そういうものを練磨していくことによって人間精神が非常に巾の広い論理を克服していく世界に進んでいくことを示していると思うのでございます。

明治天皇は御一生の間に非常に沢山の御製を作っておられるに拘らず、明治四十五年お亡くなりになる年でございませう、「敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな」と残されている。しきしまの美しい大和心、人間お互が信じ合いながら生きていく大和心をなんとかことばにうたいあげたいと思つていられども、何ともことばが出てこない、自分のこのしましまの道の力をもつてしては、どうにもならぬ。このしきしまの道というのは、どこまで奥深いものであろうかと述懐されたのが大和言葉に対する明治天皇の御晩年の御心境でございませう。四十三年の「ききしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを」も同じ様な意味と思つてございませう。

### 明治天皇の人生観と自然観

そこで、そうした「歌」という題を中心にいま私はここに御紹介申し上げましたが、それと共に明治天皇がお考えになつたあの雄渾な明治時代というものの中に於ける明治天皇の御精神をしてみたいと思ひます。「波」と題して「あるゝかと思ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ」、人の世は波の様にある時は非常に緊張して高波を押立て、またある時は静かに進んでゆく、緊張と弛緩の交替である。緊張しているからといって緊張の持続をはかれば破滅に陥ることを示し、弛緩しているからといって悲観してはならない。極度に緊張して荒れるかと思えばまた沈滞したりする人間心理の実相、或は人間生活の静かなる波をお考えになられて「あるゝかと思ればなぎゆく海原のな



みこそ人の世に似たりけり」と歌われた。こうした人生そのものをそのままに把握しようとなさっていたのが明治天皇の御姿であろうと思うのでございます。「紅葉」と題して「うつろひて散らむとすなるもみじ葉をうつくしとのみ思ひけるかな」、色うつり変つて、今にも落ちようとしている真紅のもみじ、正にあした死せんとする運命、人の世の運命を御感じなさつたのでありましょう、その力を尽して散つてゆくもみじの葉を特に悲しむでもなく、うつくしいな、唯美しい、そこには何の頭の理智の働きも考えない、ああ美しいとのみ思つた。ああ美しいなあ、紅葉のマキシマムの状況だ「うつくしとのみ思ひけるかな」、この人間的な物の考え方、この中にはすでに宗教を現実の人間生活の中に統一した大きな一つの姿がこもっていると解される様に思うのでございます。それをもみじの葉が散る事によつて生と死を論理的に分析しなければ、その美しさを理解出来ないというならば、人間の精神というものは何とたよりなく、力のないものではございませんか、「うつろひて散らむとすなるもみじ葉をうつくしとのみ思ひけるかな」唯美しいと本当に思った、それをそのまま歌に御発表になられたものだと思います。

その次に「虫声非一」の題で「さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとし生ける物のおもひは」「虫声欲枯」の題で「かれ／＼になりぬる庭の虫の音はなかね夜よりもさびしかりけり」、この合宿でも虫の音が聞えております。さまざまの虫の音を聞かれておりながら、その虫の音の中にも人心を思われる、その博大な心の

持ち方、かかる心の持ち方はどうして我々日本人に育てられていくのであろうか。という大きな問題もそこにあるでございましょう。「自然と人生」は古くから云われた言葉でございしますが、自然の中に生きておる人生は自然の中に立っております。自然科学によって自然も駆使はしていきますが、また、自然の中に人間が立つておるといふ、その事実、自然は人生の中にございします。この虫の声を人の心の中に聞くことの出来る人もございしましょうし、これに理屈をつけてこねまわす人もございしましょう。またこれは人生以外の他者であるといふふうにきめる、唯物的な考え方もございしましょう。科学が自然を駆使するように見え、ついには自然が人生を駆使するとのみとられがちですが、決してそうではない。

自然を統綜する人生の姿―  
人間性をまもる学問の方向

自然科学が本当に大きく伸びていく陰には自然を統綜している人生の姿というものをやはり私どもは人間として考えて行くのが本当ではないかと思うのでございします。「かれぐになりぬる庭の虫の音はなかね夜よりもさびしかりけり」消えて行くような虫の音はなかね夜よりもっと淋しいものである、という特につくろいもしない、ありのままの人の姿でございします。先ほどの万葉集の「わすらむと野ゆき山ゆきわれくれどわが父母は忘れせぬかも」これもすなおな句でございしますが、それはいづれもつくろはない、つくろうことをまだ知らない子供の姿でございします。子供の姿の中に真の心が残っているのでございまして、それを大人が失いつつあるというその事実、更にそれに輪をかけて論理

の交錯をそれに加えて、めちやくちやに人間性を奪って行こうとしていることが若しはつきり確認されるならば、今日の世界における学問というものは一体何であるか、どんな方向を辿ろうとしておるのであるか。実に重大な問題をここに提起せざるを得ないのでございます。

小田村講師の話が終っても質問はでなかった。それは講義が質問によって論理の正確を期するものというよりも、むしろ如何に自分が感じ、意志し、生活に具現するか、その決意を各人に問われたものであったからである。それは質問という形で講師に迫るよりも、次に予定された全体討論の中に具体的に反映されるべき性質のものであった。

全体討論は今後我々は何をなすべきかというテーマのもとに終始厳肅裡に行われた。皆の発言は夫々充実した内容と、今後の決意を訴えるものばかりであった。その中の一部を列記すれば

昨夜のコンバと最後に行われた小田村講師のお話には強い印象を与えられた。今すぐ感想をまとめることはできないが、人間の情意の世界が如何に大きく人生社会を動かすファクターをなしているかを經驗的に知らされた。私には今まで詩歌とか芸術は感情的なもので、学問上では無視すべきものという先入感が強かったが、それはむしろ逆ではないか。偉大なる詩的精神が逞しい学術大系を生み、国家の興隆もはかるといふこと

こそ本当ではないか。マルクスの大系にしても、プロレタリアへの熱狂的な愛と、ブルジョアへの憎悪が、あのような大作を生んだのであろう。「詩と政治は相昇降する」という言葉もある。偉大な詩と夢が生れるような時代的背景なくして、立派な政治は育たない。たしかにそうだと思う。私は何としてもこの詩的精神を私自身にとりもどしたい。合宿後の出発はここからだと思っている。

私は終始三班にいて話しあつて来た。この四日間に聞いた話は、今まで大学や世間のジャーナリズムの中で自分が感じていた考え方の基準からすれば、非常に特殊な感じがした。しかしよく考えてみると特殊でも何でもない。当り前のことである。イギリスやドイツなどでは常識化されていることであらう。ところがこの当り前のことが、こういう合宿に來なければきかれないという所に、現代の世相のおかしさがあるのではないか。やはり日本全体が歪んでいるというより他ない。ここに我々の訴えなければならぬ問題点がある。

勝部先生からも提出されたことだが、現代精神の空白をうすめるといふことが、この合宿の一つのテーマになつたようだ。国文研はこのテーマをはなさないように、より深くより徹底して貰いたい。その為にこのような合宿を毎年毎年続けていって戴きたい。日教組とか全学連とかの問題はたしかに大きな国民的宿題であるが、そのようなものに対するものとしてはほかの実践団体がある。そういう運動は他団体にまかしてしまへというの

ではないが、国文研には国文研の使命があることを銘記されて、一路つき進んで貰いたい。

私は合宿で得たものを自分の信ずる方法で、兎に角やってみることだと思う。それにはどんな方法があるかを今ここで論議してみても、それは十人十色の結果がでるだけだ。私達がこれからわかれ各人一人一人が民族の運命を背負う気持で何かやることだ。やろうとすれば困難は起ろう。その困難を乗り越えねば開かれぬ私達の道である。

私もはじめてやって来て、この会が各人の自主性と人格を尊重する自由思想に立脚して運営されているのがとても気に入った。これから帰ってからもこのような態度で、各地に研究サークルをもつべきではないか。これが必ず「地の塩」となって国民生活をうちに支えるにちがいない。

今誰かがいわれた地方別サークル活動をもつという具体案に賛成する。既にできている所も多いときくが、各地で是非作ってゆきたい。仮に来年このような合宿をやるとしても、それを足がかりにすればよい訳だ。兎に角来年の合宿に備えて、各人がサークル活動の組織者になるべきだ。

このような雰囲気の中に小田村講師は発言を求め、次のように全体討論を結論づけられた。

先程誰かが「この会は名前なんかなくてもいいんじゃないか」という発言があつたが、非常に適切である。世の中にその運動の展開の方針や方法のために、何々会という名前を作つて動かねばならない組織が非常に多い。又それが大切な時代である。しかし国文研のようにいかなる会合でも運動でも、それがいいものであるならばどこへでもいって協力してそれを大きくする。そういうグループがこの世の中に一つくらいあつてもいいのではないか。それからどなたかが、講師の中に国文研の趣旨とちがうような講義をされた方がいたことを指摘されたが、これは少し問題のあつかい方が違つてゐるのではないか。この合宿は講義をそのままけるとる会ではない。むしろ特定の思想にかたまつてはならないということを趣旨とするといつてもいい。そういう意味でこの合宿では一つの思想を示したということではなくて、人間のあり方の問題を思想以前の問題として、思想も含めた問題として、みんなで検討し体験し経験しあおうということがねらいであつたように思う。

それから今迄に出た意見の中で、具体的にサークルを作りたいというのがあつたが、これも仮の名前として「国文研」で作るのも結構であらうし、又別の名前で作るのも結構と思う。その時川井さんの引用された聖徳太子の「一人出家すれば魔宮皆動ず」というのがあつたが、一人出家する思いで志をのべるという勇氣、それがいかにむつかしい勇氣であることか、組織や団体の力を借りて志をのべるよりも、ただ一人で訴える方がどれ程むつかしい事か、その勇氣と決心が皆様方に生れるならば、この合宿は大きな成果である。そういう勇氣ある人が、一人になり二人になり、十人になり、そしてしまいは会の名前などはかなぐり捨てて、全日

本国民の歩む道として確立されることが、真の意味での国家再建の道である。そういう国文研の一つの考え方を紹介しておきたい。

かくして緊張した一時間の全体討論は終わった。私達の会は元來決議文を上程したり、指令通りに動くという性質のものではない。お互を信ずる深い友情によって、国民生活と共に展開され相續されてゆく連続無窮の生活体系である。お互を信じあうことのできるゆたかなよろこびに支えられながら、会場は閉会式場にきりかえられた。

川井氏は真情あふれる面持をこめて閉会挨拶に立った。氏は壇上に一言二言趣旨を述べながら、途中で胸迫って声を吞んでしまった。それ以上の言葉は嗚咽となって壇上に佇立してしまつたのである。つたない我々の合宿運営にも、献身的な御協力をおしまれなかつた参加者皆様への感謝の気持が氏の胸をついてあふれてたのであろうか。合宿実現への全責任を負うてここまで到達した感慨が、一度に急流のように流れてきたのであろうか。祖国の命運に馳せ参ずる国文研の本懐が、氏の心を根柢からゆすつたのであろうか。明治の詩人は

こゝろ知る友と語れば心なごみながるゝ涙とどめかねつも

と歌ったが、合宿四日間は参加者すべてを心知る友として結ばせてしまったのである。同民同信同胞生活は氏の「ながるる涙」とともにここに実現せられたのである。

一同肅然として声なく、感動の去来するうちに国歌「君が代」は合唱される。四日間にわたって全ゆる角度から論じ叫ばれた魂の殿堂に、今壮嚴なメロディは流れる。それに合奏するかのよりに谷川のせせらぎの音が涿々と千古の響きをつたえている。眼下に見下す春日湖畔を通して、はるかにも民族の回想は走馳する。南溟の空に朔化の雪原に、この歌と共に歩んだ、思えば遠い民族の行程であった。日本民族として時に間違も犯し、反省批判すべき点もあることはあったであろうが、戦争平和を通じ、戦勝敗戦を超えて、民族の心の故郷はこの国歌の中にあった。今敗戦という虚脱から脱却して、独立国家としての心情をこの歌の中にくみとりつつ、高らかに君が代は歌われる。我々はこの感激と共に、いさぎよく春日の森を去っていったのである。

合宿記録をとちるにあたって、炎熱の中を遠く佐賀の地にまで運ばれた参加者皆様の御健康を心からお祈りすると、共に又何時の日か会う時まで幸あれと祈りつつ、この報告を終る次第である。



合  
宿  
感  
想  
集

加藤善之  
藤本辰男  
今村豊重  
山口純子  
山口純子  
笹川幸子  
田川和昌  
小島  
岡崎  
行武靖  
宝辺正久  
• • • • •

## 合宿しぬびの歌

高瀬伸一 遺作

今ごろはみ友らつどいにぎはしく合宿の式始めますらむ

人数は少かれどもにぎはしき合宿ならむ友らの合宿

ましみずの流るゝいのち生れまさむ合宿しぬびえたへずわれは

み友らのわかきちからにすめ国を支ふる力わきいづるらむ

つくるなきかたらいならむぬば玉の夜をかけての友らのかたりは

なつかしき先輩のますかたはらに坐せむねがいのいやしくくくに

相別れ離れ居れども相ともにしぬぶ心に生きむとぞおもふ

かぎりなきおもひをはせて今日の日やいねむとぞおもう筑紫路にして

(昭和十八年十月)

## 私欲とイデオロギーを超えたもの

奈良女子大学

笹川幸子

四日間の共同生活の底に流れていたものは、イデオロギーにも私欲にも支配されない、人間そのものの真情であつたろうと思います。私はこの生活を通じて人間としての私を感じ考えていることが、あるイデオロギーには受け入れられないものであるかも知れないが、決して間違っていない、間違っているどころか、それこそ最も正しいのであると確信できるところになりました。「国を愛する」というごく自然な、美しい心情を知った私は幸せであると思います。皆手をとりあつて、人間のための美しい社会を、この愛する国土の上に実現してゆきたいのだと願わずにはおられません。

## 合宿意気に感ず

長崎大学経済学部

田川和昌

昨年もそうでしたが、今年も何だか頭をゴツンとなぐられたような気がします。感激しました。この感動はくりかえし僕の胸に甦らせてゆきたいと思います。誰かが「合宿に参加する前の僕は白紙であつた」といいましたが、そうではないでしょう。赤青黄緑と、色々な色が混在して、何とも言えないきたならしい紙となつていたのです。このよごれきつた紙が、合宿の進むにつれて次第にきれいになつていったような感じがします。今はすがすがしい気持です。

今朝小田村先生が歌を紹介された時、歌の作者を明治天皇と明言されなかつたら、僕らは明治天皇の御歌であるとは決して思はなかつたでしょう。天皇に対す

る僕らの考えはよこれきっていました。又コンパの席

上で酒をのみながら聞いた「しろじにあかく」程美しい歌を聞いたことはありません。「日の丸」の旗をこれ程美しく感じたことはありません。今からの僕はこんなよこれた感情をおいはらって、白紙になることで一生懸命になるでしょう。正しいものを正しいとし、間違っているものを間違っているとすることが僕の信念です。

家に帰って頭の整理をします。講義の内容もすばらしくて、何か威圧されたという感じです。落ち着いたら「あの先生の言われたことは正しいのか？」という点から、勉強のし直しをしたいと思えます。

## 人生の開眼

昭和女子大学

山口純子

私は国民文化研究会の名さえも知らずに、唯「合宿」のお手伝をさせて貰おうと思って、春日山に参ったのです。ですから最初はよく普通にやる合宿のつもりで安呑にかまえておりました。しかし会の雰囲気が始まると、ただならざるものを感じずにはおれませんでした。かもしだす雰囲気は、小さな私の心に重石のように、ずっしりとかかって来たのです。私は一時たじろいでしまいました。傍のスーツケースを見ながら、これをかかえて山道を降る時が早くくればいいと思ったりしました。しかし時間の経過とともに、壮厳ともいわれる合宿の雰囲気は私をとらえてしまいました。先生達のやさしい言葉に導かれなが

ら、知らぬ間に夢中で過していたのです。

お仕事をしながら切れ切れに聞いた講義や自由討論の中から感じたことは、私自身の勉強の浅薄さと、真剣さの欠除でした。そして今までの私の勉強がいかに自己中心で、反省を忘れた思いあがった態度であつたかを、強く知らされたのです。ともすれば惰性で生きていた一年間をふりかえれば、私は生きる指標や支柱を失っていたといえましよう。そこへ思いもかけず強い心の鞭を与えられました。私は今前途への大きな希望と、生きる喜びを見出したのです。それは行ききれていた闇路に、突前目前がバツと明かるくなつたような感じと申しあげたらよろしいでしょうか。

私はかつてこのような真剣な情熱をもつた会に参加したことはなかつたし、このような謙虚さと一すじの追求の態度に終始する学生生活の一面さえも、経験したことはありませんでした。そしていかなるゼミナ-

ルも、これほど研究への刺戟と興味を与えてくれたことはなかつたのです。

合宿のプログラムが進行するとともに私は何時の間にかこの合宿にひたむきな愛着を抱くようになっていました。合宿最終日がやって来るのが勿体なく、そして名残おしく、妙に寂しいものさえこみあげてきました。この合宿はやがて私に生きる方向転換をさせることとしようし、長い人生で迷いを生じたら、必ず慈母を慕うようにこの合宿をふりかえることとしよう。この会に参加できたことを心から感謝致します。

ここに本当の先生があつた

鹿島工業所

小島 晃

八月二十日、整備課長に研修会に行けと言われて「何か自動車の講習ですか」と聞くと「いや社会学だよ」と答えられてびっくりしました。そして二十一日に鹿島からバスで来たのですが、バスの中でも何だか心配のような気がしました。そして来てみますと先生方ばかりなので更に驚きました。しかし私が何より驚いたことは、ここに参加された先生方が皆真剣そのものであつたことでした。

実は私は今迄先生には根強い不信感があつたのです。私の会社に此間勤評反対のリボンをつけた先生方が、総評系の労組幹部と一緒にやって来て、スト突入を煽動していたからです。会社の実情も何も知らずに

共同斗争とかいって何やらわめいていました。私にはむつかしいことはわかりませんが、ああいう先生方に私の子供をまかしたくないことだけははっきり言えます。私はそういう先生を唾棄する思いでながめていた矢先に合宿に来たのでした。ところがこの合宿に参加された先生方は皆ああいう先生の状態を憂えている人達ばかりでした。ここに本当の先生の姿を見ました。私も今迄平凡に修理工をやっていましたが、会社のため、いや国のため何かやらなくてはとひどく胸をうたれました。日本人はやはり日本人、先生も修理工もやっぱり心の中を通じるものがあるんだとつくづく思いました。先生方お身体に充分気をつけられて頑張ってください。お願いします。

## 祖国の根柢を培うもの

鹿児島市立伊敷中学校

今 村 豊 重

大きな期待をもって馳せ参じたこの合宿は、果して自分の信念を更に強くしてくれた。当面の教育諸問題について前々から懸念していた自分にとっては、前途は決して憂うるに足らずという自信が得られた。それは国家の前途を憂うる同志が幾多あることを発見したからである。職場を超え地域を超えて、同じ彼岸を目指して苦心している多くの方々と、寝食を共にして過した三日間は省みて感激の連続であった。ここ春日山の一木一草に至るまで今自分の心境と共に生き生きと感ぜられて来る。

山川草木、誰か国土を忘れ得よう。我々の生命を育んだこの緑の国土、永い歴史に築きあげられた美しい

伝統、それらの中から培われたものが新しい国家建設の原動力である。それは簡単に理論で展開されるような安価なものではあるまい。ここに集った方々も自分と同じように言葉で現せなくても、根柢をなす根強い感動の源泉でつながったことと思う。今こそこの感激を発揮すべき時ではないであろうか。日本の歴史は我々に強い決意を促している。今これに応えずして日本の運命はどうなるであろうか。かく心につぶやきつつ私はこれから春日山を降りるのだ。

## 混迷の中に見出した薄明

吹田市立豊津中学校

岡 崎 博

私は未熟な青年教師の一人でありませんが、およそ過去に参加した研究会や講演会には味えないものを経験

しました。「期待にそむかなかった会」私の頭の中にこの一語につきる何ものかがこびりついております。この混迷した日本にあって、救国を心に誓い、精神的支柱を求めようとして真剣に討論しあつた姿、この姿が私の脳裡にやきつけられているのです。

夜を徹してはげしくたたかわされた論議、それは相手のアゲ足をとる為のデスカッションではなくて、互に日本の前途を憂うる真剣な心情によって貫かれたものでした。私はそのきびしい試練の中に立たされて、今後如何に進むべきかという問題に強い暗示を与えられたのです。それは具体的にこれといって今すぐに示せるものではありません。それは今迄自分が悩んでいた問題に薄明がさし、今迄の悩みの大きさが五分の一にも縮められたという感じなのです。その五分の一に縮められた問題はどんなに難かしいものであるかもわかりませんが、その解明への努力を自分は生涯続けねば

ならないことも改めて自覚したのです。

明日から教壇にたつ自分が、今迄よりも大きく前進した確信のもとに生徒にふれあい、同僚とも語りあえるだろうとの喜びにふるえながら、これから山をおります。

### あふれくる救世の自信

八代工業高校

藤 本 辰 男

現代の日本に於て最も偏向と矛盾の多い所、それは教育界ではないかと思ひます。それを痛感し悩みぬいた数年間、意を決して昨年三月、日教組より敢然離脱し、身を挺してその偏向是正の為の努力を重ねて参りました。しかしそのたたかひの体験の中で、まだ釈然としない課題が内心に横たわっております。しかしこ



の合宿を通じて、国民の危機、国家の危殆がよって来る所は奈辺にあるかが明確に意識の上に浮びあがって来て、強い救世の自信を得られたことを非常に喜んでおります。この合宿では私達が教育界に於てなすべきことは具体的に示されなかつたが、ここで得た精神的基底を培いながら今後の実践活動に邁進したいと思ひます。合宿が終つて思うのですが、何故もつと早くこの会とその求める深い思想的背景とを知らなかつたのか。これを知つておれば生徒にはもつと早くから幸福な学生生活を送らせることができたであらうと思ひとき、残念でなりません。

最後にこの研修会が私にとって生涯忘れたい記念となつたことは、息子（九大経済学部）と共に「親子連れ」で参加したことでした。恐らく来年も、再来年も、生きておる限り私達はこの合宿に参加するでありましょう。このような機縁を与えて下さつた加藤先生に感謝します。

すべてを覆いつくすもの

修猷館高校勤務

行 武 靖 枝

明治天皇の御製を聞きながら、涙が溢れてきました。昨日まで知りたい、理解したいという気持が、すうつと消えて、今まで経験したこともない涙が、人前をはばかりる気持など無視してしまつて、胸の奥底からつきあげて来ました。

感想をとのことで、先程までの合宿生活のことを考えていますと、またしても涙が溢れます。

明治天皇の御製をきいてからというものの、その溢れる涙が、この合宿生活のすべてを覆いつくしてしまつたようです。

このはじめて経験した、静かなしみじみした涙が、胸をついて溢れ出て仕方がないということ、今はただそれだけをいうのが精一杯です。

「故郷には多くの里人がいた」

會員 加藤 善之

戦いに敗れて以来、私共の考え方は一つ一つが切り崩され、悪霊が忍びよるがごとくに、自らを形成する力となるものは一つとして求めることができなかつた。学生生活の中にあつても、社会生活の中にあつても、私共がそれを求め且つ社会がそれを受け入れてくれた考え、又普通の男女が求めしかも社会も求めていた考えというものは、われわれの本能から派生する考え以外の何物でもなかつたように思われてならない。肉欲礼讃、營利主義、利己主義、利己的強韌さへの渴望（これらは一面では日本民族の生命力の逞しさを示し、戦後の画期的な復興の原因の一つともなっていることを淋しくも肯定しないわけにはゆかないが）等々私共は何時でも巷で見聞し、又自ら求めている。更に

もう一つ、社会がいかにも受け入れそうな素振りを盛んにみせる思想がある。日本人を誹謗し、否定すること、日本人が考えてきたこと、行つてきたことはその創生の昔に遡つてすべてが誤つており、しかも現代の日本人の歴史の理解の仕方に誤りがあるというだけでなく更に、その昔その時代に生きていた人々の考えさえも誤つていたとするような思想（一片の理論を基準とするだけで、何に對して誤つていたのか少しも解明することなく）、従つてより立派で本當の真理に基いた思想、即ち平和で人類愛にみちた思想の下に理想的な社会を築かねばならない、その理想の実現が可能な社会はこれこれの社会でなければならぬ、という思想である。私共の社会が一般的に受け入れて無難なのは大体これ位の思想か、これに近似したものでしかない。そのためか何も知らずに戦いに敗れ打ちひしがれた魂では黙して聞くか卑屈な笑を浮べるしかできな

った程のお人好しの日本人が多かった。かくして時は去り終戦時の子供が立派に成人するまでの時代となった。

然しながら、こうした流転のさ中であって絶望、無感動、寂漠の人生生活の過程にも何かしらある何物かが流れ続けていたように思われる。私自身にもそれがあつた、十年余の間、片時も忘れることのできないものの、片時も捨てさり難い人生の感動、ゆずることのどうしてもできぬ巨大な何ものがあつた。その点に関する限り、一歩たりとも引くことのできない、心の底でかすかながらも燃えつづけくすぶりつづけていたのだが、それはまことに簡単な小さなしかし堅いものであつた。『日本が勝ちたい、日本を護りたい』、そのためには『戦いの場に行こう』というこの一点が私の十代のかなしい真情であつた。この言葉を口にすることは戦後社会から拒否されることを意味した、お前は

だまされたのだと多くの人に説得された、読んだ本の殆んどすべてにもそのような響きがあつた。だが祖国への真情というものはだまされて生れるようなものではなかつた。祖国という無意志、無思想、無言の歴史の現実、生命の實在は私に何ものも要求はしなかつた。私は自ら選び、自ら求め、自ら進んで行つた。私共の数多くの先祖も、又私の父も母も一人の妹も、そして多くの同朋も自ら求め、自ら願ひ、自ら進んでいった。(時には反感も抱き、怒りもした人もあるかもしれない、われわれ人間という凡夫にそれ位のことではあつたであろう、だがそれにしても多くの日本人は願つていたことであろう、祖国を護ることを)。だが祖国は常に黙して語らなかつた、戦いに勝つた時も、敗れた時も、喧嘩の時も静かなときも、祖国は何ものも要求はしなかつた。

私共はただ春は鳥に哭き、夏は海辺に戯れ、秋風の名

月に散策し、小枯しの夜を狭いわが家での語らいに過して来た。その間にあって祖国は我々に何も語りはしなかった。それでは祖国とは何か、それは恋人でもなく、父や母でもない、私の前に一度たりとも立ちはだかつたことのないものだ、私に話しかけてくれたこともない。『真に譲託するにたる内的存在があるとしたならば、それは祖国日本である』。

ある夜いろいろな語らいのうちここの語ってくれた人があった。私もそう思った。静かにそして毎日を普通に生活している人の言葉であった。私はこの時から国文研という、否日本という故郷へ十年余にして再び帰ることができた。故里には多くの里人が生活していた。私もそのような里人の心に少しでも早く帰れるように努めたい。冷い自らの心を日々みつめる苦しさをぬぐい去り度い。そして再び自ら求め自ら前進してゆくのだ。

## 感想集を拝読して

会 員 宝 辺 正 久

合宿を終えて過ぎるに早い月日がたちました。佐賀川上での四日間の生活は、それぞれに新しい出発を覚悟させるものを生んだのだと、感想録をくりかえし拝読しながらありがたく思いました。

我々が合宿で体験し得たもの、もしくはうみ出したいと思ったものは、民族、国家などの言葉をやたらに叫んで仮装敵を予想する狂信的ナショナリズムの雰囲気でもなければ、階級観打破、国民一体感の空念仏でもありません。そんな観念主義的な結論を云々する以前の探索に、我々の心を集注させたのでした。いわば正しい人間観の確立と、現実の事態をいかに把握するかの方法を発見する為の合宿であったといったらいじょうか。

我々の祖先の足跡をそのままにながめる時、世界のすぐれた異賢文明を奮斗悲劇のうちに摂取しつつ、個性あきらかな国柄と文化を創造保持してきたことは、そのまま豊かな人生とたたかいの詩でありました。対立、嫉視、斗争も偽らざる人間の一面であって見れば、そのようなあるがままの現実人生の中をふみわけ、悲劇に

たえ得る素朴強靱な精神をもつて、協力と統一を実現して来た事實は、また偉大なる民族の交響楽といわれましよう。合宿中我々が連なろうとしたものは、そういう世界ではなかったでしようか。我々はおのれの正体である日本人と、その祖国日本をこのように感じ、このように考えればこそ、国を愛することはごく自然の心情であろうと思います。それを祖国愛と名づけようと、民族共同体と名づけようと、自由であります、現下最も強く復活を期待されている要素であることは間違いありません。

合宿を通じて諸兄姉が今後の力ともなるべき感動をえられたとするならば、それは全体的に高揚した雰囲気 が伝染したというようなものではなく、くり返し申しますが、諸兄自らのそれぞれの追求心がかちとられたものであると信ぜられます。「不思議な感動」と感想文につづられた方もありましたが、それはおそらく心が通いあったという事実によるものかと思われまます。

参加諸兄の中には会社員、公務員、学生、生徒など年令や境遇の開き男女の別さえありながら、全人格をかたむけて語られる言葉の前には、自分が執着をもつ論理も主義も、あるいは知識的解明欲も圧倒されて、強い実感、共感が心を占めてきました。今迄考えてもみなかった祖国というものがおぼろげながら実感されてきた時、見も知らなかった人達におぼえる親愛の情、それらが感動の内容ではなかったかと推察されます。そうした感動を抱いて我々は別れたのです。聖徳太子のおことばに「信は是れ義の本なり。事毎に信あるべし。其れ

善悪成敗かならず信に在り。群臣共に信あらば何事かならざらむ。群臣信なきときは万事悉く敗る」とありま  
すが、これは太子の国民教化の御事業の核心をなす、千古を貫く不敗の指標と信じますので、このことばをし  
をりに、合宿でえた各人の「なにものか」を更に再思してみましよう。

国家民族をその分裂崩壊から防ぎ護るためには、分裂におもむく人心と言論に対する精緻な批判力と同時に  
あく迄も内にたたえられる統一感を必要とします。対立斗争に執着するあさましさを嘆じながらも同胞の必  
ずや和協力にいたるであろうことを信ずる強い意志を必要とします。「祖国」への実感と創造力の、当然強  
かるべき過ぐる戦時においてさえ、指導的役割をになつた人達の一部には国民同胞を政策の手段視して権力の  
掌握に狂奔し、また概念弁証を以て国家の運命を企画するなど、日本の現状を招来せしめた原由は遠く深いも  
のがあるといわねばなりません。内にたたえらるべき豊かな国民同胞感、そのみが祖国を分裂崩壊から防ぎ  
護る日常の思想行動の力源であります。実感こそが他に実感をよびさまし、精神が精神を、意志が意志をよび  
おこす。私共が合宿という方法を通じて世に問うて参りましたのも、不十分ながらこの当然の理を試みている  
次第であります。

あるいは合宿中のノートを整理されながら、いろいろ所感を新たにされてをられるであろう諸兄の上を偲  
び、御健斗を祈りつつ一筆感じたままを記しました。

編集後記

名越二荒之助

▼マスコミは豊富な資金とコマージュリズムを駆使して、街頭に氾濫するばかりである。その時私達は零細な淨財をもってこのような小冊子を出血出版する。それは洪水の中に投ぜられたコップ一杯の水にしかすぎぬであらう。濁水の中に一杯の水は跡形もなく消えてしまうことは例えるまでもないことである。しかし禅門の達人は山中の草庵にあって、一杯の水で江戸の大火を消しとめたという。この冊子を読まれる方達が、底に流れる真意をよくのみとられるならば、一杯の水はやがて洪水をすまし、大火を消しとめる力となることを信じ、心をこめて皆様方の手もとにお送りする次第である。

▼合宿記録「中表紙」裏に転載した詩は、今は亡き国文研の思想的先達田所広泰の遺作である。我々の合宿は特定のイデオロギーで理論武装する洗脳教育の場ではない。混沌とした世情の中に「生の認識」を確認するための、内心の試練の場である。詩にうたわれたように「榮衰無限の流転の相」の中に「生死の輪廻」を重ねつつある人間そのものの認識の中から、我らの行くべき道を求めんとするのである。それは「永久の生をこいねがう」人間探求の必然的欲求の現れである。詩は「本能と感情の無間地獄」の中におかれた人間苦悶の声を重



厚な意志力でうたいつつ、「よみかえるべき生の泉」は「友らとの語らい」の中よりほかないと匂わせて終っているのである。生の苦悶の中に自らを救うものは、友情的心楽の世界しかない。それが同胞感発露の源泉であらう。この詩のもつきびしい追求心に勇気を培われたいと念じて、敢て紹介した次第である。

▼本報告書における講義以外の部分は、わが会の先輩にあたる共同通信社浜田収二郎氏から色々指導を戴きながら、筆者が書きおろしたものである。その間録音の不備、記録の喪失などあって、記憶をたどりながらまとめた点が多いから、講師はじめその他の方々に失礼にわたる点があるのではないかと危懼している。御了察を乞う次第である。

▼ここにこぎつけるまでに岡山の会員杉本幸二氏、富岡栄八郎氏に色々御協力を戴いた。ここに附記して謝意を表したい。

▼最後にこの記録に登場した五人の故人は、国民文化研究会の先駆者として散華した人達ばかりである。そして皆合宿地佐賀の地にゆかりは深い。ここに夫々の墓碑銘をきさんで紹介に代えたい。

佐高在学中より幾多信友の指導的存在として敬慕の的となった。その人格は青年像の典型といったらいいであろうか。歌うがごとき詩的韻律にみちた精神生活は、劇詩「名草の妻」を生んで作品的に不朽の価値をとどめている。東大在学中昭和十八年六月八日絶唱二首と共に九大病院に永眠、その莊嚴なる最期は並みいる諸友に今尚不滅の感動を喚びつつある。享年二十五才。

(名越撰)

## 百武礼之

佐高、東大を通じて「江頭、百武」は常に形影ともなう学生運動の双壁であった。謙虚ななかにたくえられた凜乎たる発言は、常に並みいる聴衆を感動の中に投じていた。自己に課せられた幾多の研究テーマと精神的業績を残して南方に転戦、陸戦の華と散るまでの短い生涯は、さながら一篇の詩劇を思わせるものがあつた。

(名越撰)

## 寺尾博之

高知高校から東大農学部に進む。その間不信混乱に傾むく祖国の思想動向を正すべく同志諸友の先頭にたつ

て奮斗した。戦時国策を破局に導かしめてをった政治経済理論の誤謬を学内外に反覆指摘しつつ、久坂玄瑞等の遺歌を好んで愛誦した。朗々たる戦斗的生涯を貫ぬくものは求道懺悔の至誠であつたらうか。海軍に應召、少尉に任官の後、昭和二十年八月二十日敗戦の責を負うて自ら命を絶つ。碑は自刃の地、福岡市郊外油山に建てられてある。享年二十五才。

(宝辺撰)

高瀬伸一

昭和十六年、佐高に入学するや、遙かに黒上正一郎氏の血脈にふれて、真摯なる求道生活をつづけた。短軀に溢れる情熱と、豊かな詩情は数多くの信友の心を結ぶ中心的存在であつた。後、海軍に應召、昭和二十年七月、呉軍港において乗艦「伊勢」と運命を共にした。享年二十一才。高校在学中、新潟県弥彦山麓に病を養つたことがあるが、北国を背景に歌われた数々の和歌は、今もなお故人の生命の律動をまさまさと伝えてゐる。

(小柳撰)

末安悟郎

苦惱濁乱の世にすこやかに伸びた天来純潔の生命が敗戦混迷の時代を一瞬の光芒をなしてひらめき、そして

無明の闇に没した殉教者の生涯であった。昭和十八年、佐高において幾多の友との心のつながりを知ったのも束の間、昭和二十年信友高瀬伸一を失い、更に同年八月二十日、稀有の友情を以て結ばれし寺尾博之、福岡南郊油山中腹において自刃、その後を追うがごとくに、昭和二十一年八月、戦死者慰霊祭の夜、病床にたおる。九月逝去。享年二十三才。

(小柳撰)

佐賀合宿を運営した講師並びに会員紹介

(五十音順)

青砥 宏一 徳島高工卒、現在島根県玉造にあつて「こんや旅館」経営

厚地 章 鹿児島県出水高校教諭(国語科担当)

岩崎 太朗 関西大学卒、大阪府豊津中学校教諭

岡崎 博文 下関市日新中学校教諭

小泉 一也 長崎高商卒、現在長崎にあつて三菱造船勤務

小川 幸男 熊本医専卒、医学博士、現在都城中央病院長

小田村 寅二郎 一高、東大政治学科を経て現在株式会社すみだ製作所経営、父母会議常務理事

加藤敏治 山口高商、九大経済学部卒、現在米穀会社経営、八代市教育委員

加藤善之 海兵、九大経済学部卒、現在下関にあって山陽電軌KKに勤務

勝部真長 東大卒、現在お茶水女子大学助教

川井修治 松江高校、東大西洋史学科卒、現在鹿児島大学助教

菊池紳隆 東北大卒、総同盟中執委をへて現在超心理学研究会会長、日本労働者教育協会理事

木下彪 宮内省御用掛、外務省研修所講師をへて現在岡山大学教授

小柳陽太郎 佐賀高校、九大文学部卒、現在福岡県修猷館高校教諭

末次祐司 台北高商卒、現在佐賀工業高校教諭

瀬上安正 五高、東大農学部卒、現在熊本県庁勤務

宝辺正久 山口高校、東大文学部卒、現在下関にあって石炭商経営

富岡栄八郎 五高、九大政治学科卒、現在岡山県玉野商業高校教諭

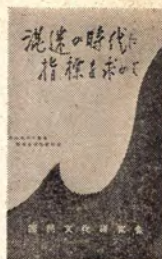
名越二荒之助 山口高商卒、現在岡山県笠岡商工高校教諭

林 栄一 山口高商卒、現在宮崎県にあって肥料商経営

百崎素明 長崎高商卒、現在八代市役所勤務

森 三十郎  
山田 輝彦

五高、九大法学部卒、現在福岡大学教授  
佐賀高校、九大文学部卒、現在福岡県若松高校教諭



## 国民文化研究会が残した三つの足跡

「混迷の時代に指標を求めて」

昭和三十一年八月十九日より二十二日まで南九州霧島で行った研修記録

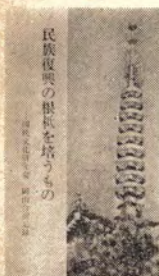
A 五版一〇〇頁 頒 価 一五〇円



「民族自立のために」

昭和三十二年八月二十日より二十三日まで福岡市百地社会教育会館で行った  
研修記録

A 五版 五三頁 頒 価 五〇円



「民族復興の根柢を培うもの」

昭和三十二年八月二十四日より二十六日まで岡山市護国神社で行った研修記  
録

新書版 一二三頁 頒 価 一〇〇円

(右何れも残部が少々ありますから必要の御方は巻末発行所  
か連絡先へ申込んで下さい)





昭和三十四年四月十日発行

頒価 二〇〇円

発行所

熊本市池田町九九九

国民文化研究会

(振替熊本三一九九)

連絡先

鹿児島市山下町一七  
鹿児島大学官舎

川井修治

//

福岡市荒江幸の前 小柳陽太郎

//

岡山県小田郡北川村 名越二荒之助

//

東京都港区赤坂青山南町四の二二 小田村寅二郎



